

根 方 遺 跡

主要地方道竜ヶ崎阿見線バイパス
建設事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ

平成 23 年 3 月

茨城県竜ヶ崎工事事務所
財団法人茨城県教育財団

ね かた
根 方 遺 跡

主要地方道竜ヶ崎阿見線バイパス
建設事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ

平成 23 年 3 月

茨城県竜ヶ崎工事事務所
財団法人茨城県教育財団

序

茨城県では、平成12年に茨城県長期総合計画を改定し、「愛されるいばらき」を実現するため、長期的な展望のもとに県土の基盤整備を行っています。特に道路網については、県土60分構想実現のための道路整備を推進しているところです。

その一環として、茨城県竜ヶ崎工事事務所は、稲敷郡阿見町追原地区において、首都圏中央連絡自動車道阿見東インターチェンジへのアクセスや周辺地域の交通渋滞解消等を目的として、主要地方道竜ヶ崎阿見線バイパス建設事業を決定しました。しかしながら、その事業予定地内には、埋蔵文化財包蔵地である根方遺跡と小作遺跡、米根井向遺跡が所在し、記録保存の措置を講ずる必要があるため、当財団が茨城県竜ヶ崎工事事務所から埋蔵文化財発掘調査の委託を受け、根方遺跡は平成21年5月から9月まで、小作遺跡は平成21年2月から7月まで、これを実施しました。米根井向遺跡については、平成20年6月から7月までの調査成果を当財団の『文化財調査報告』第333集で報告しているところであります。

本書は、根方遺跡の調査成果を収録したものです。学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、教育・文化の向上の一助として御活用いただければ幸いです。

最後になりますが、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である茨城県竜ヶ崎工事事務所から多大な御協力を賜りましたことに對し、厚く御礼申し上げますとともに、茨城県教育委員会、阿見町教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に對し深く感謝申し上げます。

平成23年3月

財団法人茨城県教育財団
理事長 稲葉節生

例 言

- 1 本書は、茨城県竜ヶ崎工事事務所の委託により、財団法人茨城県教育財団が平成21年度に発掘調査を実施した茨城県稲敷郡阿見町大字追原字房内1454番地の5ほか^{みまろ}に所在する根方遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査期間及び整理期間は、以下のとおりである。

調査	平成21年5月11日～9月30日
整理	平成22年4月1日～8月31日
- 3 発掘調査は、調査課長池田晃一のもと、以下の者が担当した。

首席調査員兼班長	成島一也	
主任調査員	飯田浩彦	平成21年7月18日～9月30日
主任調査員	寺内久永	平成21年5月11日～8月31日
調査員	作山智彦	平成21年7月18日～8月31日
調査員	永井三郎	平成21年7月18日～9月30日
- 4 整理及び本書の執筆・編集は、整理課長樺村宣行のもと、以下の者が担当した。

首席調査員	寺内久永	平成22年5月1日～8月31日
調査員	関 絵美	平成22年4月1日～4月30日
- 5 本書の執筆分担は、下記のとおりである。

寺内久永	第3章第3節～第4節
関 絵美	第1章～第3章第2節
- 6 本書の作成にあたり、出土瓦の系譜については、千葉県市川市立市川考古博物館の山路直充氏にご教授いただいた。

凡 例

- 1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第IX系座標に準拠し、 $X = +1,880$ m、 $Y = +37,800$ mの交点を基準点 (A 1a1) とした。なお、この原点は、世界測地系による基準点である。

調査区は、この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々40 m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々10等分し、4 m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C…、西から東へ1、2、3…とし、「A 1区」「B 2区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へa、b、c…j、西から東へ1、2、3、…0と小文字を付し、名称は、大調査区の名称を冠して「A 1a1区」、「B 2b2区」のように呼称した。

- 2 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構 SD - 溝跡 SH - 竪穴遺構 SI - 竪穴住居跡 SK - 土坑 SN - 粘土採掘坑
遺物 DP - 土製品 M - 金属製品 T - 瓦 TP - 拓本記録土器 Q - 石器・石製品
土層 K - 攪乱

- 3 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

- (1) 遺構全体図は600分の1、各遺構の実測図は原則として60分の1の縮尺で掲載した。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。
- (2) 遺物実測図は、原則として3分の1の縮尺で掲載した。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。
- (3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。

	焼土		火床面
	竈部材・粘土範囲・黒色処理		煤・柱あたり
●	土器	○	土製品
□	石器・石製品	△	金属製品・鉄滓
■	瓦	---	硬化面

- 4 土層観察と遺物における色調の判定は、「新版標準土色帖」(小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社)を使用した。また、土層解説中の含有物については、各々総量で記述した。

- 5 遺構一覧表・遺物観察表の表記については、次のとおりである。

- (1) 現存値は () で、推定値は [] を付して示した。計測値の単位はcm、gで示した。
- (2) 遺物観察表の備考の欄は、残存率、写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。
- (3) 遺物番号は通し番号とし、本文、挿図、観察表、写真図版に記した番号と同一とした。

- 6 竪穴住居跡の「主軸」は、竈を通る軸線とし、主軸方向は、その他の遺構の長軸(径)方向と共に、座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した(例 N - 10° - E)。

目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
根方遺跡の概要	1
第1章 調査経緯	3
第1節 調査に至る経緯	3
第2節 調査経過	3
第2章 位置と環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 調査の成果	9
第1節 調査の概要	9
第2節 基本順序	9
第3節 遺構と遺物	11
1 縄文時代の遺構と遺物	11
堅穴遺構	11
2 古墳時代の遺構と遺物	13
堅穴住居跡	13
3 奈良時代の遺構と遺物	17
(1) 堅穴住居跡	17
(2) 堅穴遺構	73
(3) 土坑	79
(4) 粘土採掘坑	81
4 平安時代の遺構と遺物	87
(1) 堅穴住居跡	87
(2) 土坑	101
(3) 火葬墓	102
5 中世の遺構と遺物	103
溝跡	103
6 その他の遺構と遺物	105
(1) 土坑	105
(2) 溝跡	108
(3) 遺構外出土遺物	108
第4節 まとめ	113
写真図版	PL 1 ~ PL20
抄 録	

根方遺跡の概要

遺跡の位置と調査の目的

根方遺跡は、阿見町の東部に位置し、清明川左岸の標高約16～24mの斜面部から台地上にかけて立地しています。

首都圏中央連絡自動車道の阿見東インターチェンジから霞ヶ浦方面へのアクセス道路として整備が進められている、主要地方道竜ヶ崎阿見線バイパス建設に伴う遺跡の記録保存を目的に、茨城県教育財団が発掘調査を実施しました。



調査の内容

調査区は遺跡の西側の一部で、平成21年5月から9月まで5,480㎡の面積を調査しました。その結果、たてあなじゆうきよあと竪穴住居跡28軒（古墳時代2軒・奈良時代19軒・平安時代7軒）、たてあないこう竪穴遺構3基、ねんどきいくつこう粘土採掘坑2基、どこう土坑20基、みであと溝跡2条、かそう火葬墓1基を確認しました。主な出土遺物は、じょうもんどき縄文土器、はじき土師器、すえき須恵器、かいゆうとう灰釉陶器、はじしつどき土師質土器、とうき陶器、どせいひん土製品、かわら瓦、せっき石器、きんぞくせいひん金属製品などです。



調査の成果

今回の調査によって、古墳時代の後期（約1,400年前）から平安時代（約1,200年前）までの長期に渡る集落跡であったことが分かりました。特に奈良時代（約1,300年前）の住居跡が一番多く確認でき、平坦地ばかりでなく、斜面地にも住居が作られ、繁栄していた様子がうかがえます。斜面地の住居跡は、地形や風向きの影響から、さまざまな向きに立てられていました。



堅穴住居跡は、台地縁辺部の斜面地でも確認できました。



第11号住居跡からは、土器類とともに軒丸瓦が出土しました。



丸瓦や平瓦に加えて、軒丸瓦や鬼瓦も出土しています。

土器類とともに一般の集落では出土しない瓦片（軒丸瓦・鬼瓦・丸瓦・平瓦）がたくさん出土しています。特に、8世紀初頭と考えられる第11号住居跡からは軒丸瓦、第1号粘土採掘坑からは鬼瓦がそれぞれ出土しています。これらの遺構は諏訪寺院跡に近い調査区の南部に位置しており、寺院に葺かれていた瓦を廃棄したものと思われます。

以上のことから、諏訪寺院跡は県内でも古い段階の寺院の可能性があり、8世紀初頭にはその役目を終えたことが分かる貴重な資料となりました。

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

平成17年4月8日、茨城県竜ヶ崎土木事務所長（現茨城県竜ヶ崎工事事務所長）は、茨城県教育委員会教育長に対して、主要地方道竜ヶ崎阿見線バイパス建設事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会し、これを受けて茨城県教育委員会は、平成17年5月26日に現地踏査を、平成20年3月5・6日、7月23・25日に試掘調査を実施し、根方遺跡の所在を確認した。

平成20年3月24日、8月18日、茨城県教育委員会教育長は茨城県竜ヶ崎工事事務所長あてに、事業地内に根方遺跡が所在すること及びその取り扱いについて別途協議が必要である旨を回答した。

平成21年1月26日、茨城県竜ヶ崎工事事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、文化財保護法第94条の規定に基づき、土木工事等のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。茨城県教育委員会教育長は、現状保存が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると決定し、茨城県竜ヶ崎工事事務所長あてに、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成21年2月19日、茨城県竜ヶ崎工事事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、主要地方道竜ヶ崎阿見線バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施についての協議書を提出した。平成21年2月20日、茨城県教育委員会教育長は、茨城県竜ヶ崎工事事務所長あてに、発掘調査の範囲及び面積等について回答し、あわせて調査機関として、財団法人茨城県教育財団を紹介した。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県竜ヶ崎工事事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成21年5月11日から平成21年9月30日まで発掘調査を実施することとなった。

第2節 調査経過

根方遺跡の調査経過については、その概要を表で記載する。

工程 \ 月	5月	6月	7月	8月	9月
調査準備 表土除去 遺構確認	■				
遺構調査		■	■	■	■
遺物洗浄 注記 写真整理			■	■	■
補足調査 撤収					■

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

根方遺跡は、茨城県稲敷郡阿見町大字追原字房内1454番地の5ほかに所在している。

阿見町は県の南部に位置し、町の北東部は霞ヶ浦に面している。町城の地形は、稲敷台地の北東部にあたる洪積台地と、霞ヶ浦や清明川・桂川・乙戸川の沿岸の沖積低地に大別される。洪積台地の標高は南東部では30m弱、西部で24m前後となり、東から西へ向かって緩やかに傾斜している。また、洪積台地は、各河川に開析され樹枝状に入り組んだ地形をなしている。

台地の地質は、古東京湾に堆積した成田層を基盤とし、シルト質の下層部と砂質の上層部からなっている。その上に細礫を含む細粒砂層からなる龍ヶ崎砂礫層が堆積している。さらにその上には凝灰質の常総粘土層、関東ローム層が順に堆積し表土に至っている。

当遺跡は、町の東部に位置し、北に約2.5kmのところに位置する霞ヶ浦と、霞ヶ浦に流入する清明川に挟まれた標高12～24mの南西から北東にかけて広がりのある台地上に立地している。この台地は、西側・南側・東側を清明川に、その支流による谷津に北側を開かれている。台地の中央部は平坦で、西側から南側、北側にかけては、沖積低地に面しており、北側は急な斜面となっている。この台地は清明川の支流によってさらに複雑に入り組んだ地形となっており、台地を取り囲む沖積低地の標高は5～14mとなっている。調査前の現況は畑地である。

第2節 歴史的環境

阿見町には、旧石器時代から近世まで大小200以上の遺跡が確認されており¹⁾、その多くは、北部の霞ヶ浦沿岸と、清明川・桂川・乙戸川沿岸の洪積台地縁辺部に分布している。ここでは、当遺跡の時期と関連する縄文・古墳時代から中世までの周辺遺跡について記述する。

縄文時代の遺跡として、星台遺跡²⁾ (28)、中ノ台遺跡³⁾ (37)、米根井向遺跡⁴⁾ (29)、烏津遺跡 (10) などがある。また、この時期は、海進により現在の霞ヶ浦に注ぐ各河川の奥深くまで海水が流入しており、掛馬村境貝塚 (35)、見留目貝塚 (31)、烏津貝塚群 (11)、イタチ内貝塚 (13)、浅間貝塚 (26)、神田貝塚 (34) などが確認されている。宮平貝塚群 (16) と根田貝塚からは、阿玉台式土器が出土しており、中期を中心とした貝塚と位置づけられ、烏津遺跡と烏津貝塚群からは中・後期の生活の跡が発見されている⁵⁾。

古墳時代になると当遺跡周辺に集落跡が増加している。集落跡としては、星台遺跡、烏津遺跡、梶内台遺跡 (8)、道心台遺跡 (17)、小作遺跡 (2) などが挙げられる。小作遺跡は当遺跡から北に約0.5kmの谷津を挟んだ対岸に位置し、前期の住居跡が11軒ほど確認されており、当遺跡との関係が注目される⁶⁾。また、古墳としては、古女子古墳群 (20)、イタチ内古墳群⁷⁾ (12)、後原古墳群 (21)、若宮古墳群 (22)、荒匂古墳群 (23)、長作古墳群 (24)、入谷津古墳群 (27) などの後期古墳がある。阿見町域の古墳はほとんどが円墳で、前方後円墳や方墳は少ないのが特徴となっている。

律令期になると、当地域は信太郎子方郡に属し、『茨城の歴史』⁸⁾ には、「信太郎成立後は江戸崎町下君山に郡衙が置かれていた」と記載されている。周辺には、小作遺跡、星台遺跡、中ノ台遺跡、梶内台遺跡、道心

台遺跡などがある。小作遺跡からは、庇をもつ掘立柱建物跡が確認され、灰釉・緑釉陶器の破片や数々の墨書土器などが出土している。墨書土器には、平仮名で書かれたものや「寺」と書かれたものも出土しており、豪族層の居宅跡や村落内寺院と目されている⁹⁾。

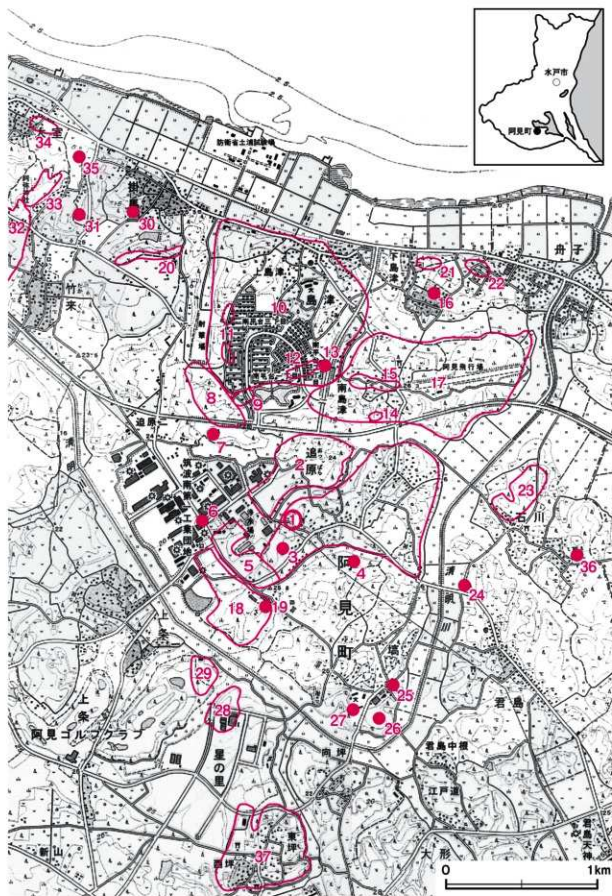
当遺跡の南には諏訪寺院跡〈3〉が接している。『阿見町史』¹⁰⁾では、諏訪寺院跡から、奈良時代前期と推定される多くの布目瓦が出土しており、基壇状の遺構も残っていることから信太郡の郡寺の可能性が指摘されている。当遺跡の住居跡や土坑からは、諏訪寺院跡のもと思われる素縁単弁八葉花文軒丸瓦や平瓦などが出土しており、諏訪寺院跡との関連が考えられる。県内の初期寺院では、石岡市茨城廃寺、水戸市台渡里廃寺、協和町新治廃寺等が挙げられるが、東国の初期寺院で最も古いとされるのは千葉県竜角寺廃寺であり¹¹⁾、当遺跡の軒丸瓦との関連についても注目される。また、町内には、式内社である阿弥神社に隣接している竹米遺跡や堀で囲まれた宮脇遺跡、古代官道の推定地などがあり、古代信太郡の様相を解明する上で当遺跡を含め、それらの関連が注目される。

中世になると当地域は信太荘となり、常陸平氏一族の支配下に置かれるようになる¹²⁾。1318年に信太荘は東寺に寄進され、地頭職は北条氏一門によって占められていた¹³⁾。建武中興の戦乱が巻き起こると、信太荘は北条一門の手をなされ、在地領主層による支配が進み、荘官や地頭、またはその代官等の多くは武士化していく。戦国期になるとこの地域は、土岐氏や小田氏の領地争いの舞台となり、土岐氏は清明川や乙戸川流域に城館を築いていく。当遺跡周辺には島津城跡〈15〉や、¹⁴⁾堀城跡〈25〉などの城館が築かれ、これらの城跡には、堀・土塁が現存しており、当時の堅固な城の様子の一端をうかがうことができる。

※ 文中の〈 〉内の番号は、第1図及び表1中の該当遺跡番号と同じである。

註

- 1) 茨城県教育庁文化課編『茨城県遺跡地図』茨城県教育委員会 2001年3月
- 2) 矢ノ倉正男・寺門千勝「阿見東部工業団地造成工事地内埋蔵文化財調査報告書 星合遺跡・中ノ台遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第137集 1997年9月
- 3) 註2文献と同じ
- 4) 鹿島直樹「米根井向遺跡 主要地方道竜ヶ崎阿見線バイパス整備事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第333集 2010年3月
- 5) 阿見町史編さん委員会「阿見町史 阿見町 1983年3月
- 6) 清水哲・船橋理「小作遺跡 主要地方道竜ヶ崎阿見線バイパス建設事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第346集 2011年3月
- 7) 註5文献と同じ
- 8) 茨城地方史研究会編『茨城の歴史 原南・熊行編』茨城新聞社 2002年12月
- 9) 註6文献と同じ
- 10) 註5文献と同じ
- 11) 茨城県立歴史館「東国の古代仏教」1994年10月
- 12) 網野善彦 石井進 稲垣泰彦 永原慶二編『日本荘園史』第5巻 吉川弘文館 1990年5月
- 13) 茨城県史編集委員会『茨城県史 中世編』茨城県 1986年3月
- 14) 註5文献と同じ



第1図 根方遺跡周辺遺跡分布図 (国土地理院 25,000 分の1 「土浦」「木原」「牛久」「江戸崎」)

表1 根方遺跡周辺遺跡一覧表

番 号	遺 跡 名	時 代						番 号	遺 跡 名	時 代					
		旧 石 器	縄 文	弥 生	古 墳	奈 良 ・ 平 安	中 世			近 世	旧 石 器	縄 文	弥 生	古 墳	奈 良 ・ 平 安
①	根 方 遺 跡		○		○			20	古 女 子 古 墳 群				○		
2	小 作 遺 跡		○	○	○	○		21	後 原 古 墳 群				○		
3	諏 訪 寺 院 跡					○		22	若 宮 古 墳 群				○		
4	藏 福 寺 院 跡						○	23	荒 匂 古 墳 群				○		
5	西 ノ 入 遺 跡				○			24	長 作 古 墳 群				○		
6	内 堀 遺 跡						○	25	塙 城 跡						○
7	烏 瓜 台 遺 跡				○	○		26	浅 間 貝 塚	○					
8	梶 内 台 遺 跡				○			27	入 谷 津 古 墳 群				○		
9	頭 田 遺 跡		○	○	○		○	28	星 合 遺 跡	○	○		○	○	
10	島 津 遺 跡		○	○	○			29	米 根 井 向 遺 跡	○			○		
11	島 津 貝 塚 群		○					30	掛 馬 館 跡						○
12	イ タ チ 内 古 墳 群				○			31	見 留 目 貝 塚	○					
13	イ タ チ 内 貝 塚	○						32	竹 来 遺 跡	○	○	○	○	○	○
14	長 泰 寺 院 跡						○	33	竹 来 館 跡						○
15	島 津 城 跡						○	34	神 田 貝 塚				○		
16	宮 平 貝 塚 群		○					35	掛 馬 村 境 貝 塚	○					
17	道 心 台 遺 跡				○	○		36	石 川 貝 塚	○					
18	追 原 西 遺 跡		○		○			37	中 ノ 台 遺 跡	○			○	○	
19	五 斗 蒔 古 墳				○										



第2図 根方遺跡調査区設定図(阿見町都市計画図 2500分の1)

第3章 調査の成果

第1節 調査の概要

根方遺跡は、茨城県稲敷郡阿見町大字追原字房内1454番地の5ほかに所在し、清明川左岸の標高約16mの斜面部から約24mの台地上に位置している。この台地は、西側・南側・東側を清明川に、その支流による谷津に北側を囲まれている。遺跡の範囲は、南西から北東に広がりのある台地と斜面部を含み、調査区はこの台地上の西部で、沖積低地に面して位置している。調査面積は5,480㎡で、調査前の現況は畑地・山林である。

調査の結果、竪穴住居跡28軒（古墳時代2・奈良時代19・平安時代7）、竪穴遺構3基（縄文時代1・奈良時代2）、粘土採掘坑2基（奈良時代）、土坑20基（奈良時代2・平安時代2・時期不明16）、溝跡2条（中世・時期不明）、火葬墓1基（平安時代）を確認した。

遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に33箱出土している。主な遺物は、縄文土器（深鉢）、土師器（坏・碗・高台付坏・高台付碗・鉢・甕・瓶・手捏土器）、須恵器（坏・高台付坏・壺・盤・高盤・鉢・瓶・甕・瓶）、灰釉陶器（瓶）、土師質土器（皿・内耳鍋）、陶器（甕）、土製品（土玉・模造品・管状土錘）、瓦（軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦・丸瓦・平瓦・隅平瓦）、石器（磨製石斧・砥石・剥片・磨石・台石カ）、金属製品（刀子・鎌・釘・鏝・鉄滓）などである。

第2節 基本層序

調査区は長さ約270m、幅約45mで、高低差は約8mである。中央部（C2j7区）、南部（F2d2区）の2か所にテストピットを設定し、基本土層（第3・4図）の観察を行った。土層観察結果は、以下の通りである。

テストピット1（中央部）

第1層は、黒褐色を呈する現耕作土である。粘性・締まりともに弱く、層厚は12～20cmである。

第2層は、褐色を呈するソフトローム層で、砂層への漸移層である。粘性は普通で、締まりが強く、層厚は15～29cmである。

第3層は、黄褐色を呈する砂層である。粘性は弱く、締まりが強く、層厚は11～29cmである。

第4層は、褐色を呈する砂層である。粘性は弱く、締まりが強く、層厚は2～22cmである。

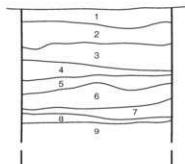
第5層は、にぶい黄褐色を呈する砂層である。粘性は弱く、締まりが強く、層厚は7～15cmである。

第6層は、にぶい黄褐色を呈する砂質粘土層である。粘性・締まりともに強く、層厚は15～27cmである。

第7層は、灰黄褐色を呈する砂質粘土層である。粘性・締まりともに強く、層厚は4～19cmである。

17.2m

16.2m



第3図 基本土層図（1）

第8層は、褐色を呈する砂質粘土層である。粘性は強く、締まりは普通で、層厚は3～9cmである。

第9層は、暗灰黄色を呈する砂質粘土層である。粘性は強く、締まりは普通で、層厚は21cm以上である。

下層は未掘のため本来の層厚は不明である。

テストピット2（南部）

第1層は、暗褐色を呈する現耕作土である。粘性・締まりともに弱く、層厚は27～52cmである。

第2層は、褐色を呈するソフトローム層である。粘性・締まりともに普通で、層厚は4～26cmである。

第3層は、褐色を呈するソフトローム層である。粘性は普通で、締まりが弱く、層厚は20～26cmである。

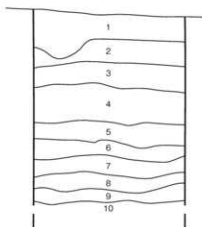
第4層は、褐色を呈するソフトローム層である。粘性・締まりともに弱く、層厚は32～42cmである。

第5層は、褐色を呈するハードローム層である。粘性・締まりともに普通で、層厚は17～26cmである。

24.2m

23.2m

22.2m



第6層は、褐色を呈するハードローム層である。粘性・締まりともに普通で、層厚は12～22cmである。

第7層は、黄褐色を呈するハードローム層である。粘性・締まりともに普通で、層厚は12～20cmである。

第8層は、褐色を呈する砂層である。粘性は弱く、締まりは強い。層厚は10～20cmである。

第9層は、にぶい黄褐色を呈する砂質シルト層である。粘性・締まりともに強く、層厚は8～17cmである。

第10層は、灰黄色を呈する砂質シルト層である。粘性は普通で、締まりは強い。層厚は30cm以上で、下層は未掘のため本来の層厚は不明である。

なお、遺構はいずれも第2層上面で確認している。

第4図 基本土層図（2）

第3節 遺構と遺物

1 縄文時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、竪穴遺構1基を確認した。以下、遺構と遺物について記述する。

竪穴遺構

第1号竪穴遺構 (SI-9) (第5・6図)

位置 調査区南部のF10区、標高230mの台地縁部に位置している。

規模と形状 長軸3.75m、短軸3.35mの長方形で、長軸方向はN-47°-Wである。壁高は19~30cmで、緩やかに立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、全般的に軟質である。

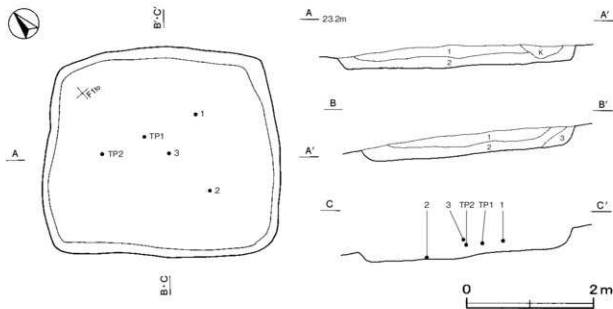
覆土 3層に分層できる。周囲から土砂が流入した堆積状況を示しており、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子多量
2 暗褐色 ロームブロック多量
3 暗褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 縄文土器片45点(深鉢)が出土している。また、混入した土師器片11点も覆土上層から出土している。1は中央部東寄りの位置で、底部を南にして体部から口縁部が北側に広がるように破片で出土している。2は床面直上で、体部が正位で出土している。

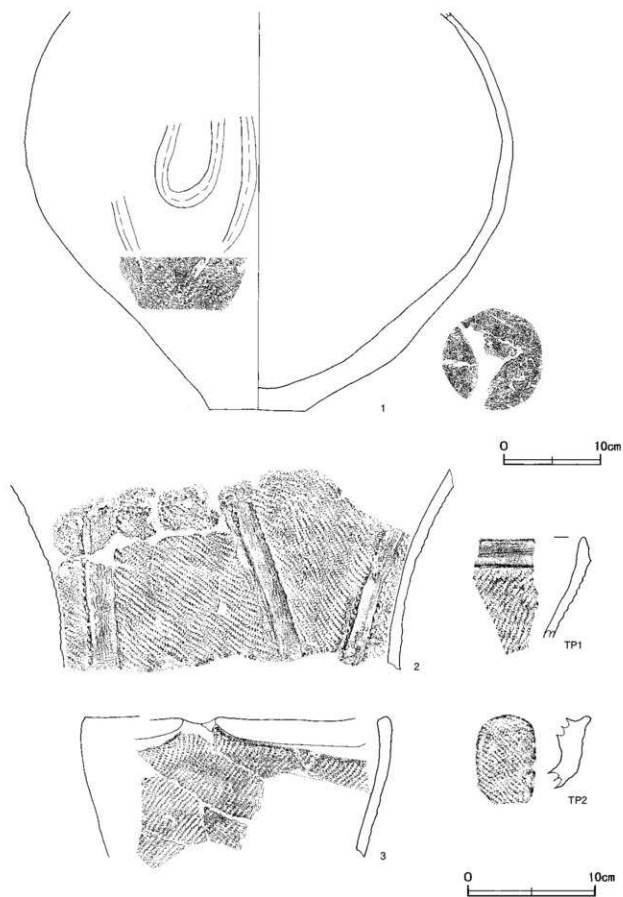
所見 時期は、出土土器から中期後半(加曾利EⅣ期)と考えられる。



第5図 第1号竪穴遺構実測図

第1号竪穴遺構出土遺物観察表(第6図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	-	(42.0)	10.0	長石・石英・雲母	にじみ-黄褐色	普通	縄文を施文後磨り滑す 微稜帯をU字状に高らす	覆土上層	20% PL14
2	縄文土器	深鉢	-	(15.9)	-	長石・石英・雲母・赤黒粒子	明褐色	普通	磨削同様の2段し長草筋縄文を施文 微稜帯を垂下 磨削同様の微の滑す	床面	20% PL14
3	縄文土器	深鉢	[23.8]	(11.1)	-	長石・石英・黒色粒子	にじみ-黄褐色	普通	口外縁は灰文で微稜帯を高らす 2段し長草筋縄文を施文	覆土上層	10%
TP1	縄文土器	深鉢	-	(8.0)	-	長石・石英	にじみ-黄褐色	普通	口外縁は灰文で微稜帯を高らす 2段し長草筋縄文を施文	覆土上層	PL15
TP2	縄文土器	深鉢	-	(5.7)	-	長石・石英	にじみ-黄褐色	普通	2段し長草筋縄文を施文	覆土上層	PL15



第6図 第1号竖穴遺構出土遺物実測図

2 古墳時代の遺構と遺物

当該時代の遺構は、竪穴住居跡2軒を確認した。以下、遺構と遺物について記述する。

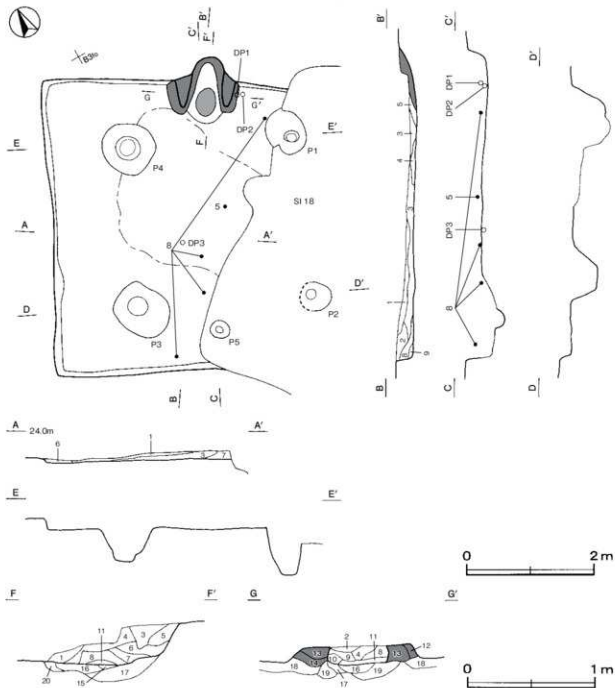
竪穴住居跡

第24号住居跡（第7・8図）

位置 調査区北部のB30区、標高23.8mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第18号住居に掘り込まれている。

規模と形状 南北軸は4.72mで、東西軸は4.15mしか確認できなかった。平面形は方形と推定され、主軸方向はN-27°-Eである。残存している壁高は6~27cmで、ほぼ直立している。



第7図 第24号住居跡実測図

床 ほほ平坦で、中央部が踏み固められており、特に竈の左袖前面の硬化が著しい。

竈 北東壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで95cmで、燃焼部幅は46cmである。袖部は地山を掘り込んだ後、第17～19層のローム土を埋め戻して基部とし、第12～14層の砂質粘土で構築している。右袖部の内側の一部が、火熱を受けて赤変硬化している。火床部は床面と同じ高さの平坦な面を使用しており、火床面は赤変硬化している。煙道部は、壁外へ半円状に42cmほど掘り込んでおり、内壁の一部に粘土を貼り付けて構築されている。

覆土層解説

- | | |
|---------------------------|----------------------------|
| 1 褐 色 焼土粒子中量 | 11 褐 色 焼土粒子多量 |
| 2 にい・黄褐色 砂粒中量、焼土粒子・炭化粒子少量 | 12 褐 色 砂粒微量 |
| 3 暗 褐色 焼土粒子微量 | 13 にい・黄褐色 砂粒多量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 4 灰 褐色 焼土ブロック中量 | 14 にい・黄褐色 砂粒・炭化粒子少量 |
| 5 褐 色 焼土粒子微量 | 15 褐 色 ローム粒子少量、焼土粒子微量 |
| 6 暗 褐色 焼土粒子少量、炭化粒子微量 | 16 赤 褐色 焼土ブロック多量 |
| 7 暗 褐色 焼土粒子・炭化粒子・砂粒少量 | 17 褐 色 焼土粒子少量、砂粒微量 |
| 8 灰 褐色 焼土粒子少量 | 18 褐 色 ロームブロック中量 |
| 9 黒 褐色 焼土粒子中量、炭化粒子少量 | 19 褐 色 ローム粒子中量 |
| 10 黒 褐色 ロームブロック少量 | 20 褐 色 ローム粒子少量、焼土粒子微量 |

ピット 5か所。P1～P4は深さ40～74cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ37cmで、南西壁際の中央部にあることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

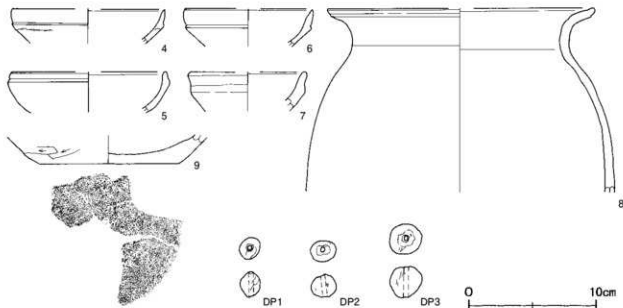
覆土 9層に分層できる。ロームブロック、焼土・炭化粒子が不規則に含まれ、埋め戻されている。

土層解説

- | | |
|---------------------------|------------------|
| 1 暗 褐色 ローム粒子少量 | 6 にい・黄褐色 ローム粒子少量 |
| 2 にい・黄褐色 ローム粒子微量 | 7 黒 褐色 ローム粒子中量 |
| 3 にい・黄褐色 ロームブロック少量 | 8 褐 色 ローム粒子多量 |
| 4 にい・黄褐色 ロームブロック中量 | 9 にい・黄褐色 ローム粒子中量 |
| 5 褐 色 ロームブロック中量、焼土・炭化粒子少量 | |

遺物出土状況 土師器片94点(坏11, 甕83)、須恵器片3点(坏1, 甕2)、土製品3点(土玉)が出土している。また、混入した縄文土器片11点も出土している。5は中央部の覆土下層、DP3は中央部の床面、DP1・DP2は竈右袖付近の覆土下層からそれぞれ出土している。8は東部から南西部の覆土中層から下層にかけて出土した破片が接合したものである。

所見 時期は、重複関係及び出土土器から7世紀前葉と考えられる。



第8図 第24号住居跡出土遺物実測図

第24号住居跡出土遺物観察表（第8図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
4	土師器	坏	[12.0]	(2.7)	-	長石・石英	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 輪襷裏	覆土中	5%
5	土師器	坏	[12.0]	(3.2)	-	長石・赤色粒子	灰黄褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体外外・内面ナデ	覆土下層	5%
6	土師器	坏	[10.0]	(3.0)	-	長石・石英	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ	覆土中	5%
7	土師器	坏	[9.0]	(3.1)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	口縁部外面横ナデ	覆土中	5%
8	土師器	甕	[20.8]	(14.5)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ	覆土中層 -下層	30%
9	土師器	甕	-	(2.3)	11.0	長石・石英・赤色粒子・小礫	にぶい橙	普通	体部下端へう割り	覆土中	5%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP1	土玉	1.8	2.0	0.3	4.3	土（細砂）	一方からの穿孔 ナデ	覆土下層	PL16
DP2	土玉	2.0	1.8	0.3	5.2	土（細砂）	一方からの穿孔 ナデ	覆土下層	PL16
DP3	土玉	2.6	2.4	0.4	14.3	土（細砂）	一方からの穿孔 ナデ	床面	PL16

第26号住居跡（第9図）

位置 調査区北部のB4b5区、標高23.7mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第32号住居に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.83m、短軸4.45mの方形で、主軸方向はN-40°-Wである。壁高は7～34cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほほ平坦で、竈前面から中央部にかけて踏み固められている。

竈 北西壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで99cm、燃焼部幅56cmである。袖部は床面と同じ高さを基部として、第12～15層の砂質粘土で構築されている。火床部は床面と同じ高さの平坦な面を使用しており、火床面は赤変硬化している。煙道部は壁外へ半円状に38cmほど掘り込まれ、火床部より外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

1	にぶい黄褐色	砂質粘土粒子中量、ロームブロック少量	8	暗褐色	砂粒・炭化粒子中量、焼土粒子少量
2	にぶい黄褐色	焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子少量	9	褐色	砂粒中量
3	灰褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量	10	にぶい赤褐色	焼土ブロック中量、ローム粒子・砂質粘土粒子少量
4	灰褐色	焼土ブロック中量、ローム粒子少量	11	暗褐色	焼土ブロック・ローム粒子微量
5	灰褐色	ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子少量、焼土粒子微量	12	明黄褐色	砂質粘土粒子多量（しまり強い）
6	灰褐色	砂質粘土粒子微量	13	褐色	砂質粘土粒子多量、焼土粒子微量
7	灰褐色	焼土ブロック中量、ローム粒子少量、砂質粘土粒子微量	14	褐色	ロームブロック多量
			15	にぶい赤褐色	焼土ブロック多量、炭化粒子微量（しまり強い）
			16	にぶい褐色	焼土ブロック・砂質粘土粒子中量（しまり強い）

ピット 5か所。P1～P4は深さ46～56cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ20cmで、南東壁際の中央部にいることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

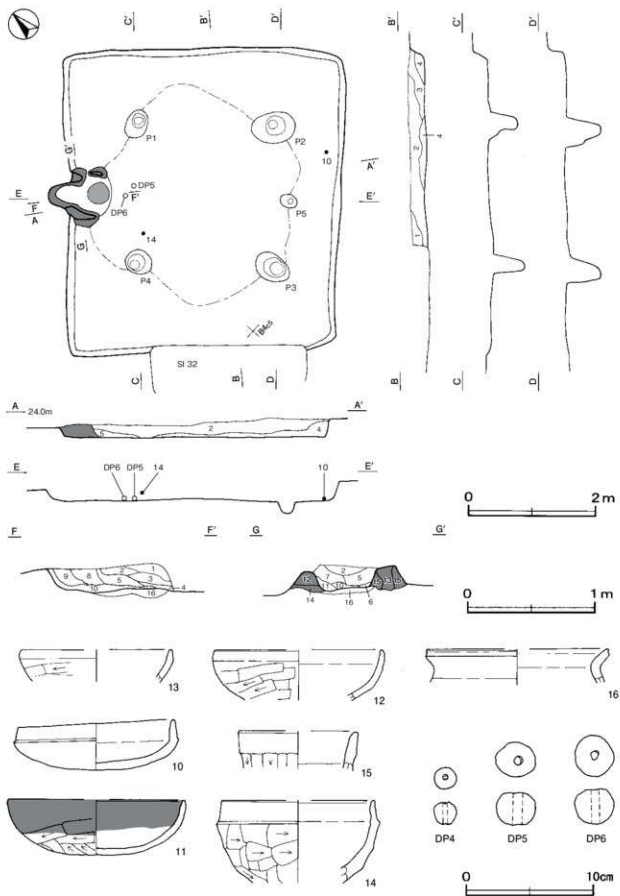
覆土 5層に分層できる。周囲から土砂が流入した様相を示しており、自然堆積と考えられる。

土層解説

1	暗褐色	ローム粒子少量	4	暗褐色	ローム粒子微量
2	暗褐色	ロームブロック少量	5	灰褐色	ローム粒子・焼土粒子少量
3	暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量			

遺物出土状況 土師器片90点（坏26、碗2、甕61、瓶1）、須恵器片4点（坏2、甕2）、土製品3点（土玉）が出土している。また、流れ込んだ縄文土器片1点も出土している。10は南東壁際の床面から逆位で、DP5・DP6は竈前の床面から出土している。

所見 時期は、重複関係及び出土土器から6世紀後半と考えられる。



第9图 第26号住居跡・出土遺物実測図

第26号住居跡出土遺物観察表（第9図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
10	土師器	坏	[12.2]	4.0	-	長石・石英・赤色 粒子	にぶい黄緑	普通	外・内面ナデ	床面	95% PL11
11	土師器	坏	[13.8]	4.4	-	長石・石英・赤色 粒子	にぶい橙	普通	体部下端手持ちヘウ割り	覆土中	20%
12	土師器	坏	[13.4]	4.0	-	長石・石英・赤色 粒子	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘウ割り	覆土中	10%
13	土師器	坏	[11.7]	(2.5)	-	長石・石英	にぶい黄	普通	口縁部外面横ナデ 体部外面ヘウ割り	覆土中	5%
14	土師器	碗	[12.0]	(6.5)	-	長石・石英・赤色 白色粒子	にぶい黄緑	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘウ割り	覆土中層	10%
15	土師器	碗	[9.4]	(3.0)	-	長石・石英・赤色 粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘウ割り	覆土中	5%
16	土師器	釜	[14.2]	(2.8)	-	長石・石英・赤色	にぶい赤黄	普通	口縁部外・内面横ナデ	覆土中	5%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP4	土玉	1.7	1.7	0.4	4.3	土（細砂）	一方向からの穿孔 ナデ	覆土中	PL16
DP5	土玉	3.1	2.6	0.7	19.5	土（細砂）	一方向からの穿孔 ナデ	床面	PL16
DP6	土玉	3.1	2.8	0.7	24.1	土（長石・石英）	一方向からの穿孔 ナデ	床面	PL16

表2 古墳時代竪穴住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模（m） （長軸×短軸）	壁高 （cm）	床面	壁溝	内部施設			覆土	主な出土遺物	時期	備考 新旧関係（旧→新）	
								土間 （床）	土間 （壁）	土間 （柱）					
24	B 3 30	N - 27° E	[方形]	4.72 × 4.15	6 ~ 27	平坦	-	4	1	-	1	人為	土師器、須恵器、土製品	7世紀前半	本跡→SI18
26	B 4 b5	N - 40° W	方形	4.83 × 4.45	7 ~ 34	平坦	-	4	1	-	1	自然	土師器、須恵器、土製品	6世紀後半	本跡→SI32

3 奈良時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、竪穴住居跡19軒、竪穴遺構2基、土坑2基、粘土探掘坑2基を確認した。以下、遺構と遺物について記述する。

(1) 竪穴住居跡

第1号住居跡（第10・11図）

位置 調査区中央部のC3j3区、標高18.6mの台地斜面部に位置している。

重複関係 第8号土坑を掘り込み、第13号住居に掘り込まれている。

規模と形状 北西・南東軸は4.24mで、北東・南西軸は3.65mしか確認できなかった。平面形は方形と推定でき、主軸方向はN-53°-Wである。残存している壁高は6~45cmで、外傾して立ち上がっている。南西壁は残存していない。

床 ほほ平坦で、竈前面から中央部にかけて踏み固められている。

竈 北西壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで71cm、燃焼部幅46cmである。袖部は地山を掘り残した基部に砂質粘土が少量貼り付けてあったことが確認できる。火床部は、床面とほぼ同じ高さを使用し、火床面は赤変硬化している。煙道部は、壁外への掘り込みがなく、火床部から緩やかに立ち上がっている。

竈土層解説

- | | | | |
|----------|----------------------|--------|----------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂粒微量 | 5 黒褐色 | 炭化粒子・焼土粒子中量、ローム粒子微量 |
| 2 にぶい黄褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂粒微量 | 6 褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子・粘土粒子少量、炭化粒子微量 |
| 3 暗暗赤褐色 | 焼土ブロック中量、炭化粒子・砂粒少量 | | |
| 4 褐色 | 砂粒少量、焼土粒子微量 | 7 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量、炭化粒子・粘土粒子少量 |

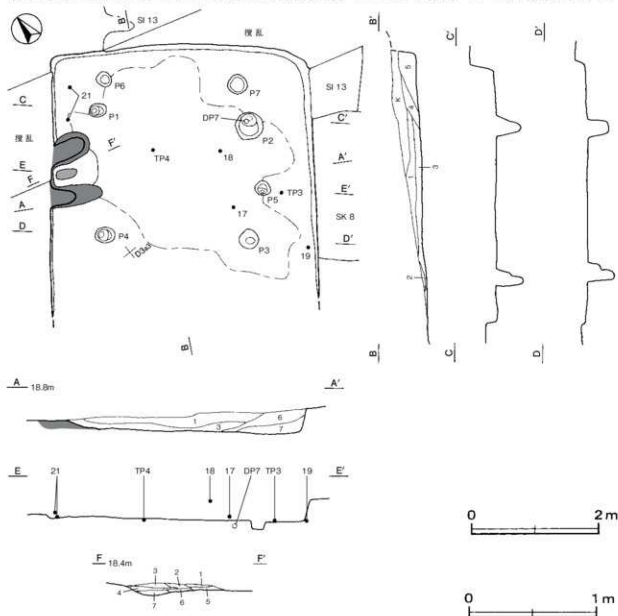
ピット 7か所。P1～P4は深さ35～44cmで、規模と配置から支柱穴と考えられる。P5は深さ14cmで、南東壁際の中央部にあることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6・P7はそれぞれ深さ23・10cmと浅く、P1・P2に対して約40cmの位置にあることから、補助的な柱穴の可能性もある。

覆土 7層に分層できる。周囲から土砂が流入した様相を示しており、自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|---------------------------------------|---|
| 1 暗褐色 焼土ブロック中量、砂粒少量、炭化粒子微量 | 6 暗褐色 砂粒少量、粘土ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 砂粒多量、焼土粒子少量、炭化粒子微量 | 7 暗褐色 ロームブロック中量、粘土ブロック・焼土ブロック・炭化粒子・砂粒少量 |
| 3 暗褐色 砂粒中量、粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 | |
| 4 暗褐色 粘土ブロック中量、焼土粒子・砂粒少量、炭化粒子微量 | |
| 5 暗褐色 粘土ブロック中量、焼土粒子・炭化粒子・砂粒少量、ローム粒子微量 | |

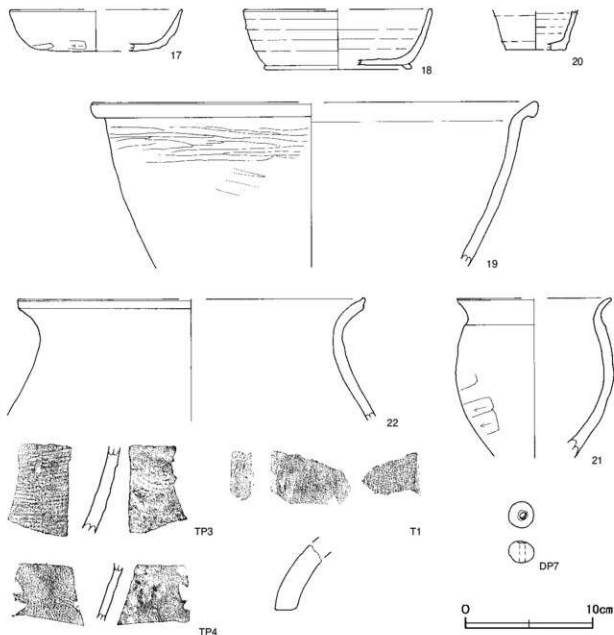
遺物出土状況 土師器片293点(坏31, 鉢1, 甕260, 瓶1), 須恵器片47点(坏26, 蓋8, 盤1, 甕12), 土製品1点(土玉), 瓦片1点(丸瓦), 礫9点(砂岩6・礫岩3)が出土している。また、流れ込んだ縄文土器片1点も出土している。17はP3付近, 19は南東部壁際, TP3はP5付近, TP4は中央部の床面, 21



第10図 第1号住居跡実測図

は北部の覆土下層, 18はP2付近の覆土上層からそれぞれ出土している。

所見 時期は, 出土土器から8世紀後半と考えられる。



第11図 第1号住居跡出土遺物実測図

第1号住居跡出土遺物観察表 (第11図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
17	土師器	坏	[13.4]	3.3	[9.4]	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	体部下端へう削り 底部多方向のへう削り	床面	30% PL11
18	須恵器	高台付杯	[14.8]	4.8	[10.6]	長石・石英	灰	普通	ロクロ成形 高台駝り付け	覆土上層	20% PL11
19	須恵器	鉢	[34.9]	(13.0)	-	長石・石英・雲母 赤色粒土	にぶい黄褐色	普通	体部外面横位のへうナデ	床面	20%
20	須恵器	壺	-	(3.2)	[4.6]	長石・石英	黄灰	普通	ロクロ成形	覆土中	20% PL13
21	土師器	甕	[12.0]	(12.6)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部外面横ナデ 体部外面へう削り	覆土下層	20% PL14
22	土師器	甕	[27.2]	(9.6)	-	長石・石英・雲母 赤色粒土	橙	普通	外・内面ナデ	覆土中	10% PL14
TP3	須恵器	甕	-	(7.0)	-	長石・石英	灰オリーブ	普通	体部横位の平行叩き 内面当て具痕	床面	
TP4	須恵器	甕	-	(4.4)	-	長石・石英	灰白	普通	体部同心円叩き	床面	

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP7	土玉	20	1.6	0.45	6.7	土(細砂)	一方向からの穿孔 ナデ	P2覆土中	PL16

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
T1	丸瓦	(4.5)	(3.2)	1.9	(57.6)	長石・細礫	普通	凸面へう削り 凹面布目痕	覆土中	

第2号住居跡(第12・13図)

位置 調査区中央部のC3j1区、標高18.1mの台地緩斜面部に位置している。

重複関係 第4号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 南西壁が残存しておらず、北西・南東軸は5.00mで、北東・南西軸は4.46mしか確認できなかった。平面形は方形と推定され、主軸方向はN-52°-Wである。残存している壁高は22~47cmで、ほぼ直立している。

床 ほぼ平坦な貼床で、竈前面から中央部にかけて踏み固められている。貼床は、南西半部の傾斜した床面を補強する形で、黒褐色土と暗褐色土を貼り付けて構築されている。壁溝が竈から南東壁にかけて半周している。

竈 北西壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで80cm、燃焼部幅72cmである。袖部は床面をやや掘り下げて基部とし、第5~7層の砂質粘土やローム土を積み上げて構築されている。火床部は床面から5cmほどの皿状を呈しており、火床面は赤変硬化している。煙道部の壁外への掘り込みほとんど見られなかった。

覆土層解説

- | | |
|---|------------------------------|
| 1 暗 赤 褐色 焼土ブロック中量、炭化粒子・砂質粘土粒子少量、ローム粒子微量 | 5 明 褐色 砂質粘土粒子多量 |
| 2 暗 赤 褐色 焼土ブロック多量、炭化粒子中量、砂質粘土粒子少量、ローム粒子微量 | 6 暗 褐色 焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子少量 |
| 3 におい黄褐色 砂質粘土粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量 | 7 黒 褐色 ローム粒子中量、焼土ブロック・炭化粒子少量 |
| 4 暗 褐色 焼土ブロック・炭化粒子中量、ローム粒子・砂質粘土粒子少量 | 8 褐色 ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| | 9 暗 褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 |

ピット 5か所。P1~P4は深さ36~75cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ36cmで、南東壁際の中央部にあることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。各ピット内には、2~4か所の小ピットが認められ、掘方や深さが類似していることから、柱の立て替えが行われたと考えられる。

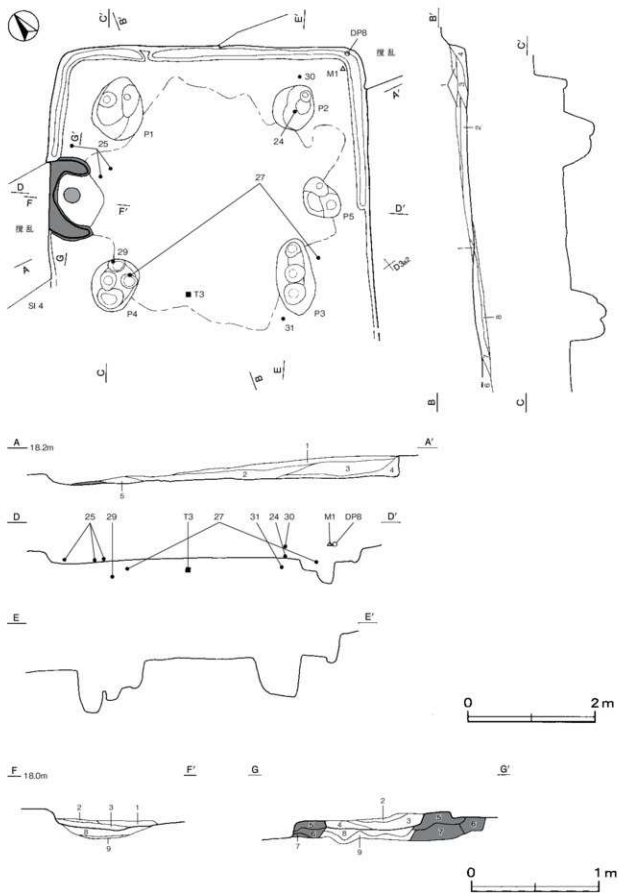
覆土 5層に分層できる。周囲から土砂が流入した様相を示しており、自然堆積と考えられる。第6~8層は貼床の構築土である。

土層解説

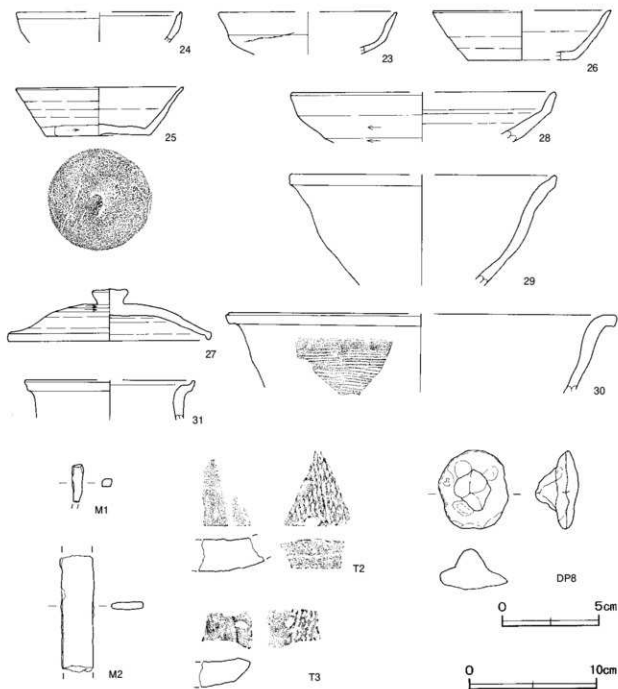
- | | |
|--|------------------------------------|
| 1 暗 褐色 焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子・砂粒微量 | 5 におい黄褐色 粘土ブロック・砂粒中量、焼土ブロック・炭化粒子少量 |
| 2 暗 褐色 焼土ブロック・炭化粒子・砂粒少量、ローム粒子微量 | 6 黒 褐色 焼土粒子微量 |
| 3 暗 褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子・砂粒微量 | 7 暗 褐色 焼土粒子少量、ローム粒子微量 |
| 4 暗 褐色 焼土ブロック中量、炭化粒子・砂粒少量、粘土ブロック・ローム粒子微量 | 8 黒 褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量、砂粒微量 |

遺物出土状況 土師器片393点(坏14, 鉢2, 甕377), 須恵器片115点(坏94, 蓋2, 盤1, 鉢2, 甕15, 瓶1), 土製品1点(鏡形模造品), 鉄製品2点(釘カ, 不明), 瓦片2点(平瓦), 貝1点, 粘土塊8点, 礫2点(礫岩)が出土している。また、混入した瓦質土器片1点も出土している。25は竈右袖付近, 27はP3・P4付近の床面から正位でそれぞれ出土している。31はP3付近の覆土下層, 26は北コーナー部の覆土中からそれぞれ出土している。

所見 時期は、重複関係及び出土土器から8世紀後半と考えられる。



第12图 第2号住居跡实测图



第13図 第2号住居跡出土遺物実測図

第2号住居跡出土遺物観察表 (第13図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
23	土師器	坏	[14.0]	(3.4)	-	灰石・石英・雲母	橙	普通	口縁部外面横ナテ 外・内面ナテ 輪横痕	覆土中	5%
24	土師器	坏	[12.8]	(2.4)	-	灰石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部外面横ナテ 外・内面ナテ	P 2 覆土中	5%
25	須恵器	坏	13.0	3.9	8.0	灰石・石英	黄灰	普通	体部下縁手持ちヘラ削り 底部回転ヘラ削り後 一方削のヘラ削り	床面	80% PL12
26	須恵器	坏	[13.8]	4.0	[8.4]	灰石・石英・雲母・黒色粒子	黄灰	普通	底部ヘラ削り	覆土中	5%
27	須恵器	蓋	15.8	4.1	-	灰石・石英・小礫	灰	普通	天井部回転ヘラ削り	床面	90% PL13
28	須恵器	盤	[30.4]	(4.0)	-	灰石・石英	黄灰	普通	体部下縁回転ヘラ削り	覆土中	5%
29	土師器	鉢	[20.8]	(8.8)	-	灰石・石英・赤色粒子	橙	普通	外・内面ナテ	P 4 覆土中	10%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
30	須臾器	鉢	[30.4]	(6.2)	—	長石・石英・雲母	灰	普通	体部外面横位の平行叩き	覆土上層	5%
31	土師器	甕	[13.4]	(3.1)	—	長石・石英・雲母 に赤・赤黒	普通	外・内面ナデ		覆土下層	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考
DF8	磁形焼造品	4.15	3.68	2.23	17.6	土(長石・石英・赤色粒子)	ボタン状に粘土貼付		覆土上層	PL16
M1	釘	(3.0)	0.8	0.6	(3.2)	鉄	断面方形		覆土上層	PL17
M2	不明	(9.2)	2.8	0.6	(83.1)	鉄	断面長方形		覆土中	PL17

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
T2	平瓦	(6.1)	(5.1)	2.5	(60.9)	長石・石英・赤色粒子	普通	凸面長縄叩き 凹面布目痕 横骨痕	覆土中	
T3	平瓦	(3.0)	(4.0)	2.0	(26.4)	長石・赤色粒子	普通	凸面長縄叩き・ナデ 凹面布目痕	覆土下層	

第3号住居跡 (第14～16図)

位置 調査区中央部のC2J9区、標高173.3mの台地緩斜面部に位置している。

重複関係 第4・15号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸3.96m、短軸3.25mの長方形で、主軸方向はN-58°-Eである。壁高は15～35cmで、ほぼ直立している。

床 ほぼ平坦な貼床で、竈前面から中央部にかけて踏み固められている。貼床は、床の周囲をやや深く掘り込み、暗赤褐色土とにぶい赤褐色土を貼り付けて構築されている。

竈 北東壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで84cm、燃焼部幅44cmである。袖部は床面と同じ高さを基部とし、第14～18層の砂質粘土や砂粒を混ぜた暗褐色土を主として構築されている。火床部は若干皿状を呈しており、火床面の赤変は認められなかった。煙道部は壁外へ半円状に22cmほど掘り込まれ、火床部より外傾して立ち上がっている。第19・20層は竈の掘方である。

竈土層解説

1	暗褐色	焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子・砂粒微量	11	灰褐色	焼土粒子中量、炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量
2	暗褐色	粘土ブロック中量、焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量	12	褐色	焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子・砂粒少量
3	暗褐色	粘土ブロック・焼土粒子・砂粒少量、ローム粒子・炭化粒子微量	13	暗褐色	砂質粘土粒子多量、焼土ブロック・砂質粘土ブロック微量
4	暗褐色	焼土ブロック・砂粒少量、粘土ブロック微量	14	暗褐色	焼土ブロック中量、砂質粘土ブロック少量
5	暗褐色	焼土ブロック中量、粘土ブロック・砂粒少量、ローム粒子・炭化粒子微量	15	暗褐色	ローム粒子多量、焼土粒子微量
6	黒褐色	炭化粒子中量、焼土粒子少量、砂粒微量	16	暗褐色	ローム粒子中量、砂質粘土ブロック・焼土粒子少量
7	暗赤褐色	焼土ブロック・砂粒少量、炭化物微量	17	暗褐色	ローム粒子・砂粒中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量
8	暗赤褐色	焼土ブロック多量、炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量	18	暗褐色	ローム粒子・砂粒中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量
9	暗褐色	砂粒中量、粘土ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量	19	暗褐色	焼土ブロック・砂質粘土ブロック少量
10	黒褐色	焼土ブロック・炭化粒子少量	20	暗褐色	砂質粘土ブロック・ローム粒子少量

ピット 5か所。P1～P4は深さ41～46cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ23cmで、南西壁際の中央部にあることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 11層に分層できる。周囲から土砂が流入した様相を示しているが、ロームブロック、焼土粒子、炭化粒子が不規則に含まれていることから、埋め戻されている。第12層以下は貼床の構築土である。

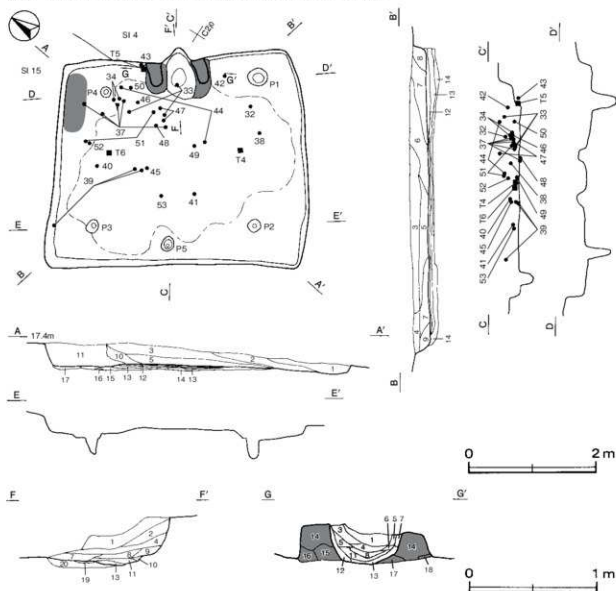
土層解説

1	黒褐色	焼土粒子微量	5	暗褐色	焼土ブロック・炭化粒子・砂粒少量、ローム粒子・粘土粒子微量
2	暗褐色	焼土粒子少量、炭化粒子微量	6	暗褐色	焼土ブロック中量、粘土ブロック・炭化物・砂粒少量、ローム粒子微量
3	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂粒少量			
4	暗褐色	焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子・砂粒少量			

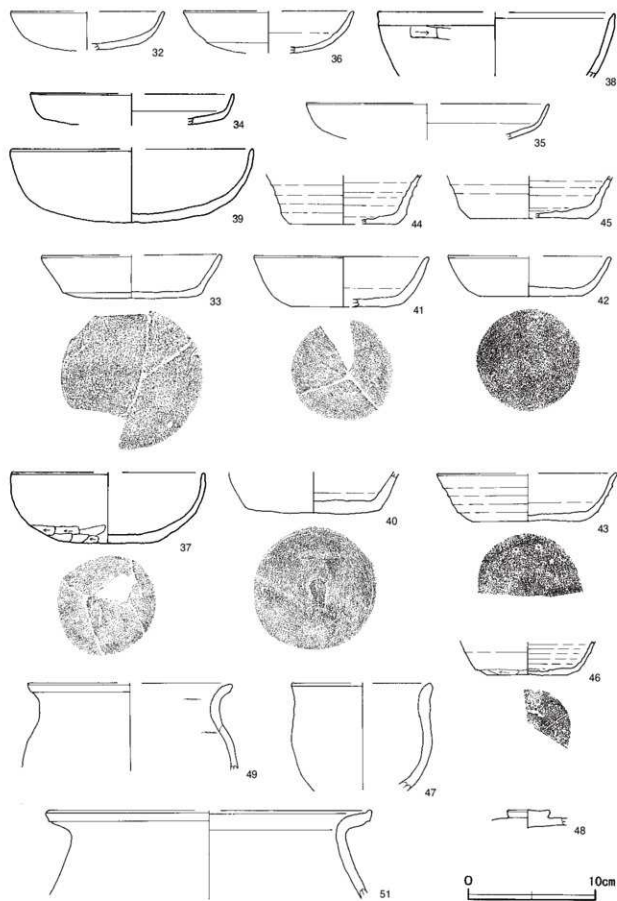
- | | | | |
|--------|-------------------------------------|---------|-------------------------|
| 7 暗褐色 | 焼土ブロック中量、炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量、
ローム粒子微量 | 11 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量 |
| 8 暗褐色 | 焼土ブロック・粘土ブロック・砂粒少量、炭化粒子
微量 | 12 暗赤褐色 | 焼土ブロック多量、焼土粒子少量、ローム粒子微量 |
| 9 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | 13 暗赤褐色 | 焼土ブロック多量、ローム粒子少量、焼土粒子微量 |
| 10 暗褐色 | 焼土ブロック中量、炭化物少量、ローム粒子・粘
土粒子・砂粒微量 | 14 暗赤褐色 | 焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子少量 |
| | | 15 暗赤褐色 | 焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量 |
| | | 16 暗赤褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量 |
| | | 17 暗赤褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 |

遺物出土状況 土師器片 241点(坏78, 椀1, 甕159, 瓶3), 須恵器片 65点(坏41, 蓋4, 甕20), 鉄製品1点(釘), 瓦片4点(丸瓦1, 平瓦3), 粘土塊48点, 礫1点(砂岩)が出土しており, 竈左袖前面からの出土が顕著である。また, 混入した石器1点(剥片)も出土している。48・49は中央部の床面, 43は竈の左袖付近の覆土下層, 40・41・45・53は中央部の覆土中層からそれぞれ出土している。33・34・37は, 中央部から竈左袖前面の覆土中層から下層にかけて出土した破片が接合したものである。北コーナー部付近から北西壁際に沿って幅94cm, 厚さ21cmの粘土塊が出土している。竈の補修などの目的で蓄えられたものと考えられる。

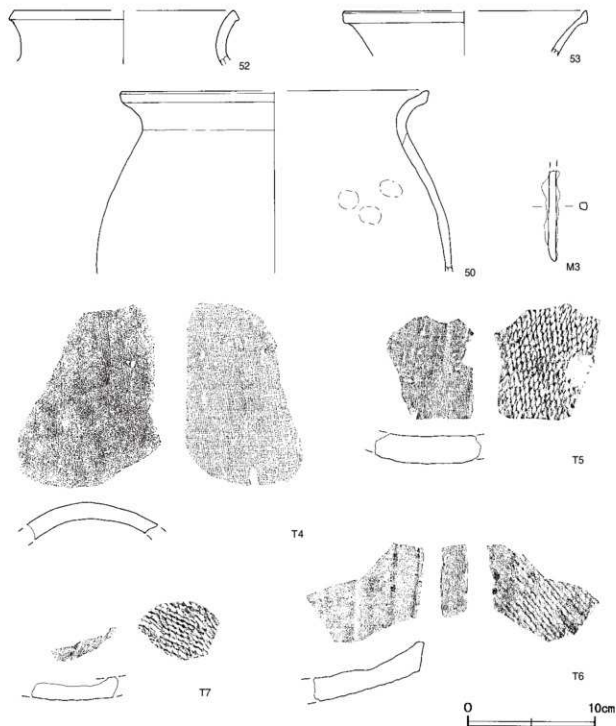
所見 時期は, 重複関係及び出土土器から8世紀前葉と考えられる。



第14図 第3号住居跡実測図



第15图 第3号住居跡出土遺物実測図(1)



第16図 第3号住居跡出土遺物実測図(2)

第3号住居跡出土遺物観察表(第15・16図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
32	土師器	坏	[11.8]	3.0	-	長石・石英・雲母・赤色鉄子	明赤褐	普通	外・内面ナデ	覆土上層	20%
33	土師器	坏	[14.0]	3.4	11.0	長石・石英・雲母・赤色鉄子	橙	普通	底部多方向のヘラ削り後ナデ	覆土中層 一下層	50%
34	土師器	坏	[16.0]	(2.4)	-	長石・石英・雲母・赤色鉄子	橙	普通	底部多方向のヘラ削り後ナデ	覆土中層	20%
35	土師器	坏	[19.0]	(2.8)	-	長石・石英・雲母・赤色鉄子	明赤褐	普通	外・内面ナデ	覆土中	20%
36	土師器	坏	[13.2]	3.3	-	長石・石英・雲母	橙	普通	外・内面ナデ	覆土中	20%
37	土師器	坏	[15.0]	5.6	7.5	長石・石英・雲母	明褐	普通	体部下端手持ちヘラ削り	覆土中層 一下層	70%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
38	土師器	坏	[18.4]	(5.0)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部外・内面横ナテ 底部外縁ヘラ削り後ナテ	覆土中層	10%
39	土師器	坏	[19.0]	5.8	-	長石・石英・雲母・赤色胎子・塵	明赤褐	普通	底部多方向のヘラ削り	覆土上層 ～下層	30%
40	須恵器	坏	-	(3.3)	10.2	長石・石英・雲母	にぶい・橙	普通	底部回転ヘラ切り後多方向のヘラ削り	覆土中層	70% PL11
41	須恵器	坏	13.6	4.0	8.1	長石・石英・雲母	灰黄褐	普通	底部回転ヘラ削り	覆土中層	80% PL11
42	須恵器	坏	[12.8]	3.2	8.0	長石・石英・赤色胎子	橙	普通	底部多方向のヘラ削り	覆土中層	60% PL11
43	須恵器	坏	[14.0]	3.8	8.4	長石・石英・雲母・赤色胎子	灰黄	普通	底部回転ヘラ切り後一方方向のヘラ削り	覆土下層	30%
44	須恵器	坏	-	(3.9)	[8.4]	長石・石英・雲母・塵	にぶい・赤褐	普通	底部多方向のヘラ削り	覆土上層	30%
45	須恵器	坏	-	(3.4)	[9.2]	長石・石英・雲母・塵	にぶい・赤褐	普通	底部一方方向のヘラ削り	覆土中層	20%
46	須恵器	坏	-	(2.7)	[6.0]	長石・石英・雲母・赤色胎子	灰	普通	底部下層平持ちヘラ削り 底部回転ヘラ削り後一方方向のヘラ削り	覆土中層	10%
47	土師器	碗	[10.6]	(8.5)	-	長石・石英・赤色胎子	橙	普通	外・内面ナテ	覆土上層 ～中層	20%
48	須恵器	蓋	-	(1.4)	-	長石・石英・雲母・赤色胎子	橙	普通	ロクロ成形	床面	10%
49	土師器	甕	[15.8]	(6.9)	-	長石・石英・雲母・赤色胎子・塵	にぶい・赤褐	普通	輪轆痕	床面	5%
50	土師器	甕	[24.0]	(14.4)	-	長石・石英・雲母・赤色胎子・塵	橙	普通	内面指圧痕 外・内面ナテ 輪轆痕	覆土中層	10%
51	土師器	甕	[25.4]	(7.0)	-	長石・石英・雲母・赤色胎子・塵	赤	普通	口縁部外面横ナテ 外・内面ナテ	覆土上層 ～中層	5%
52	須恵器	甕	[17.0]	(4.3)	-	長石・石英・赤色胎子	灰白	普通	ロクロ成形	覆土中層	5%
53	須恵器	甕	[19.0]	(3.5)	-	長石・石英・雲母・赤色胎子	灰黄	普通	ロクロ成形	覆土中層	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 3	釘	(7.3)	0.6	0.5	(12.9)	鉄	断面方形	覆土中	PL17

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
T 4	九瓦	(15.1)	(10.6)	1.4	(250.6)	長石・石英	普通	凸面縦方向のヘラ削り後ナテ	凹面布目痕	覆土下層 PL20
T 5	平瓦	(9.7)	(8.4)	2.1	(196.7)	長石・石英・赤色胎子	普通	凸面長縄叩き	凹面布目痕 横骨痕	覆土下層
T 6	平瓦	(8.4)	(8.6)	1.8	(127.7)	長石・石英・赤色胎子	普通	凸面長縄叩き	凹面布目痕・ナテ 横骨痕	覆土下層
T 7	平瓦	(5.3)	(6.8)	1.6	(41.0)	長石・石英・赤色胎子	普通	凸面長縄叩き	凹面布目痕・潤滑 横骨痕	覆土中

第4号住居跡 (第17・18図)

位置 調査区中央部のC 2 j0区、標高17.6mの台地緩斜面部に位置している。

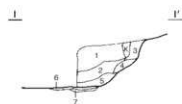
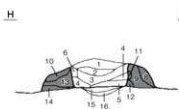
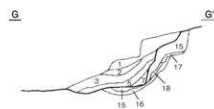
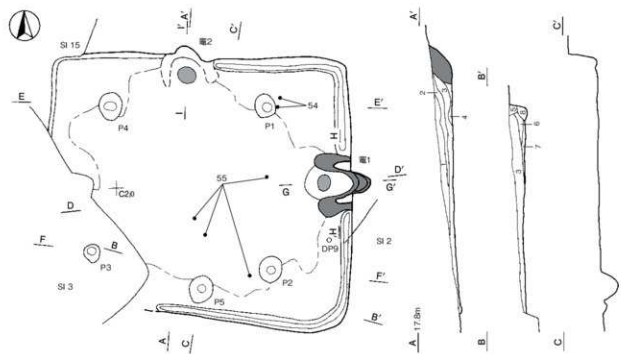
重複関係 第2・3・15号住居に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.75m、短軸4.35mの方形で、主軸方向はN-90°-Eである。壁高は2～50cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほほ平坦で、竈前面から中央部にかけて踏み固められている。壁溝が竈2から南壁にかけて半周しており、断面形はU字状である。

竈 竈1は東壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで104cm、燃焼部幅46cmである。袖部は床面と同じ高さを基部とし、第8～14層の褐色・暗褐色土を積み上げ構築されている。火床部は床面と同じ高さで、火床面は赤変している。煙道部は壁外へ半円状に27cmほど掘り込まれ、火床部より外傾して立ち上がっている。

竈2は北壁の中央部に付設されている。規模は火床部から煙道部まで60cmほどで、燃焼部幅54cmである。袖部は、地山を掘り残した基部のみが確認できた。火床部は床面と同じ高さの平坦な面を使用しており、火床面が赤変硬化している。火床面の上面が硬く締まっており、床面として使用されていたことから、竈2から竈1へ作り替えたと考えられる。第6層は床面、第7層は火床面の土層である。



第 17 图 第 4 号住居跡实测图

竈1土層解説

1	にがい赤褐色	焼土ブロック中量、ロームブロック少量、炭化粒子微量	9	褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量
2	にがい赤褐色	焼土粒子中量	10	暗褐色	焼土ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量
3	暗赤褐色	焼土ブロック多量、炭化物微量	11	暗褐色	焼土ブロック多量、炭化粒子・砂粒中量、ローム粒子少量
4	にがい赤褐色	焼土ブロック多量、砂質粘土粒子中量、炭化粒子少量	12	暗褐色	焼土ブロック多量、ローム粒子・炭化粒子少量
5	暗赤褐色	焼土ブロック多量、炭化粒子中量	13	暗褐色	焼土粒子・ローム粒子中量、炭化粒子少量
6	にがい黄褐色	粘土ブロック・砂粒多量	14	褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量
7	暗赤褐色	焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子・砂粒中量、ローム粒子少量	15	褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
8	褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量	16	褐色	焼土粒子多量、炭化粒子少量
			17	褐色	ローム粒子多量、砂粒中量
			18	黒褐色	焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子少量

竈2土層解説

1	黒褐色	焼土ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量	5	黒褐色	焼土粒子・砂質粘土粒子微量
2	黒褐色	焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量	6	暗赤褐色	焼土ブロック中量、炭化粒子微量
3	暗赤褐色	焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子微量	7	暗赤褐色	焼土粒子多量、炭化粒子微量
4	暗褐色	焼土粒子少量、ローム粒子微量			

ピット 5か所。P1～P4は深さ49～74cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ23cmで、南壁際の中央部にあることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

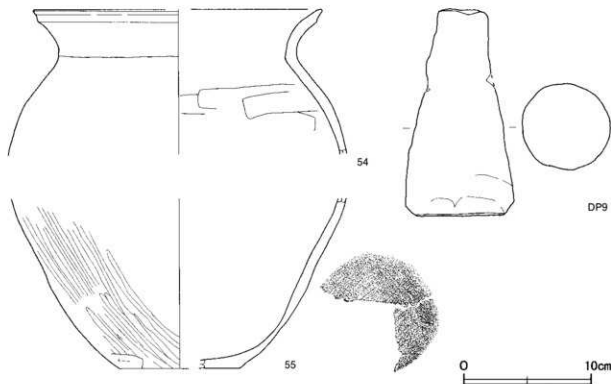
覆土 8層に分層できる。周辺からの土砂が流入した様相を示しており、自然堆積と考えられる。

土層解説

1	暗褐色	ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量	5	暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・砂粒少量、炭化粒子微量
2	暗褐色	砂粒中量、粘土粒子少量、焼土粒子微量	6	黒褐色	焼土ブロック・砂粒少量、炭化粒子微量
3	暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・砂粒少量、炭化粒子・粘土粒子微量	7	黒褐色	焼土ブロック中量、ローム粒子少量、炭化粒子・砂粒微量
4	黒褐色	焼土粒子・砂粒少量、ローム粒子・炭化粒子微量	8	暗褐色	焼土ブロック・ローム粒子少量

遺物出土状況 土師器片201点(坏11, 甕190), 土製品1点(支脚), 粘土塊17点が細片で出土している。また、流れ込んだ縄文土器片1点、混入した瓦質土器片1点も出土している。54はP1付近、55は中央部の床面から出土した破片が接合したものである。DP9は竈1の右袖付近の床面から出土している。

所見 時期は、重複関係や出土土器から8世紀代と考えられる。



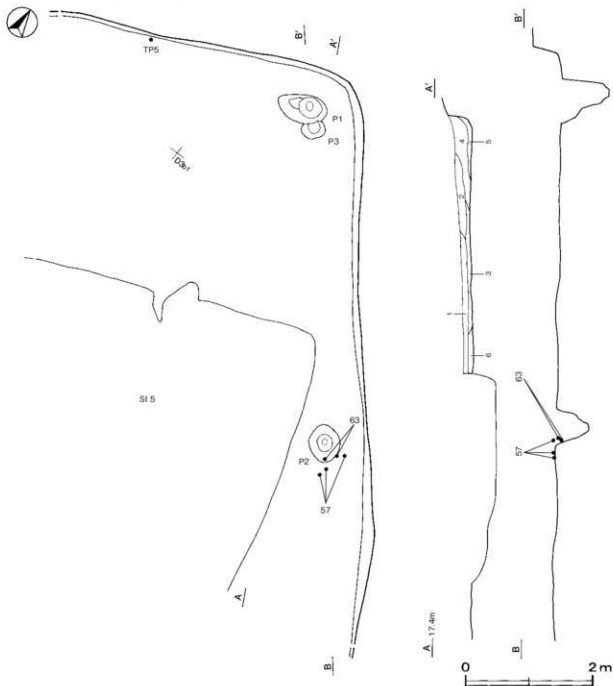
第18図 第4号住居跡出土遺物実測図

第4号住居跡出土遺物観察表 (第18図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
54	土師器	甕	[22.6]	(11.5)	-	灰石・石黄・雲母 赤色粒子	にぶい・赤褐色	普通	口縁部外面横ナデ 内面ヘラナデ	床面	10%
55	土師器	甕	-	(13.5)	[9.4]	灰石・石黄・雲母	にぶい・赤褐色	普通	体部内面へう面片縁へう磨き 底面多方向のへう磨り 54と同一體の可能性有り	床面	10%

番号	器種	高さ	最大径	最小径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP9	支脚	16.4	8.5	4.0	(803.0)	土 (灰石・石黄・雲母)	表面ナデ 火熱痕	床面	PL16

第6号住居跡 (第19・20図)



第19図 第6号住居跡実測図

位置 調査区中央部のD3a1区、標高172mの台地緩斜面部に位置している。

重複関係 第5号住居に掘り込まれている。

規模と形状 傾斜地で確認されたことや第5号住居の掘り込みにより削平されているため、南北軸9.00m、東西軸4.75mしか確認できなかった。平面形は方形もしくは長方形と推定され、長軸方向はN-50°-Wである。残存している壁高は37cmで、ほぼ直立している。

床 ほぼ平坦で、硬化面は認められなかった。

ピット 3か所。P1・P2はそれぞれの深さが78・53cmで、規模と配置、掘方から柱穴と考えられる。P3は深さ35cmで、性格は不明である。

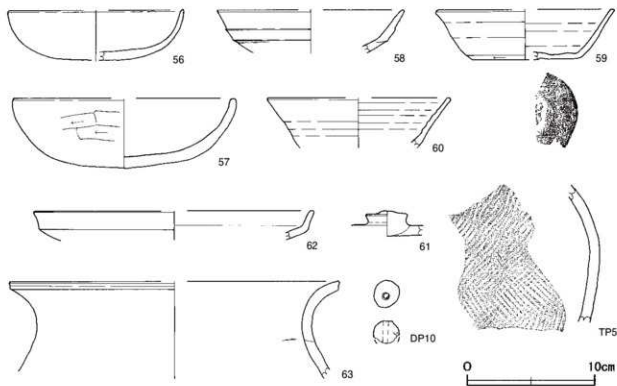
覆土 6層に分層できる。周囲からの土砂が流入した様相を示しており、自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|------------------------------|-------------------------------|
| 1 黒褐色 焼土粒子・粘土粒子・砂粒少量、炭化粒子微量 | 4 黒褐色 焼土ブロック・炭化粒子少量 |
| 2 黒褐色 焼土ブロック・炭化粒子少量、粘土粒子微量 | 5 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子・砂粒微量 | 6 黒褐色 ローム粒子少量、砂粒微量 |

遺物出土状況 土師器片336点(坏50, 甕286)、須恵器片42点(坏34, 蓋1, 甕7)、土製品1点(土玉)、粘土塊1点が出土している。また、流れ込んだ縄文土器片1点も出土している。57はP2付近の床面、63はP2の覆土上層、TP5は北部壁際の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から8世紀中葉と考えられる。



第20図 第6号住居跡出土遺物実測図

第6号住居跡出土遺物観察表(第20図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
56	土師器	坏	[13.8]	4.0	-	長石・石英・赤色 粘土粒子	橙	普通	底部多方向のヘラ削り後ナデ	覆土中	30%
57	土師器	坏	[17.4]	5.5	-	長石・石英・雲母・ 赤色粘土粒子	橙	普通	体部外面ヘラ削り 底部多方向のヘラ削り	床面	40%
58	土師器	坏	[14.6]	(3.4)	-	長石・石英・赤色 粘土粒子	に濃い橙	普通	外・内面ナデ 輪襷痕	覆土中	5%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
59	須恵器	坏	[13.9]	4.0	[8.0]	長石・石英・黒色 胎子	灰	普通	体部下端回転へり張り 乱部回転へり張り 一方 向のへり張り	覆土中	20%
60	須恵器	坏	[14.2]	(4.0)	-	長石・石英	緑灰	普通	口縁部わずかに自然軸	覆土中	20%
61	須恵器	蓋	-	(2.0)	-	長石・石英・雲母 黒色胎子	黄灰	普通	つまみ貼り付け	覆土中	10%
62	須恵器	壺	[21.8]	(2.3)	-	長石・石英・雲母 黒色胎子	黄灰	普通	ロクロ成形	覆土中	5%
63	土師器	甕	[25.8]	(7.7)	-	長石・石英・雲母・ 赤色胎子	にぶい橙	普通	外・内面ナデ 輪轆成	P2覆土層	5%
TP5	須恵器	甕	-	(10.9)	-	長石・石英	灰白	普通	体部斜位の平行引き	覆土下層	PL15

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP10	土玉	2.2	(1.8)	0.4	(6.3)	土(長石・石英)	一方向からの穿孔 ナデ	覆土中	PL16

第7号住居跡 (第21～23図)

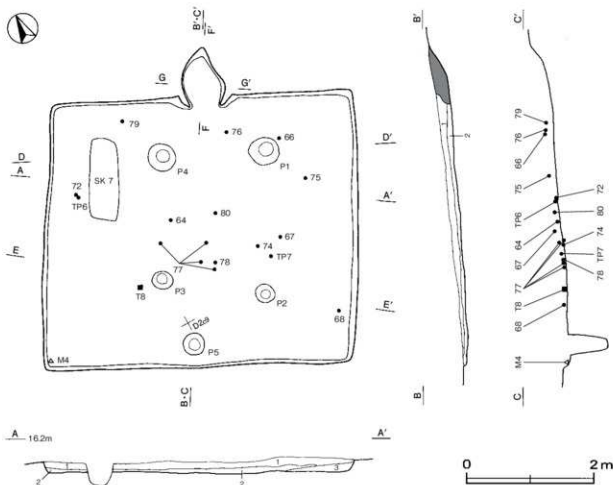
位置 調査区中央部のD2b9区、標高161mの台地緩斜面部に位置している。

重複関係 第7号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.96m、短軸4.29mの長方形で、主軸方向はN-31°-Eである。壁高は5～24cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほほ平坦で、全面的に軟質である。

竈 北東壁の中央部に付設されている。規模は火床部から煙道部まで98cm、燃焼部幅58cmである。袖部は



第21図 第7号住居跡実測図

地山の掘り残しを基部として構築されている。火床部は床面よりやや高い平坦な面を使用し、火床面は赤変している。煙道部は壁外へ釣鐘状に78cmほど掘り込まれ、火床面より緩やかに立ち上がっている。

覆土層解説

- | | |
|---------------------------------|----------------------|
| 1 黒褐色 焼土粒子少量 | 4 黒褐色 焼土粒子微量 |
| 2 黒褐色 焼土ブロック中量 | 5 黒褐色 焼土粒子中量 |
| 3 暗赤褐色 焼土ブロック多量、砂質粘土ブロック・炭化粒子微量 | 6 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量 |
| | 7 黒褐色 ローム粒子微量 |

ピット 5か所。P1～P4は深さ32～55cmで、規模と配置から支柱穴と考えられる。P5は深さ62cmで、南西壁際の中央部にあることから、出入口施設に伴うピットと考えられる。

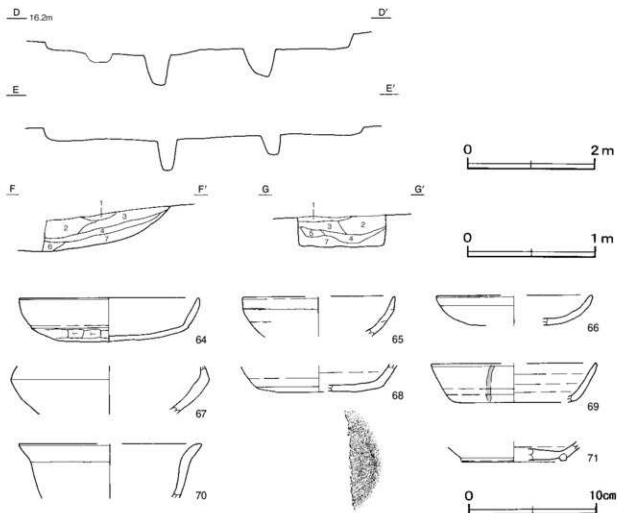
覆土 3層に分層できる。周囲からの土砂が流入した様相を示しており、自然堆積と考えられる。

土層解説

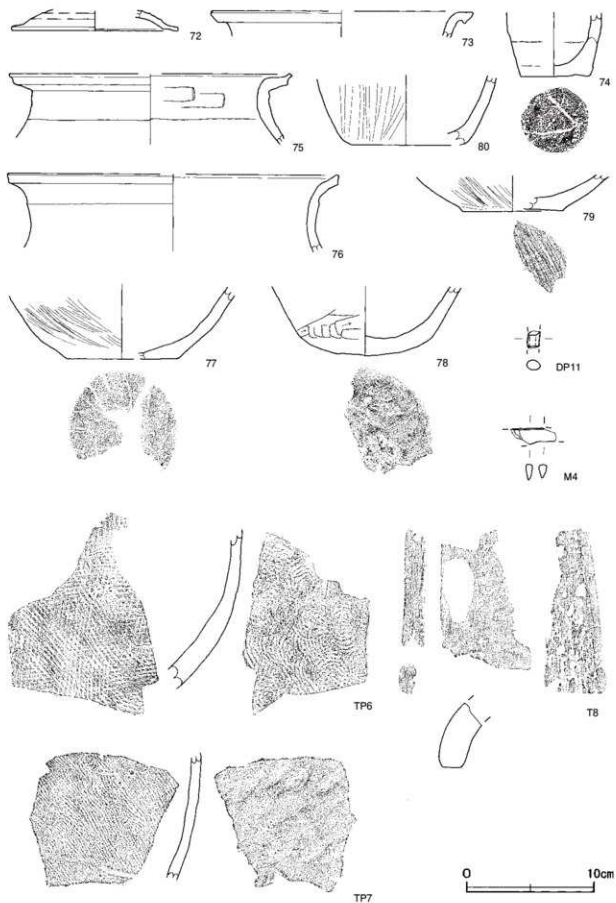
- | | |
|------------------------|----------------------|
| 1 黒褐色 焼土ブロック・炭化物・砂粒少量 | 3 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・砂粒微量 |
| 2 黒褐色 焼土粒子少量、炭化粒子・砂粒微量 | |

遺物出土状況 土師器片624点（坏58、椀1、小形壺2、甕563）、須恵器片117点（坏72、高台付坏2、蓋14、瓶3、鉢1、甕25）、土製品1点（棒状土製品）、鉄製品1点（釘）、瓦片4点（丸瓦1、平瓦3）、粘土塊7点、礫3点（砂岩）が出土している。また、流れ込んだ縄文土器片1点も出土している。64は中央部、68は南部壁際、72は北部の覆土下層からそれぞれ出土している。77は中央部の覆土下層から出土した破片が接合したものである。T8は、中央部の床面から出土しており、住居の廃絶直後に投棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から8世紀前葉と考えられる。



第22図 第7号住居跡・出土遺物実測図



第23图 第7号住居跡出土遺物実測図

第7号住居跡出土遺物観察表 (第22・23図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
64	土師器	坏	14.0	3.6	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	体部下端子持ちヘラ削り 底部多方向のヘラ削り	覆土下層	80% PL11
65	土師器	坏	[12.0]	(3.2)	-	長石・石英・赤色粒子	赤陶	普通	口縁部外面横ナデ 輪軸痕	覆土中層	10%
66	土師器	坏	[12.2]	2.4	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部外面横ナデ	覆土中層	20%
67	土師器	坏	-	(3.9)	-	長石・石英・雲母	褐灰	普通	外・内面ナデ	覆土中層	10%
68	須恵器	坏	-	(2.1)	[10.0]	長石・石英・雲母・黒色粒子	黄灰	普通	底部回転ヘラ削り	覆土下層	20%
69	須恵器	坏	[13.0]	3.0	[9.8]	長石・石英	灰	普通	体部外面火摩 底部多方向のヘラ削り	覆土中	10%
70	土師器	碗	[14.2]	(4.3)	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	外・内面ナデ	覆土中	5%
71	須恵器	高台付坏	-	(1.6)	[8.2]	長石・石英	黄灰	普通	底部回転ヘラ切り後高台削り付け	覆土中	10%
72	須恵器	釜	[13.0]	(1.6)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	灰白	普通	ロクロ成形	覆土下層	5%
73	須恵器	鉢	[20.6]	(2.0)	-	長石・石英	灰	普通	ロクロ成形	覆土中	5%
74	土師器	小形壺	-	(5.1)	5.3	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	輪軸痕 底部木葉痕	覆土下層	30%
75	土師器	甕	[22.2]	(5.6)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部内面ヘラナデ	覆土中層	10%
76	土師器	甕	[25.8]	(6.1)	-	長石・石英・雲母・小礫	橙	普通	口縁部外面横ナデ	覆土中層	5%
77	土師器	甕	-	(5.9)	8.5	長石・石英・雲母	にぶい赤陶	普通	体部外面ヘラ磨き 底部木葉痕	覆土下層	30%
78	土師器	甕	-	(5.5)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子・小礫	にぶい橙	普通	体部下端ヘラ削り	覆土下層	5%
79	土師器	甕	-	(2.8)	[7.8]	長石・石英・雲母・赤色粒子	灰陶	普通	体部外面ヘラ磨き 底部一方向のヘラ磨き	覆土中層	5%
80	土師器	甕	-	(5.6)	[9.8]	長石・石英・雲母	橙	普通	体部下端ヘラ磨き	覆土中層	5%
TP6	須恵器	甕	-	(12.6)	-	長石・石英・赤色粒子・礫	灰	普通	体部格子状の叩き 内面同心円状の当て具痕	覆土下層	PL15
TP7	須恵器	甕	-	(10.1)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄陶	普通	体部斜位の平行叩き 内面当て具痕	覆土下層	PL15

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP11	棒状土製品	(1.4)	1.0	0.8	(1.2)	土(細砂)	ナデ	覆土中	PL16
M 4	刀子	(3.6)	1.6	0.5	(3.88)	鉄	両側	床面	PL16

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
T 8	丸瓦	(13.5)	(3.4)	2.2	(2335)	長石・赤色粒子・礫	普通	凸面横方向のヘラ削り後ナデ 凹面春日痕 輪軸痕	床面	PL20

第11号住居跡 (第24～27図)

位置 調査区南部のF 1 h8区、標高20.5mの台地縁部に位置している。

規模と形状 南東部が調査区域外に延びており、西壁と南壁は残存していない。南北軸3.30m、東西軸2.62mしか確認できず、平面形は方形もしくは長方形と推定される。主軸方向はN-17°-Eである。残存している壁高は25cmで、ほぼ直立している。

床 ほぼ平坦で、竈の前面から中央部にかけて踏み固められている。

竈 北壁に付設されており、規模は焚口部から煙道部まで78cm、燃焼部幅46cmである。袖部は床面からやや掘り下げた部分を基部とし、第5～8層の砂粒を混ぜたにぶい黄褐色土や灰黄褐色土を積み上げて構築されている。火床部は床面を20cmほど掘りくぼめ、ローム・焼土粒子を含んだ第10層の褐色土を埋土として構築し、第9層上面が赤変硬化していることから火床面と考えられる。煙道部は壁外へ三角形に43cmほど掘り込み、火床部から緩やかに立ち上がっている。

竈土層解説

- | | | | |
|----------|------------------|--------|------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子微量 | 6 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・砂粒少量 |
| 2 暗褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子少量 | 7 灰黄褐色 | 砂粒多量、焼土粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子少量、焼土ブロック微量 | 8 灰黄褐色 | 砂粒少量 |
| 4 暗褐色 | 焼土ブロック中量、ローム粒子少量 | 9 明褐色 | 焼土ブロック少量、ローム粒子微量 |
| 5 にぶい黄褐色 | 砂粒中量、ローム粒子微量 | 10 褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子微量 |

ピット 4か所。P1は深さ26cmで、竈を通る軸線上にあり、硬化した床面の南端にあることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P2～P4は深さ10～35cmで、配列や掘方に規則性がなく、性格は不明である。

貯蔵穴 北東コーナー部に位置している。長径130cm、短径60cmの楕円形を呈しており、深さ24cmである。底面は皿状で、壁は緩やかに傾斜して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

- | | |
|-------------------------------|--------------|
| 1 濃い黄褐色 焼土ブロック・砂ブロック中量、炭化粒子微量 | 3 濃い黄褐色 砂粒多量 |
| 2 濃い黄褐色 砂粒少量 | |

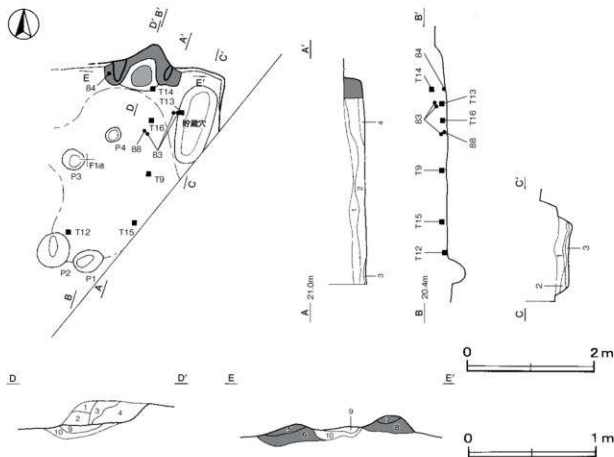
覆土 4層に分層できる。ロームブロック、焼土粒子、炭化粒子を不規則に含んだ堆積状況を示しており、埋め戻されている。

土層解説

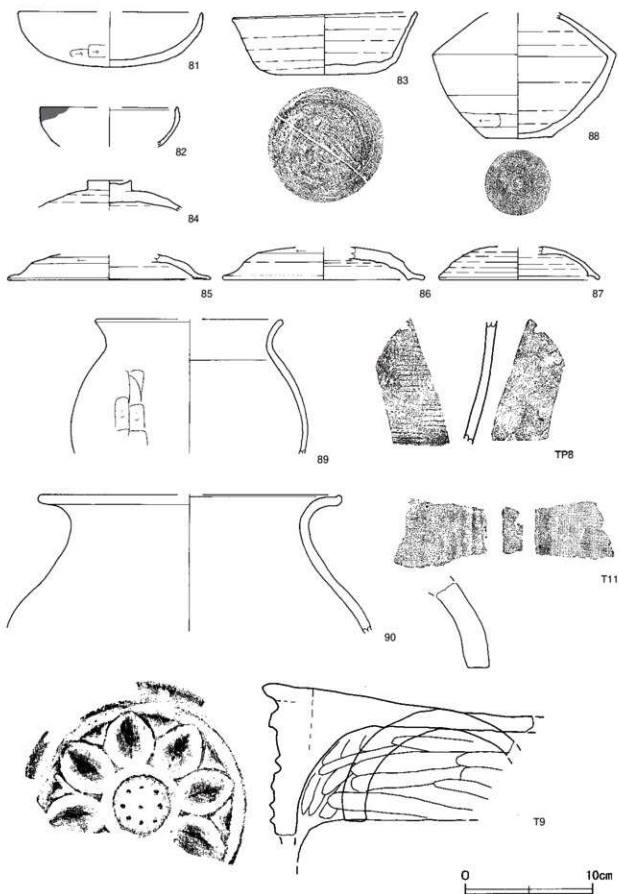
- | | |
|-----------------------------|-----------------------|
| 1 暗褐色 炭化粒子少量、ロームブロック・焼土粒子微量 | 3 暗褐色 焼土粒子少量 |
| 2 暗褐色 焼土粒子中量、炭化物少量 | 4 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・砂粒微量 |

遺物出土状況 土師器片329点(坏31, 甕298)、須恵器片23点(坏4, 蓋11, 瓶1, 甕7)、瓦片27点(軒丸瓦1, 丸瓦2, 平瓦24)、粘土塊5点、礫1点(チャート)が出土している。また、混入した縄文土器片47点も出土している。84は竈左袖付近の床面から逆位で、83・88は竈前面の覆土中層から正位で、85・86は覆土中からそれぞれ出土している。87は、隣接している第1号粘土採掘坑内の破片と接合しており、同時期に廃絶されたものと考えられる。T9の軒丸瓦、T10・T11の丸瓦、T12～T18の平瓦は本跡の廃絶時に投棄されたものである。

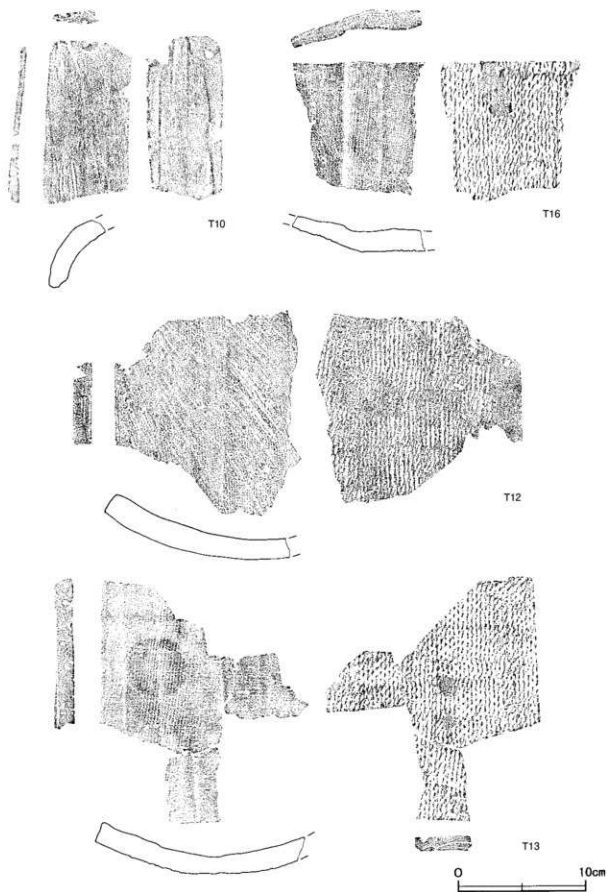
所見 時期は、出土土器から8世紀初頭と考えられる。



第24図 第11号住居跡実測図



第25图 第11号住居跡出土遺物実測図(1)



第26图 第11号住居跡出土遺物実測図(2)



第27図 第11号住居跡出土遺物実測図(3)

第11号住居跡出土遺物観察表(第25～27図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
81	土師器	坏	[14.4]	4.4	-	長石・石英・雲母	橙	普通	外・内面ナデ 底部多方向のヘラ削り	覆土中	20%
82	土師器	坏	[10.6]	(3.1)	-	長石・石英・赤色 粘土	に濃い橙	普通	口縁部外面煤付着	覆土中	10%
83	須恵器	坏	14.5	5.0	9.2	長石・石英・雲母・ 赤色粘土・黒色粘土	黄灰	普通	底部回転ヘラ削り	覆土中層	80% PL12
84	須恵器	蓋	-	(2.4)	-	長石・石英・雲母・ 小礫	浅黄	普通	口クロ成形	床面	60%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
85	須恵器	蓋	[15.8]	(2.0)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	灰白	普通	口口成形	覆土中	20%
86	須恵器	蓋	[15.6]	(2.6)	-	長石・石英・雲母	暗灰	普通	大丹部回転ヘウ割り	覆土中	10%
87	須恵器	蓋	[12.4]	(2.6)	-	長石・石英	灰黄	普通	外面自然熱	覆土中	20% PL13
88	須恵器	甕	-	(10.0)	5.2	長石・石英	褐灰	良好	体部下端回転ヘウ割り 或部回転ヘウ切り 自然熱	覆土中層	60% PL13
89	土師器	甕	[14.4]	(10.6)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	黒	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘウ割り	覆土中	10%
90	土師器	甕	[23.4]	(10.8)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	明黄褐	普通	口縁部外・内面横ナデ	覆土中	10%
TF8	須恵器	甕	-	(9.9)	-	長石・石英	灰	良好	体部隆部の平打明ナデ 内面同心円の当て具横ナデ	覆土中	

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
T 9	軒丸瓦	(21.4)	径 [18.6]	(21105)	長石・細礫	普通	凸面縦方向のヘウ割り 凹面ナデ	覆土中層	PL18	
T10	丸瓦	(13.2)	(4.4)	1.5 (1849)	長石・石英・雲母・赤色粒子	普通	凸面縦方向のヘウ割り後ナデ 凹面布目痕 横骨痕	覆土中	PL18	
T11	丸瓦	(5.5)	(4.3)	1.9 (1045)	長石・石英・赤色粒子・細礫	普通	凸面縦方向のヘウ割り 凹面布目痕	覆土中	PL18	
T12	平瓦	(16.7)	(14.6)	1.9 (6407)	長石・細礫	普通	凸面長縄叩き 凹面布目痕 横骨痕	床面	PL18	
T13	平瓦	(19.8)	(16.6)	1.7 (4046)	長石・細礫	普通	凸面長縄叩き 凹面布目痕 横骨痕	覆土中層		
T14	平瓦	(19.0)	(11.4)	2.2 (5312)	長石・赤色粒子	普通	凸面長縄叩き 凹面布目痕 横骨痕	覆土上層		
T15	平瓦	(17.9)	(8.6)	2.5 (4292)	長石・石英・雲母	普通	凸面長縄叩き 凹面布目痕・ナデ 横骨痕	覆土中層	PL18	
T16	平瓦	(11.5)	(10.9)	1.7 (2651)	長石・石英・赤色粒子	普通	凸面長縄叩き 凹面布目痕 横骨痕	覆土中層	PL18	
T17	平瓦	(9.2)	(6.3)	1.5 (1449)	長石・赤色粒子	普通	凸面長縄叩き 凹面布目痕 横骨痕	覆土中	PL18	
T18	平瓦	(21.4)	(11.3)	1.7 (4410)	長石・細礫	普通	凸面長縄叩き 凹面布目痕 横骨痕	覆土中	PL18	

第14号住居跡 (第28図)

位置 調査区北部のC 4a1区、標高243mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第1号溝に掘り込まれている。

規模と形状 東部が調査区域外に延びており、東西軸3.40m、南北軸290mしか確認できなかった。平面形は方形もしくは長方形と推定され、主軸方向はN-16°-Wである。残存している壁高は35～50cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦な貼床で、竈前面からP1にかけて踏み固められている。貼床は地山を平坦に掘り込み、ロームブロックを混ぜた暗褐色土で構築されている。

竈 北壁に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで125cm、燃焼部幅49cmである。袖部は床面と同じ高さを基部として、第11～15層の暗褐色土を積み上げ構築されている。火床部は床面と同じ高さの平坦な面を使用しており、火床面は亦変硬化している。第16層は火床面の土層である。煙道部は壁外へ半円状に41cmほど掘り込まれ、火床部より緩やかに立ち上がっている。

甕土層解説

1 黒褐色	焼土ブロック・ローム粒子・砂粒微量	10 暗赤褐色	ローム粒子・焼土粒子・砂粒微量
2 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子微量	11 におい黄褐色	焼土粒子少量
3 灰褐色	砂粒中量、焼土ブロック少量、ローム粒子微量	12 暗褐色	焼土ブロック中量
4 黒褐色	ローム粒子微量	13 暗褐色	焼土粒子少量
5 黒褐色	焼土ブロック・砂粒少量	14 暗褐色	焼土粒子微量
6 暗赤褐色	焼土ブロック・砂粒微量	15 褐色	焼土粒子微量
7 暗褐色	ローム粒子中量、焼土ブロック・砂粒微量	16 暗赤褐色	焼土ブロック多量
8 暗赤褐色	焼土ブロック中量、炭化粒子少量、砂粒微量	17 黒褐色	ローム粒子少量
9 黒褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック微量		

ピット P1は深さ26cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。

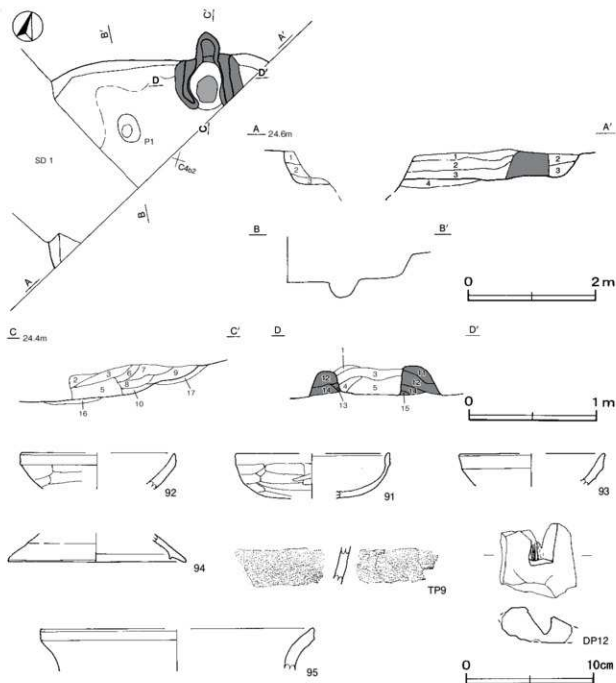
覆土 3層に分層できる。周囲からの土砂が流入した様相を示しており、自然堆積と考えられる。第4層は貼床の構築土である。

土層解説

- | | |
|---------------|----------------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子微量 | 3 暗褐色 ローム粒子少量、埴土粒子微量 |
| 2 暗褐色 ローム粒子少量 | 4 暗褐色 ロームブロック中量 |

遺物出土状況 土師器片 83点 (坏 15, 甕 68), 須恵器片 2点 (蓋, 甕), 不明土製品 1点が出土している。また、流れ込んだ縄文土器片 3点も出土している。土師器片 15点が竈内から出土しているが、竈左袖前面の覆土中から出土している破片を含め、ほとんどが細片であった。

所見 時期は、出土土器から8世紀前葉と考えられる。



第28図 第14号住居跡・出土遺物実測図

第14号住居跡出土遺物観察表(第28図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
91	土師器	坏	[12.0]	3.5	—	長石・石英	橙	普通	体部外面へラ削り	覆土中	20%
92	土師器	坏	[12.0]	(2.8)	—	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口縁部外面横ナデ 体部外面へラ削り	覆土中	5%
93	土師器	坏	[11.2]	(2.5)	—	長石・石英	灰黄褐	普通	口縁部外面横ナデ	覆土中	5%
94	須恵器	蓋	[14.0]	(2.2)	—	長石・石英	灰	普通	ロクロ成形	覆土中	5%
95	土師器	甕	[21.4]	(3.3)	—	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口縁部外面横ナデ	覆土中	5%
TF9	須恵器	甕	—	(2.9)	—	長石・石英・雲母	灰白	普通	体部横位の平行叩き	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP12	不明土製品	(5.9)	(6.1)	2.9	(63.2)	土(長石・石英)	木目付き		電覆土中

第15号住居跡(第29図)

位置 調査区中央部のC2i9区、標高17.7mの台地緩斜面部に位置している。

重複関係 第3号住居に掘り込まれ、第4号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 東西軸は3.95mで、南北軸は3.71mしか確認できなかった。南西壁が残存していないが、平面形は方形と推定される。主軸方向はN-63°-Wである。残存している壁高は8~30cmである。

床 ほぼ平坦で、竈前面から中央部にかけて踏み固められている。

竈 北西壁に付設されている。規模は火床部から煙道部まで76cm、燃焼部幅68cmである。軸部は床面と同じ高さを基部として、第15層の砂粒を少量混ぜた暗褐色土で構築されている。火床部は床面と同じ高さの平坦な面を使用しており、火床面は赤変している。煙道部は壁外へ半円状に38cmほど掘り込まれ、火床部より緩やかに立ち上がっている。第16~20層は掘方への埋土層である。

電土層解説

1 灰 褐色 砂粒多量、ロームブロック微量	12 暗 褐色 炭化粒子・砂粒少量
2 黒 褐色 焼土ブロック・炭化物中量	13 におい黄褐色 焼土粒子少量
3 暗 赤褐色 焼土ブロック・砂粒少量	14 黒 褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・砂粒少量
4 灰 黄褐色 焼土ブロック・砂質粘土粒子少量	15 暗 褐色 砂粒少量
5 黒 褐色 焼土ブロック中量、炭化粒子・砂粒少量	16 極暗赤褐色 焼土粒子・砂粒中量
6 灰 褐色 焼土粒子・砂粒中量、炭化粒子少量	17 灰 黄褐色 砂粒中量、ロームブロック・焼土粒子少量
7 におい黄褐色 砂粒微量	18 灰 黄褐色 砂粒多量、焼土粒子微量
8 におい橙色 砂質粘土粒子多量	19 黒 褐色 砂粒少量、ロームブロック微量
9 におい黄褐色 焼土粒子少量	20 灰 黄褐色 砂粒中量、ロームブロック少量、焼土粒子微量
10 におい黄褐色 砂粒少量	
11 黒 褐色 焼土ブロック中量、炭化粒子少量	

ピット 6か所。P1~P4は深さ40~65cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ18cmで、南東壁際の中央部にあることから、出入口施設に伴うピットと考えられる。P6は深さ13cmで、性格は不明である。

覆土 8層に分層できる。周囲からの土砂が流入した様相を示しており、自然堆積と考えられる。

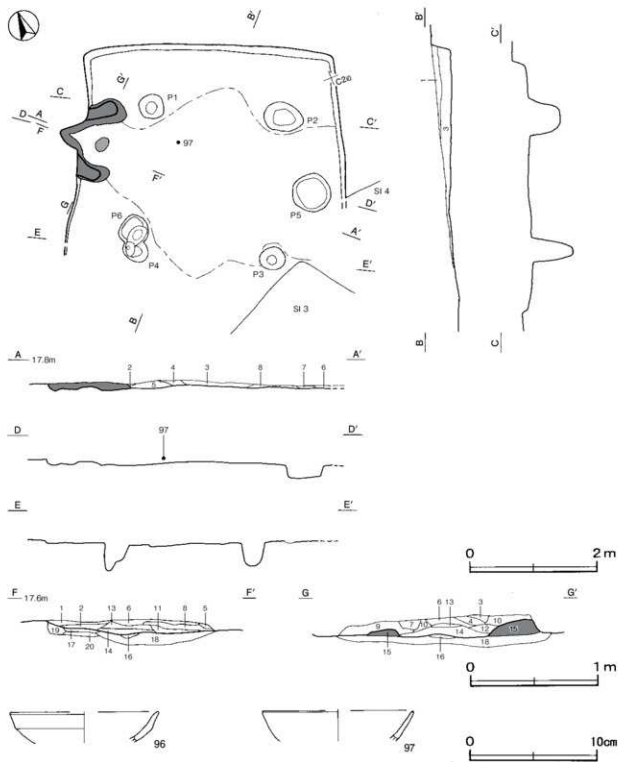
土層解説

1 黒 褐色 ローム粒子中量、砂粒少量、焼土粒子・炭化粒子微量	5 灰 黄褐色 砂粒多量、焼土粒子微量
2 黒 褐色 焼土粒子・炭化粒子・砂粒少量	6 黒 褐色 焼土粒子・粘土粒子・砂粒少量
3 暗 褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂粒少量	7 黒 褐色 焼土粒子・砂粒少量、ローム粒子・粘土粒子微量
4 灰 黄褐色 砂粒中量、焼土粒子・炭化粒子微	8 灰 黄褐色 粘土粒子・砂粒少量、焼土粒子微量

遺物出土状況 土師器片45点(坏21,甕24)、粘土塊3点、貝10点、礫2点(砂岩・泥岩)が出土している。

97は中央部の覆土下層、96は竈の覆土中からそれぞれ出土している。

所見 時期は、重複関係及び出土土器から8世紀前葉と考えられる。



第29図 第15号住居跡・出土遺物実測図

第15号住居跡出土遺物観察表 (第29図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
96	土師器	坏	[11.6]	(2.4)	-	長石・石英・赤色 粘土	明赤褐	普通	外・内面ナデ	竈裡土中	5%
97	土師器	坏	[11.8]	(2.3)	-	長石・石英・赤色 粘土	橙	普通	外・内面ナデ	竈土下層	5%

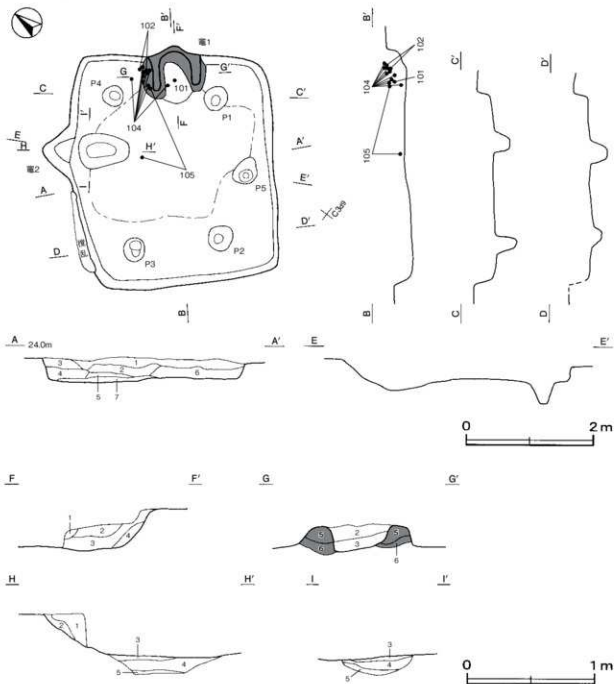
第 16 号住居跡 (第 30・31 図)

位置 調査区北部の C 3c8 区、標高 23.8 m の台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸 3.68 m、短軸 3.17 m の長方形で、主軸方向は N - 50° - E である。壁高は 25 ~ 32 cm で、外傾して立ち上がっている。

床 ほほ平坦で、竈前面から中央部にかけて踏み固められている。

竈 竈 1 は北東壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 85 cm、燃焼部幅 40 cm である。袖部は床面と同じ高さを基部とし、第 5・6 層の砂粒を多量に混ぜたにぶい黄褐色土を積み上げて構築されている。火床部は床面と同じ高さで、火床面の赤変は認められなかった。煙道部は壁外へ半円状に 10 cm ほど掘り込まれ、火床部より外傾して立ち上がっている。



第 30 図 第 16 号住居跡実測図

竈2は北西壁の中央部に付設されている。壁外へ三角形に44cm掘り込んでいることが確認でき、袖部や火床部は確認できなかった。火床部と想定される部分の上面が硬く締まっており、床面として使用されていたことから、竈2から竈1へ作り替えたと考えられる。第3層は火床面、第4・5層は掘方への埋土層である。

竈1土層解説

- | | |
|-----------------------------|--------------------------|
| 1 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック微量 | 4 黒褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック微量 |
| 2 黒褐色 ロームブロック中量、砂粒微量 | 5 にいり褐色 砂粒多量、焼土粒子中量 |
| 3 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、砂粒微量 | 6 褐色 ロームブロック多量 |

竈2土層解説

- | | |
|----------------------------|------------------------|
| 1 暗褐色 焼土ブロック中量 | 4 暗褐色 焼土ブロック多量、ローム粒子微量 |
| 2 暗褐色 ローム粒子多量 | 5 暗褐色 炭化粒子少量 |
| 3 暗褐色 焼土ブロック多量、炭化物・ローム粒子少量 | |

ピット 5か所。P1～P4は深さ14～33cmで、規模と配置から支柱穴と考えられる。P5は深さ33cmで、南東壁際の中央部にあることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

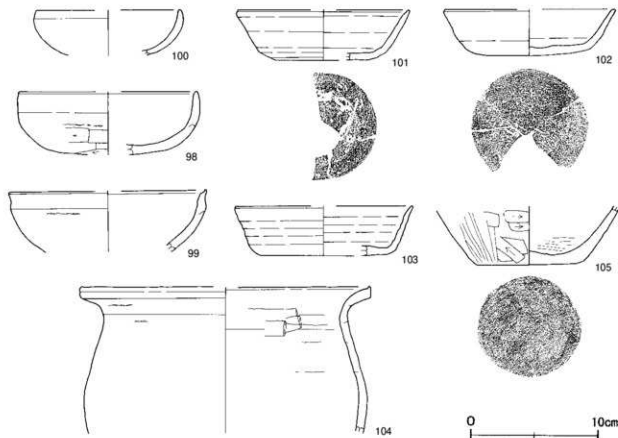
覆土 7層に分層できる。ブロック状に不規則な堆積状況を示しており、埋め戻されている。

土層解説

- | | |
|--------------------------|--------------------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック微量 | 5 黒褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック少量 |
| 2 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック微量 | 6 黒褐色 ロームブロック少量 |
| 3 黒褐色 ロームブロック微量 | 7 暗褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック微量 |
| 4 黒褐色 ローム粒子少量 | |

遺物出土状況 土師器片132点(坏14, 甕118), 須恵器片7点(坏)が出土している。また、混入した縄文土器片1点も出土している。101は竈覆土中層, 102は竈左袖付近の覆土上層から出土している。104は左袖付近の覆土上層と竈内の覆土中層, 105は竈左袖付近の覆土上層と中央部の覆土中層から出土した破片がそれぞれ接合したものである。99・100は北東部の覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から8世紀前葉と考えられる。



第31図 第16号住居跡出土遺物実測図

第16号住居跡出土遺物観察表 (第31図)

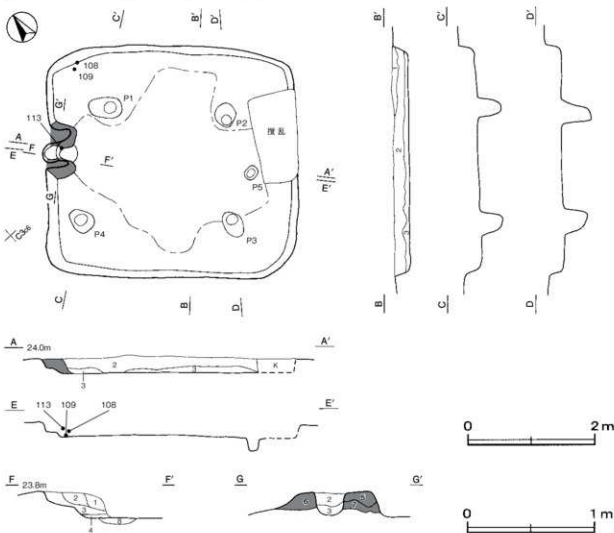
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
98	土師器	坏	[13.9]	5.0	-	長石・石英・赤色 粒子	橙	普通	底部下電子持ちヘラ削り 底部多方向のヘラ削り 輪切痕	覆土中	30%
99	土師器	坏	[15.3]	(4.8)	-	長石・石英・赤色 粒子	明赤褐	普通	口縁部外面ナデ 底部外面細い工具によるヘ ラ削き 輪切痕	覆土中	20%
100	土師器	坏	[11.2]	(3.6)	-	長石・石英	橙	普通	口縁部外面ナデ	覆土中	5%
101	須恵器	坏	[13.6]	4.0	8.5	長石・石英	黄灰	普通	底部回転ヘラ切り後ヘラ削り	覆土中層	40%
102	須恵器	坏	[13.4]	3.7	9.2	長石・石英・雲母 に多い赤褐色	普通	普通	底部一方向のヘラ切り後ナデ	覆土中層	30%
103	須恵器	坏	[14.0]	4.0	[10.0]	長石・石英・雲母 赤色粒子	灰黄褐	普通	底部多方向のヘラ削り	覆土中	10%
104	土師器	甕	[22.8]	(11.6)	-	長石・石英・雲母	明褐	普通	口縁部外・内面ナデ 外・内面ヘラナデ 輪切痕	覆土上層 ~中層	20%
105	土師器	甕	-	(4.7)	8.2	長石・石英・雲母 に多い赤褐色	普通	普通	底部外面ヘラ削り後ヘラ削き 内面ヘラナデ	覆土上層 ~中層	5%

第17号住居跡 (第32・33図)

位置 調査区北部のC3c6区、標高23.9mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸3.96m、短軸3.70mの方形で、主軸方向はN-45°-Wである。壁高は20~28cmで、外傾して立ち上がっている。

床 はほぼ平坦で、竈前面から中央部にかけて踏み固められている。



第32図 第17号住居跡実測図

竈 北西壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで58cm、燃焼部幅28cmである。袖部は床面と同じ高さを基部として、第5～7層の褐色土を積み上げて構築されている。火床部は床面と同じ高さの平坦な面を使用しており、火床面は赤変していなかった。煙道部は壁外へ半円状に9cmほど掘り込まれ、火床部より段差を経て、外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

- | | |
|----------------------------------|-----------------------|
| 1 黒褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック・砂粒微量 | 5 明黄褐色 ロームブロック・焼土粒子中量 |
| 2 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・砂粒少量、炭化粒子微量 | 6 褐色 焼土粒子・炭化粒子中量 |
| 3 暗赤褐色 ローム粒子中量、焼土ブロック少量、砂粒微量 | 7 褐色 ローム粒子少量 |
| 4 暗赤褐色 焼土ブロック少量、ロームブロック微量 | 8 褐色 焼土ブロック中量 |

ピット 5か所。P1～P4は深さ36～47cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ23cmで、南東壁際の中央部にあることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

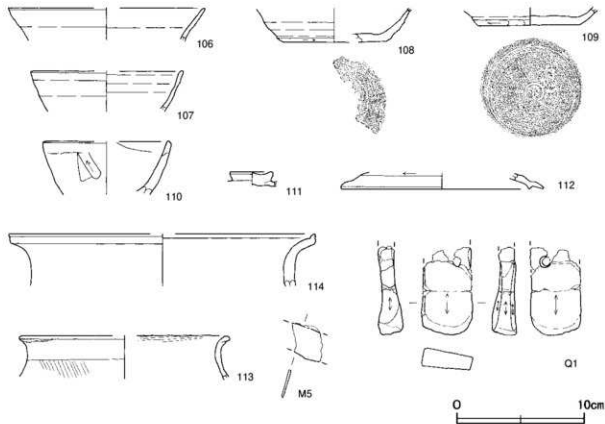
覆土 3層に分層できる。周囲から土砂が流入した様相を示しており、自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|----------------------------|-----------------------------|
| 1 褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 3 褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量 | |

遺物出土状況 土師器片151点（坏34、碗1、甕116）、須恵器片14点（坏8、蓋2、甕4）、石器1点（砥石）、鉄製品1点（鎌カ）、瓦1点（平瓦）、粘土塊9点、礫2点（雲母片岩、砂岩）が出土している。また、流れ込んだ縄文土器片10点も出土している。108・109は北コーナー部の覆土下層、113は竈の覆土中層からそれぞれ出土している。106・112は東部、107・110は西部の覆土中からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から8世紀前葉と考えられる。



第33図 第17号住居跡出土遺物実測図

第17号住居跡出土遺物観察表 (第33図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
106	土師器	坏	[15.4]	(2.6)	-	長石・石英	にぶい黄褐色	普通	外・内面ナデ	覆土中	5%
107	須恵器	坏	[11.8]	(3.2)	-	長石・石英・雲母 赤色粒子	黄灰	普通	口タロ成形	覆土中	5%
108	須恵器	坏	-	(2.7)	[8.0]	長石・石英・雲母 赤色粒子	黄灰	普通	体部下端回転ヘウ割り 底部回転ヘウ割り	覆土下層	20%
109	須恵器	坏	-	(1.4)	8.0	長石・石英・雲母	黄灰	普通	体部下端回転ヘウ割り 底部回転ヘウ割り	覆土下層	40%
110	土師器	碗	[9.6]	(4.2)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	体部外面ヘウ割り 内面ヘウナデ 編積痕	覆土中	20%
111	須恵器	蓋	-	(1.2)	-	長石・石英	にぶい黄褐色	普通	つまみ貼り付け	覆土中	5%
112	須恵器	蓋	[15.8]	(1.2)	-	長石・石英	灰黄	普通	天井部回転ヘウ割り	覆土中	5%
113	土師器	甕	[16.2]	(3.5)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	口縁部内面斜方向のヘウナデ 外面斜方向のヘウナデ 編積痕	覆土中層	5%
114	土師器	甕	[24.0]	(4.1)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部外・内面ナデ	覆土中	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 1	砥石	(6.9)	4.0	1.9	(56.8)	凝灰岩	砥面4か所 穿孔1か所	覆土中	PL17
M 5	鎌	(3.1)	2.4	0.2	(3.76)	鉄	刃部片 曲刃	覆土中	PL17

第18号住居跡 (第34～36図)

位置 調査区北部のB 3g0区、標高24.1mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第24号住居跡を掘り込み、第24号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.20m、短軸5.12mの方形で、主軸方向はN-33°-Wである。壁高は30～44cmで、ほぼ直立している。

床 ほぼ平坦な貼床で、竈前面から中央部にかけて踏み固められている。貼床は、中央部を10cmほど平坦に掘り込みロームブロックを埋土し、壁際は20cmほど掘り込み暗褐色土を埋土して構築している。

竈 北西壁の中央部に付設されている。規模は火床部から煙道部まで112cm、燃焼部幅56cmである。袖部は床面を10～15cm掘りくぼめ、第18層のローム土を埋め戻した面に、第11～16層の褐色土を主として積み上げて構築されている。火床部は床面と同じ高さの平坦な面を使用しており、火床面は赤変硬化している。煙道部は壁外へ半円状に25cmほど掘り込まれ、火床部より緩やかに立ち上がっている。

甕土層解説

- | | |
|------------------------|--------------------------|
| 1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子微量 | 10 褐色 焼土ブロック多量 |
| 2 黒褐色 焼土粒子・砂粒少量、炭化粒子微量 | 11 暗褐色 焼土粒子少量、砂粒微量 |
| 3 褐色 焼土ブロック・ローム粒子少量 | 12 にぶい黄褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量 |
| 4 にぶい黄褐色 ローム粒子少量 | 13 褐色 ローム粒子・焼土粒子少量 |
| 5 にぶい黄褐色 ローム粒子微量 | 14 褐色 ローム粒子中量 |
| 6 褐色 焼土粒子中量 | 15 褐色 ローム粒子少量 |
| 7 にぶい黄褐色 砂粒多量 | 16 にぶい黄褐色 ロームブロック少量 |
| 8 暗褐色 焼土粒子中量 | 17 暗褐色 焼土粒子多量 |
| 9 暗褐色 砂粒多量 | 18 褐色 ロームブロック中量 |

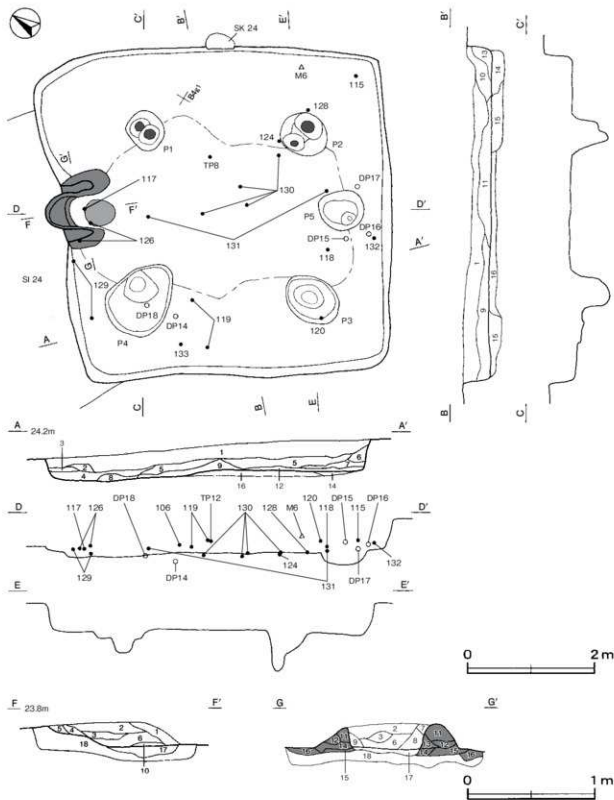
ピット 5か所。P1～P4は深さ35～65cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ21cmで、南東壁際の中央部にいることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P1・P2には柱の当たり痕がそれぞれ2か所あり、位置の変更が行われている。

覆土 13層に分層できる。ブロック状に不規則な堆積状況を示しており、埋め戻されている。第14層以下は、貼床の構築土である。

土層解説

- | | |
|-----------------|------------------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック少量 | 3 褐色 焼土ブロック・ローム粒子・砂粒少量 |
| 2 黒褐色 ロームブロック少量 | 4 褐色 ロームブロック中量 |

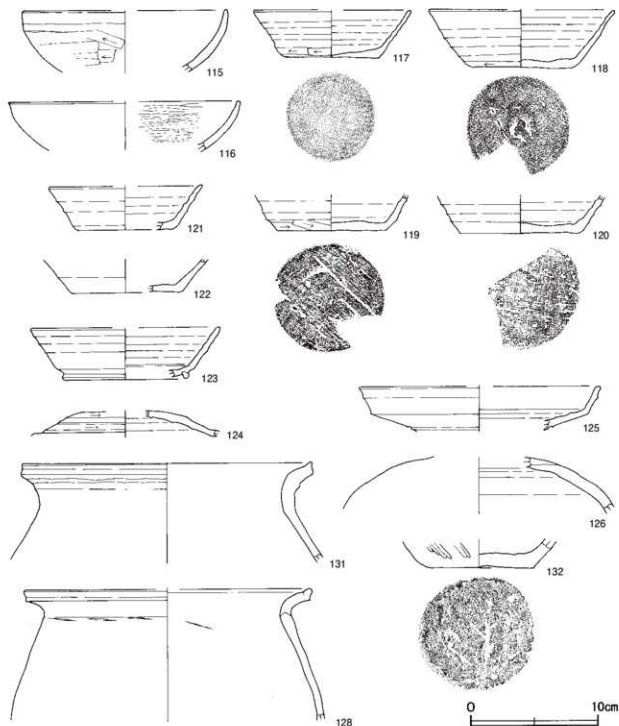
- | | | | |
|----------|-----------------------|-----------|------------------------|
| 5 暗 褐 色 | ロームブロック中量 | 11 灰 褐 色 | ロームブロック・焼土粒子少量 |
| 6 褐 色 | ロームブロック少量 | 12 褐 色 | ローム粒子少量, 焼土粒子・砂質粘土粒子微量 |
| 7 褐 色 | ローム粒子中量, ローム粒子少量 | 13 灰 褐 色 | ローム粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 8 暗 褐 色 | ローム粒子少量 | 14 にふい青褐色 | 焼土ブロック中量 |
| 9 暗 褐 色 | ロームブロック多量 | 15 にふい青褐色 | 焼土ブロック少量 |
| 10 暗 褐 色 | ロームブロック・焼土粒子・砂質粘土粒子少量 | 16 暗 褐 色 | ロームブロック多量 |



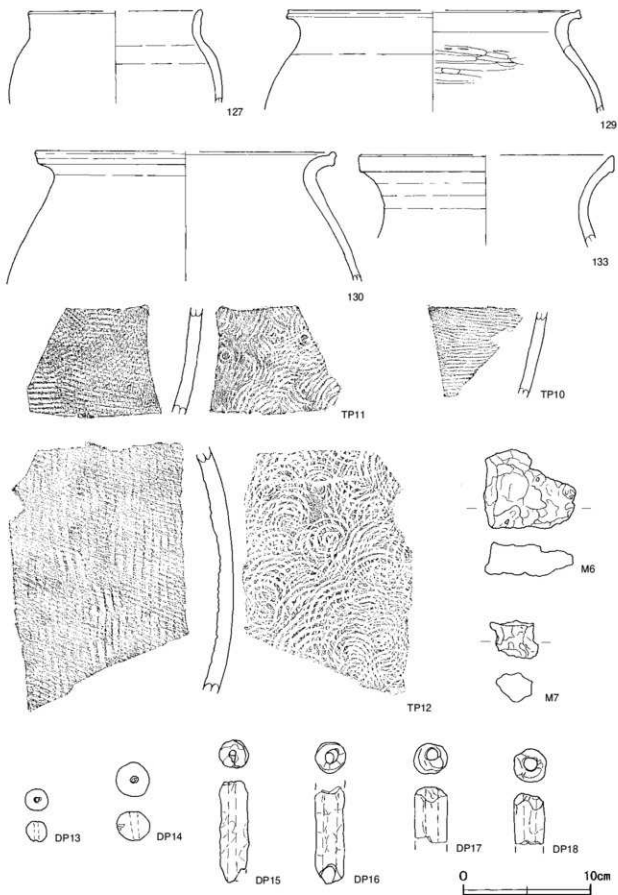
第34図 第18号住居跡実測図

遺物出土状況 土師器片 676 点 (坏 39, 高台付坏 1, 高坏 1, 甕 635), 須恵器片 97 点 (坏 69, 蓋 6, 盤 3, 鉢 2, 瓶 3, 甕 14), 土製品 6 点 (土玉 2, 管状土鍾 4), 鉄滓 3 点, 粘土塊 9 点が出土している。また, 混入した縄文土器片 19 点も出土している。117 は竈覆土下層から出土し, 126 は竈右袖付近と竈内覆土下層から出土した破片が接合したものである。118 は P 5 付近の覆土下層から, 115 は東部コーナー, 120 は P 3 付近の覆土中層からそれぞれ出土している。130 は中央部床面, 131 は中央部覆土下層, 119 は南西壁際中央の覆土中層と下層から出土した破片がそれぞれ接合したものである。

所見 時期は, 重複関係及び出土土器から 8 世紀後葉と考えられる。



第 35 図 第 18 号住居跡出土遺物実測図 (1)



第36图 第18号住居跡出土遺物実測図(2)

第18号住居跡出土遺物観察表 (第35・36図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
115	土師器	坏	[15.8]	(4.9)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	体部外面ヘラ削り 輪襷痕	覆土中層	30%
116	土師器	坏	[18.0]	(4.0)	-	長石・石英	明赤褐色	普通	内面ヘラ磨き 輪襷痕	甕覆土中	10%
117	須恵器	坏	[12.6]	3.8	7.8	長石・石英	にぶい黄褐色	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部面・横方向のヘラ削り	甕覆土下層	70%
118	須恵器	坏	[14.4]	4.6	7.8	長石・石英・雲母	灰	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り後一方のヘラ削り	覆土下層	40%
119	須恵器	坏	-	(2.9)	8.6	長石・石英・小礫	黄灰	普通	体部下端平持ちヘラ削り 底部面・横方向のヘラ削り	覆土中層 下層	50%
120	須恵器	坏	-	(3.0)	[9.4]	長石・石英・雲母・赤色砂子	黄灰	普通	底部一方向のヘラ削り	覆土中層	30%
121	須恵器	坏	[11.8]	3.5	[7.6]	長石・石英・黒色砂子	灰白	普通	底部一方向のヘラ削り	覆土中	10%
122	須恵器	坏	-	(2.7)	[8.4]	長石・石英	灰白	普通	底部回転ヘラ削り	覆土中	10%
123	須恵器	高台付坏	[14.6]	4.1	[9.6]	長石・石英	黄灰	普通	高台削り付け	覆土中	30%
124	須恵器	蓋	-	(2.1)	-	長石・石英	黄灰	普通	天井部回転ヘラ削り	床面	20%
125	須恵器	盤	[18.8]	(3.5)	-	長石・石英・小礫	黄灰	普通	口クロ成形	覆土中	10%
126	須恵器	瓶	-	(4.4)	-	長石・石英	灰白	良好	自然釉	甕覆土下層	10% 調査区 PL33
127	土師器	甕	[13.3]	(7.3)	-	長石・石英・雲母・赤色砂子	にぶい黄褐色	普通	頸部内面横ナデ	P4 覆土中	10%
128	土師器	甕	[22.4]	(10.5)	-	長石・石英・雲母	明赤褐色	普通	口縁部外面横ナデ 輪襷痕	床面	5%
129	土師器	甕	[22.8]	(8.1)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	頸部外面横ナデ 内面ヘラナデ 輪襷痕	覆土下層	10%
130	土師器	甕	[23.4]	(10.3)	-	長石・石英・雲母・赤色砂子	黄	普通	頸部外面横ナデ	床面	5%
131	土師器	甕	22.6	(8.0)	-	長石・石英・雲母・小礫	黄	普通	頸部外面ヘラ削り工具によるナデ	覆土下層	5%
132	土師器	甕	-	(2.3)	8.8	長石・石英・雲母	明赤褐色	普通	体部下端ヘラ磨き 底部面・横方向のヘラ削り	覆土下層	10%
133	須恵器	甕	[19.8]	(7.2)	-	長石・石英・雲母	黄灰	普通	口クロ成形	覆土下層	5%
TP10	須恵器	甕	-	(6.8)	-	長石・石英・雲母	灰白	普通	体部横位の平行叩き	覆土中	
TP11	須恵器	甕	-	(8.4)	-	長石・石英・礫	灰	普通	体部棒子状の叩き 内面同心円状の当て具痕	覆土中	PL15
TP12	須恵器	甕	-	(19.4)	-	長石・石英	灰黄	普通	体部棒子状の叩き 内面同心円状の当て具痕	覆土中	PL15

番号	器種	径	高さ(長さ)	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP13	土玉	1.8	1.6	0.3	4.6	土(細砂)	一方向からの穿孔 ナデ	覆土中	PL16
DP14	土玉	2.6	2.4	0.5-0.7	15.3	土(細砂)	一方向からの穿孔 ナデ	床面	PL16
DP15	管状土鉢	2.3	8.1	0.6	(37.0)	土(長石・石英)	指痕有 掘った痕跡有	覆土中層	PL16
DP16	管状土鉢	2.3	(7.8)	1.0	(35.0)	土(長石・細砂)	指痕有	覆土中層	PL16
DP17	管状土鉢	2.6	(4.4)	1.0	(28.8)	土(長石・石英)	ナデ 下部欠損	覆土中層	PL16
DP18	管状土鉢	2.5	(4.1)	1.1	(23.4)	土(長石・石英・赤色砂子)	ナデ 下部欠損	覆土下層	PL16

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M6	鉄滓	6.3	7.3	2.7	163.9	鉄	塊状滓	覆土中層	
M7	鉄滓	3.0	3.8	2.4	36.1	鉄	気泡含む 茶褐色	覆土中	

第20号住居跡 (第37・38図)

位置 調査区北部のB4区、標高24.2mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸3.34m、短軸3.10mの方形で、主軸方向はN-43°-Wである。壁高は35～38cmで、ほぼ直立している。

床 ほぼ平坦で、竈前面から中央部にかけて踏み固められている。

竈 北西壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで92cm、燃焼部幅32cmである。袖部は床面と同じ高さを基部として、第9～12層の砂粒を混ぜた黄褐色土を積み上げて構築されている。火床部は浅い皿状で、火床面は赤変している。煙道部は壁外へ三角形に41cmほど掘り込まれ、火床部より緩やかに

立ち上がっている。

覆土層解説

- | | | | |
|-----------|--------------------------|-----------|-----------------------|
| 1 黒 褐 色 | ロームブロック・砂粒少量、焼土ブロック微量 | 8 黒 褐 色 | ロームブロック・焼土ブロック少量、砂粒微量 |
| 2 黒 褐 色 | 焼土ブロック中量、ロームブロック少量、砂粒微量 | 9 にい・黄褐色 | 焼土粒子・砂粒中量、ローム粒子少量 |
| 3 黒 褐 色 | ロームブロック・焼土ブロック・砂粒少量 | 10 灰 黄 褐色 | 砂粒多量、焼土粒子微量 |
| 4 極 暗 褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子・砂粒微量 | 11 褐 色 | ロームブロック中量 |
| 5 灰 褐 色 | ローム粒子・砂粒少量 | 12 にい・黄褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子微量 |
| 6 極 暗 褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量、砂粒微量 | 13 褐 色 | 焼土粒子少量 |
| 7 極 暗 赤褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子・砂粒少量、炭化粒子微量 | | |

ピット P1は深さ8cmで、南東壁際の中央部にあることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

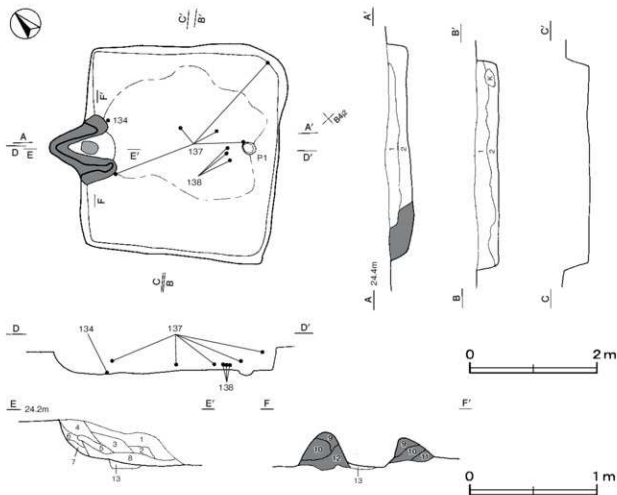
覆土 2層に分層できる。ロームブロックが不規則に含まれた堆積状況を示しており、埋め戻されている。

土層解説

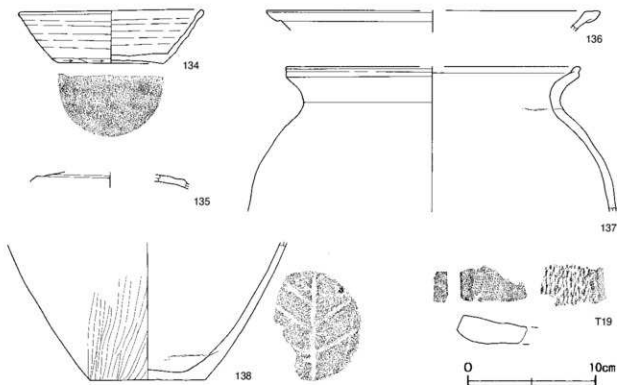
- | | | | |
|---------|-----------|---------|-----------|
| 1 黒 褐 色 | ロームブロック微量 | 2 黒 褐 色 | ロームブロック多量 |
|---------|-----------|---------|-----------|

遺物出土状況 土師器片71点(坏12, 甕59), 須恵器片15点(坏8, 蓋1, 鉢1, 甕5), 瓦片1点(平瓦)粘土塊1点, 礫1点(砂岩)が出土している。また、混入した縄文土器片12点も出土している。134は竈右袖付近, 138は南部の覆土下層からそれぞれ出土している。137は竈左袖付近, 中央部から東コーナーにかけての覆土上層から下層にかけて出土した破片が接合したものである。

所見 時期は、出土土器から8世紀後葉と考えられる。



第37図 第20号住居跡実測図



第38図 第20号住居跡出土遺物実測図

第20号住居跡出土遺物観察表(第38図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
134	須恵器	坏	14.2	4.3	8.2	長石・石英	灰	普通	体部下端手持ちヘラ彫り 底部一方向のヘラ切り	覆土下層	50%
135	須恵器	蓋	-	(1.2)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	ロクロ成形	覆土中	5%
136	須恵器	鉢	[26.2]	(1.6)	-	長石・石英・雲母	編灰	普通	ロクロ成形	庭覆土中	5%
137	土師器	甕	[23.0]	(11.5)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部外面横ナデ	庭土上層 →下層	10%
138	土師器	甕	-	(11.0)	9.0	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい黒	普通	体部外面ヘラ磨き 底部木葉痕	庭覆土下層	10%

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
T19	甲瓦	(3.9)	(5.5)	1.9	(46.3)	長石・赤色粒子	普通	凸面長縄叩き 凹面布目痕	庭土中	横骨痕

第21号住居跡(第39・40図)

位置 調査区北部のB4h1区、標高24.1mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸3.67m、短軸3.48mの方形で、主軸方向はN-31°-Wである。壁高は45～57cmで、ほぼ直立している。

床 ほぼ平坦で、竈前面から中央部にかけて踏み固められている。

竈 北西壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで92cm、燃焼部幅37cmである。袖部は床面と同じ高さを基部として、第16～19層の砂粒を少量混ぜたにぶい黄褐色や暗褐色土で構築されている。火床部は床面と同じ高さの平坦面を使用しており、火床面は赤変硬化している。煙道部は壁外へ半円状に17cmほど掘り込まれ、火床部より外傾して立ち上がっている。

覆土層解説

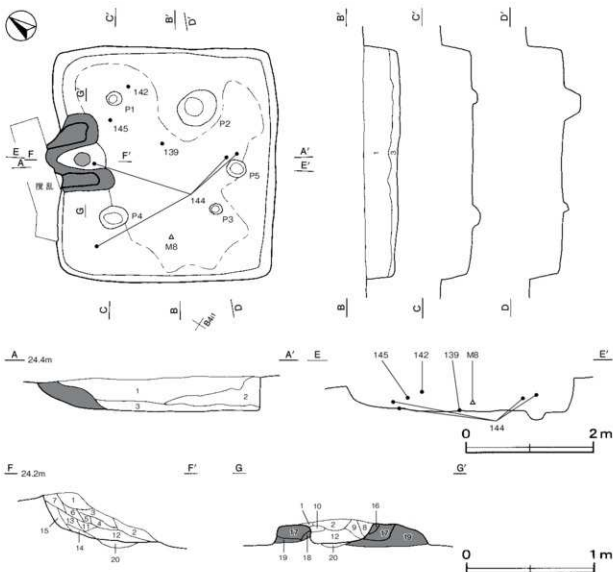
- | | | | |
|---------------|-----------------------------------|---------------|-------------------------------------|
| 1 暗 褐 色 | ローム粒子・砂粒少量 | 11 暗 赤 褐色 | ロームブロック・焼土ブロック中量、粘土ブロック少量、炭化粒子・砂粒微量 |
| 2 暗 褐 色 | ロームブロック・砂粒少量 | 12 暗 赤 褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量 |
| 3 暗 褐 色 | ローム粒子少量、焼土粒子・砂粒微量 | 13 暗 褐 色 | 粘土ブロック・焼土粒子・砂粒微量 |
| 4 暗 暗 赤 褐色 | 焼土ブロック中量、ローム粒子・砂粒少量 | 14 暗 暗 赤 褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量、粘土ブロック・砂粒微量 |
| 5 暗 暗 赤 褐色 | 焼土ブロック中量、粘土ブロック・ローム粒子・砂粒少量 | 15 暗 暗 赤 褐色 | ローム粒子・砂粒少量、焼土ブロック微量 |
| 6 暗 赤 褐色 | 焼土ブロック・粘土ブロック中量、ローム粒子・砂粒少量、炭化粒子微量 | 16 に ぶ い 黄 褐色 | 砂粒少量、炭化粒子微量 |
| 7 暗 褐 色 | ロームブロック・粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子・砂粒微量 | 17 に ぶ い 黄 褐色 | ローム粒子・砂粒少量 |
| 8 に ぶ い 赤 褐色 | 焼土粒子多量、砂粒少量 | 18 褐 色 | 炭化粒子微量 |
| 9 黒 褐 色 | ロームブロック・焼土ブロック・砂粒少量 | 19 暗 褐 色 | ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量 |
| 10 に ぶ い 赤 褐色 | 焼土粒子中量、ローム粒子・砂粒少量 | 20 赤 褐 色 | 焼土粒子多量 |

ピット 5か所。P1～P4は深さ8～27cmで、配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ14cmで、南東壁際の中央部にあることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 3層に分層できる。ローム土・焼土等が不規則に含まれた堆積状況を示しており、埋め戻されている。

土層解説

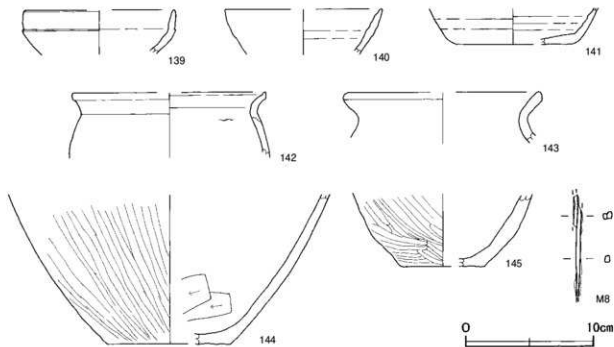
- | | | | |
|---------|------------------------|-------|----------------|
| 1 暗 褐 色 | ロームブロック・焼土ブロック少量 | 3 褐 色 | ローム粒子多量、炭化粒子微量 |
| 2 黒 褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化物微量 | | |



第39図 第21号住居跡実測図

遺物出土状況 土師器片137点(坏9, 甕128), 須恵器片11点(坏9, 蓋1, 甕1), 鉄製品1点(釘), 粘土塊4点が出土している。また, 混入した縄文土器片21点, 陶器片1点と瓦質土器片1点も出土している。139は中央部の床面から出土しており, 144はP4付近の覆土下層, 竈覆土中層, P5付近の覆土中層からそれぞれ出土した破片が接合したものである。142・145はP1付近の覆土中層から, 140・141・143は覆土中から出土している。

所見 時期は, 出土土器から8世紀前葉と考えられる。ピットの掘方が浅いことから, 壁外に上屋を支えるための補助的な柱が立っていた可能性も考えられる。



第40図 第21号住居跡出土遺物実測図

第21号住居跡出土遺物観察表(第40図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
139	土師器	坏	[11.6]	(3.5)	-	長石・石英	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ	床面	10%
140	須恵器	坏	[12.4]	(3.6)	-	長石・石英・雲母	暗灰黄	普通	ロクロ成形	覆土中	5%
141	須恵器	坏	-	(2.9)	[9.2]	長石・石英・雲母	灰	普通	底部一方向のヘラ削り	覆土中	5%
142	土師器	甕	[15.2]	(5.2)	-	長石・石英・雲母 本島砂子	にぶい・褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 輪横痕	覆土中層	5%
143	土師器	甕	[15.0]	(4.0)	-	長石・石英・雲母	にぶい・黄褐	普通	口縁部外・内面横ナデ	覆土中	5%
144	土師器	甕	-	(11.9)	[9.8]	長石・石英・雲母 本島砂子	にぶい・褐	普通	体部外面ヘラ磨き 内面ヘラナデ	覆土中層 ~下層	10%
145	土師器	甕	-	(5.8)	[6.5]	長石・石英・雲母 本島砂子	にぶい・褐	普通	体部外面ヘラ磨き 内面ナデ 底部本葉痕*	覆土中層	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 8	釘	(8.1)	0.4	0.5~0.7	(3.6)	鉄	錆で2本が癒着 断面方形	覆土中層	PL17

第23号住居跡(第41~44図)

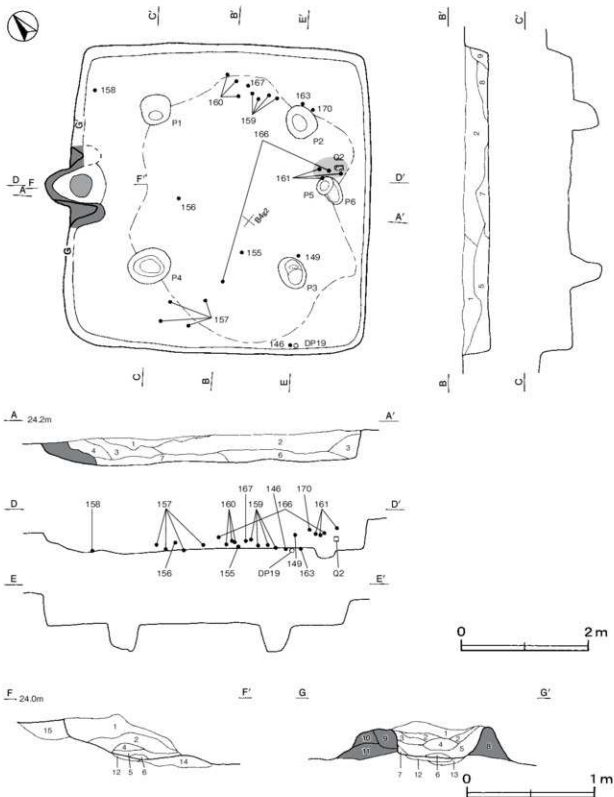
位置 調査区北部のB4丁目区, 標高24.1mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸4.90m, 短軸4.75mの方形で, 主軸方向はN-36°-Wである。壁高は39~52cmで, 外

傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

竈 北西壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで96cm、燃焼部幅58cmである。袖部は



第41図 第23号住居跡実測図

床面より高さ5cmまで地山を掘り残して基部とし、第8～11層の砂粒を混ぜたにぶい黄褐色土を積み上げて構築されている。右袖は壁に近い部分だけ確認でき、左袖の内側は赤変硬化している。火床部は浅い皿状で、火床面は赤変硬化している。煙道部は壁外へ半円状に40cmほど掘り込まれ、火床部より緩やかに傾斜し、外傾して立ち上がっている。第2・3層は天井部の崩落土である。

覆土層解説

1 黒 褐色	ローム粒子・焼土粒子微量	9 にぶい黄褐色	砂粒中量、焼土ブロック少量
2 褐 色	砂粒中量、焼土粒子・炭化粒子少量	10 にぶい黄褐色	ローム粒子・砂粒少量
3 明赤褐色	焼土ブロック多量	11 褐 色	ローム粒子少量
4 にぶい黄褐色	焼土粒子少量、炭化粒子・砂粒微量	12 赤 褐色	焼土粒子多量
5 暗 褐色	焼土ブロック中量	13 褐 色	焼土粒子少量
6 暗 褐色	焼土粒子多量、炭化粒子少量	14 暗 褐色	ロームブロック中量
7 褐 色	焼土粒子中量	15 黒 褐色	ローム粒子少量
8 にぶい黄褐色	砂粒多量		

ピット 6か所。P1～P4は深さ40～50cmで、規模と配置から支柱穴と考えられる。P5は深さ14cmで、南東壁際の中央部にあることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6は深さ7cmで、P5の補助的な柱穴の可能性がある。

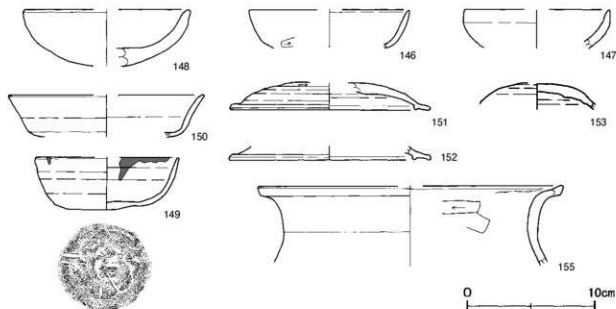
覆土 9層に分層できる。ブロック状に不規則な堆積状況を示しており、埋め戻されている。

土層解説

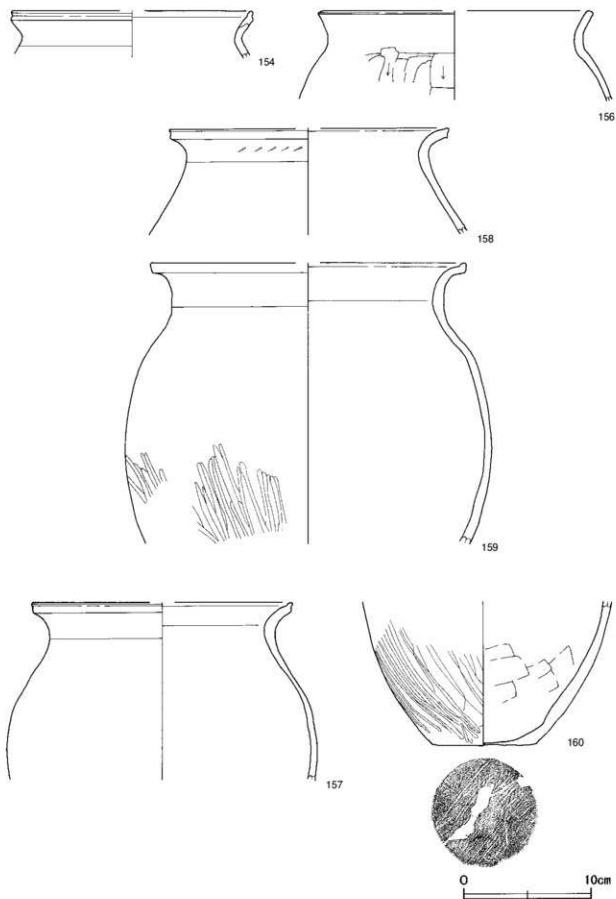
1 黒 褐色	焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量	5 黒 褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
2 黒 褐色	ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化物微量	6 暗 褐色	ローム粒子少量
3 黒 褐色	ロームブロック少量	7 黒 褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
4 暗 褐色	ロームブロック・焼土ブロック・砂質粘土ブロック少量	8 暗 褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量
		9 暗 褐色	ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片482点(坏58, 甕415, 瓶1, 手捏土器8), 須恵器片32点(坏14, 高台付坏1, 蓋4, 壺1, 甕12), 土製品1点(土玉), 石器1点(砥石), 鉄製品1点(釘), 粘土塊3点, 礫2点(砂岩)が出土している。また、混入した縄文土器片5点も出土している。163はP2付近, 146・DP19は南部コーナー付近, 158は北部コーナーの床面からそれぞれ出土している。155は中央部の覆土下層から出土し, 157は南西部, 159は北東部の覆土中層から下層で出土した破片がそれぞれ接合したものである。Q2はP5付近で焼土とともに確認され, 直立した状態で出土している。

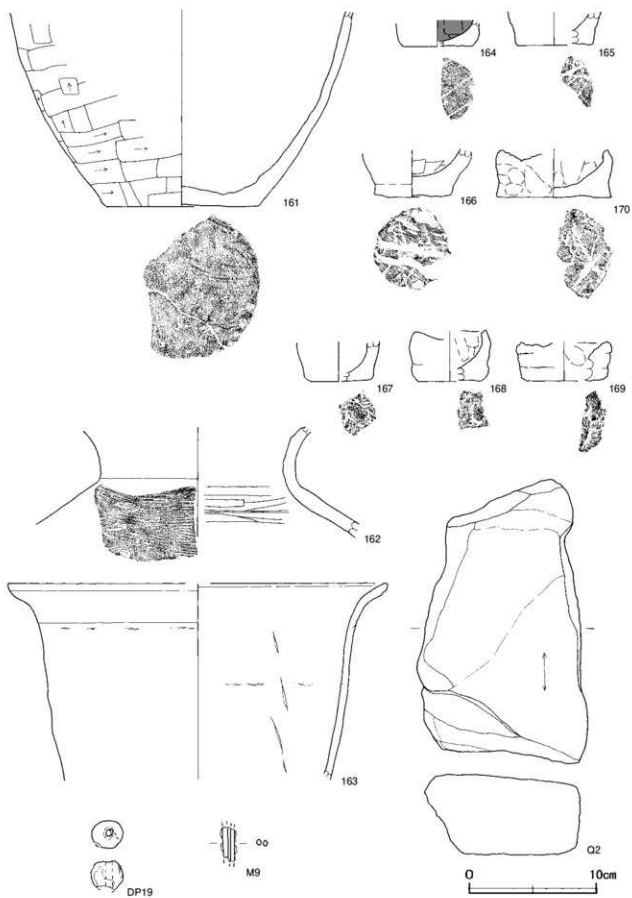
所見 時期は, 出土土器から8世紀前葉と考えられる。



第42図 第23号住居跡出土遺物実測図(1)



第43图 第23号住居跡出土遺物実測図(2)



第44图 第23号住居跡出土遺物実測図(3)

第23号住居跡出土遺物観察表(第42～44図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
146	土師器	坏	[12.6]	(3.0)	-	長石・石英・赤色 粘土	にぶい黄褐色	普通	体部下端手持ちヘナゲり	床面	5%
147	土師器	坏	[11.2]	(3.0)	-	長石・石英	橙	普通	口縁部外・内面横ナゲ	覆土中	5%
148	土師器	坏	[12.8]	(4.5)	-	長石・石英	明赤褐色	普通	口縁部外・内面横ナゲ	覆土中	10%
149	須恵器	坏	[11.2]	4.2	6.0	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部縁部付奇 底部回転ヘナゲり切ナゲ 磨削有り	覆土中層	50% PL12
150	須恵器	坏	[15.2]	(3.3)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口クロ成形	覆土中	20%
151	須恵器	蓋	[15.6]	(2.1)	-	長石・石英・雲母	灰黄	普通	天井部回転ヘナゲり	覆土中	40%
152	須恵器	蓋	[16.0]	(1.1)	-	長石・石英・雲母・ 赤色粘土	灰オリーブ	普通	口クロ成形	覆土中	5%
153	須恵器	蓋	-	(2.0)	-	長石・石英	灰	普通	内面ヘナゲり つまみ割痕	覆土中	10%
154	土師器	甕	[18.8]	(3.7)	-	長石・石英・雲母	にぶい赤褐色	普通	口縁部外面横ナゲ 輪横痕	覆土中	5%
155	土師器	甕	[24.0]	(6.3)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部外面横ナゲ 内面ヘラナゲ 輪横痕	覆土下層	5%
156	土師器	甕	[20.8]	(7.1)	-	長石・石英・赤色 粘土	橙	普通	口縁部外面横ナゲ 体部外面縦方向のヘナゲり	覆土中層	5%
157	土師器	甕	[20.4]	(14.1)	-	長石・石英	にぶい赤褐色	普通	口縁部外・内面横ナゲ	覆土中層 下層	10%
158	土師器	甕	[22.0]	(8.4)	-	長石・石英・雲母 赤色粘土	にぶい赤褐色	普通	口縁部外面ヘラナゲ後横ナゲ 内面ナゲ	床面	5%
159	土師器	甕	[25.0]	(22.3)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	口縁部外・内面横ナゲ 体部外面ヘラナゲ後磨き	覆土中層 下層	20%
160	土師器	甕	-	(11.4)	8.0	長石・石英・赤色 粘土	橙	普通	体部外面ヘナゲり 内面扉部不明磨きヘナゲり 底部方向のヘナゲり	覆土中層 下層	30%
161	土師器	甕	-	(15.4)	12.0	長石・石英・雲母・ 赤色粘土	明赤褐色	普通	体部外面ヘナゲり	覆土上層 中層	20%
162	須恵器	甕	-	(8.8)	-	長石・石英	灰	普通	体部横位の平行印き 内面ヘラナゲ	覆土中	5%
163	土師器	瓶	[30.0]	(15.5)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	口縁部外面横ナゲ 体部内面ヘラナゲ後ナゲ 輪横痕	床面	10%
164	土師器	手捏土器	-	(2.1)	[5.4]	長石・石英	にぶい黄褐色	普通	内面ヘラナゲ 底部木葉痕	覆土中	10%
165	土師器	手捏土器	-	(2.6)	[5.8]	長石・石英	橙	普通	内面ナゲ 底部木葉痕	覆土中	20%
166	土師器	手捏土器	-	(3.8)	6.0	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	内面ヘラナゲ 底部木葉痕	覆土中層 下層	50%
167	土師器	手捏土器	-	(3.1)	[5.0]	長石・石英	にぶい橙	普通	外・内面ナゲ 底部木葉痕	覆土中層	20%
168	土師器	手捏土器	[5.5]	4.0	[5.0]	長石・石英	黒褐色	普通	内面指痕痕 輪横痕	覆土中	30%
169	土師器	手捏土器	[6.6]	3.0	[6.0]	長石・石英	黒褐色	普通	内面指痕痕 輪横痕	覆土中	20%
170	土師器	手捏土器	[8.4]	3.8	[8.8]	長石・石英	黒褐色	普通	外・内面指痕痕 底部木葉痕	覆土上層	30%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP19	土玉	2.5	(2.3)	0.5	(10.2)	土(細砂)	一方向からの穿孔 ナゲ 外面磨羅有	床面	PL16

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 2	砥石	22.5	13.6	6.4	3090	泥岩	砥面1か所	覆土中層	PL17
M 9	釘	(2.7)	0.4	0.3	(3.52)	鉄	断面方形 2本が癒着	覆土中	PL17

第27号住居跡(第45・46図)

位置 調査区北部のB44区、標高24.3mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 南部が調査区域外に延びているため、北東・南西軸は5.20mで、北西・南東軸は3.10mしか確認できなかった。平面形は方形もしくは長方形と推定され、主軸方向はN-54°-Wである。壁高は33～42cmで、ほぼ直立している。

床 ほぼ平坦で、竈前面が踏み固められている。中央部は地山のローム面を平坦に掘り込んで床面としている。南西部は貼床で、床面の高さから15～20cm掘り込んでロームブロックや砂質粘土を埋土として構築されており、わずかに高くなっている。

竈 北西壁の北部コーナー寄りに付設されている。規模は火床部から煙道部まで94cm、燃焼部幅49cmである。袖部は床面と同じ高さを基部として、第8～10層の砂粒を少量混ぜたにぶい黄褐色土を積み上げて構築され

ている。火床部は床面と同じ高さであり、火床面は赤変している。煙道部は壁外へ半円形状に63cmほど掘り込まれ、火床部より緩やかに立ち上がっている。第2・3層は天井部の崩落土である。

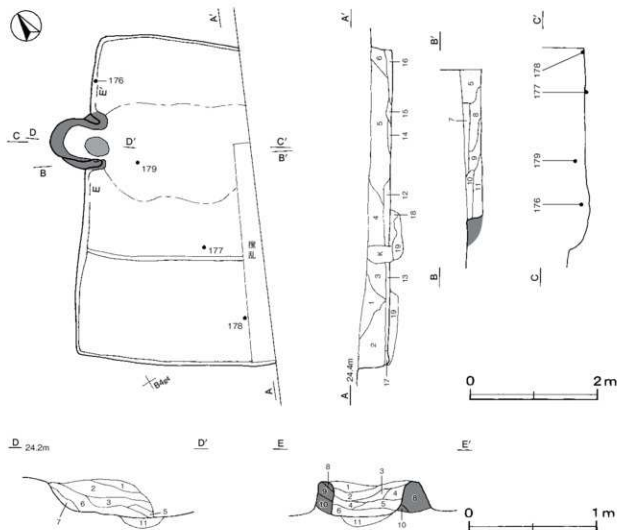
壁土層解説

- | | |
|--|--|
| 1 暗褐色 粘土ブロック・ローム粒子・焼土粒子・砂粒少量 | 6 暗赤褐色 焼土粒子中量、炭化粒子・砂粒少量、粘土ブロック・ローム粒子微量 |
| 2 暗褐色 粘土ブロック・砂粒中量、焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量 | 7 暗褐色 ローム粒子中量 |
| 3 暗赤褐色 焼土ブロック多量、粘土ブロック中量、炭化粒子・砂粒少量、ローム粒子微量 | 8 にいり黄褐色 砂粒多量 |
| 4 暗赤褐色 焼土ブロック多量、粘土ブロック・砂粒中量、炭化粒子少量 | 9 にいり黄褐色 焼土粒子多量 |
| 5 極暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子少量、粘土ブロック・ローム粒子・砂粒微量 | 10 褐色 砂粒中量、焼土粒子少量 |
| | 11 にいり赤褐色 焼土ブロック多量 |

覆土 17層に分層できる。ブロック状に不規則な堆積状況を示しており、埋め戻されている。第18・19層は貼床の埋土層である。

土層解説

- | | |
|--------------------------|------------------------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック少量 | 8 褐色 ロームブロック多量、焼土ブロック・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 ローム粒子中量 | 9 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量 |
| 3 暗褐色 ロームブロック中量 | 10 灰黄褐色 砂質粘土中量、ロームブロック少量 |
| 4 暗褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック微量 | 11 暗褐色 ローム粒子中量、砂質粘土粒子少量 |
| 5 褐色 ロームブロック少量 | 12 暗褐色 焼土粒子中量、ローム粒子少量 |
| 6 褐色 ローム粒子少量 | 13 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量 |
| 7 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック微量 | 14 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量 |



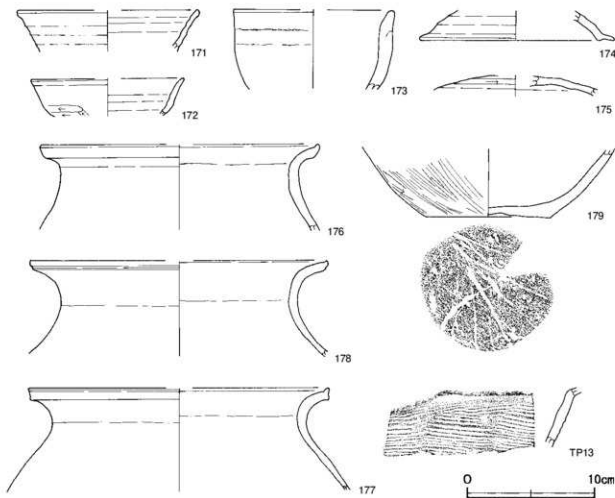
第45図 第27号住居跡実測図

- 15 暗赤褐色 焼土粒子多量、ロームブロック少量
 16 褐色 ロームブロック多量
 17 暗褐色 ローム粒子少量

- 18 暗褐色 ローム粒子少量、砂質粘土粒子微量
 19 褐色 ロームブロック中量、砂質粘土粒子少量

遺物出土状況 土師器片 169点（坏159、碗1、甕9）、須恵器片 20点（坏4、蓋4、瓶2、甕10）、粘土塊 6点、磔 5点（砂岩）が出土している。176は北西壁際、177は中央部、178は南西部の床面、179は竈前面の覆土中層からそれぞれ出土している。171は竈内覆土中から、172は南西部、174は北東部の覆土中からそれぞれ出土している。

所見 時期は、遺構の形態と出土土器から8世紀前葉と考えられる。本跡は、竈の位置や南西部の床面のわずかな高まり、覆土の状況から南西部を拡張していると考えられる。



第46図 第27号住居跡出土遺物実測図

第27号住居跡出土遺物観察表（第46図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
171	須恵器	坏	[14.0]	(3.3)	-	長石・石英	灰オリーブ	普通	ロクロ成形	竈覆土中	5%
172	須恵器	坏	[12.0]	(2.9)	-	長石・石英	灰白	普通	体部下端手持ちヘラ削り	覆土中	5%
173	土師器	碗	[12.6]	(6.2)	-	長石・石英・赤土 赤土粒子	明赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 輪痕直	覆土中	10%
174	須恵器	蓋	[15.2]	(2.3)	-	長石・石英・雲母・ 赤土粒子	黄灰	普通	ロクロ成形	覆土中	5%
175	須恵器	蓋	-	(1.6)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	天井部回転ヘラ削り	覆土中	10%
176	土師器	甕	[21.8]	(6.8)	-	長石・石英・雲母・ 赤土粒子	にがい青緑	普通	口縁部外・内面横ナデ	床面	5%
177	土師器	甕	[23.6]	(8.2)	-	長石・石英・雲母	にがい青	普通	口縁部外・内面横ナデ	床面	5%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
178	土師器	甕	[23.4]	(7.6)	-	長石・石美	明赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ	床面	5%
179	土師器	甕	-	(5.5)	9.8	長石・石美・雲母赤色粒子	橙	普通	体部外面へう削り後へう磨き 底部木炭灰	覆土中層	10%
TP13	須恵器	甕	-	(4.7)	-	長石・石美・雲母	灰白	普通	体部横位の平行印き	甕覆土中	PL15

第30号住居跡（第47～49図）

位置 調査区北部のA47区、標高24.0mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸5.10m、短軸4.86mの方形で、主軸方向はN-28°-Wである。壁高は36～56cmで、ほぼ直立している。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。壁溝が西壁から南壁の壁下を巡っており、断面形はU字状である。

竈 北壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで116cm、燃焼部幅73cmである。袖部は床面と同じ高さを基部として、第14・15層のにおい黄褐色土で構築されている。火床部は床面と同じ高さの平坦な面を使用しており、火床面は赤変硬化している。煙道部は壁外へ半円状に27cmほど掘り込まれ、火床部より外傾して立ち上がっている。

甕土層解説

1 灰褐色	砂質粘土粒子多量、焼土ブロック微量	8 暗赤褐色	焼土ブロック少量、ローム粒子微量
2 におい青褐色	砂質粘土粒子少量	9 褐色	砂質粘土粒子少量
3 灰褐色	砂質粘土粒子多量、焼土ブロック少量	10 暗褐色	焼土ブロック中量、炭化粒子少量
4 灰褐色	砂質粘土粒子多量、焼土ブロック少量、ローム粒子微量	11 黒褐色	焼土粒子・砂質粘土粒子中量
5 灰褐色	砂質粘土粒子中量、焼土ブロック・ローム粒子微量	12 におい赤褐色	焼土ブロック多量
6 褐色	焼土粒子・砂質粘土粒子少量	13 暗赤褐色	焼土ブロック多量、炭化粒子少量
7 暗赤褐色	焼土粒子中量	14 におい青褐色	焼土粒子少量
		15 におい青褐色	焼土ブロック微量

ピット 5か所。P1～P4は深さ23～55cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ24cmで、南東壁際の中央部にあることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

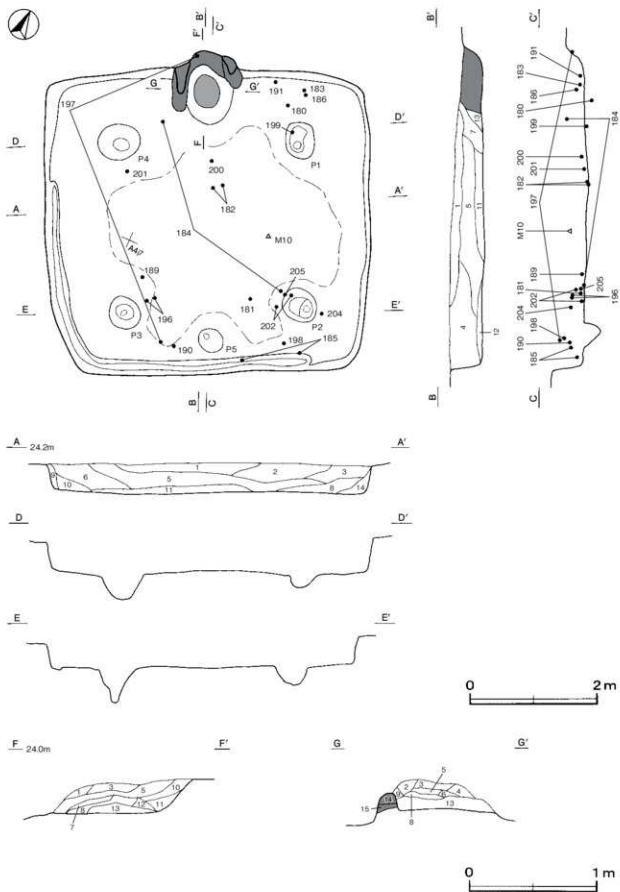
覆土 14層に分層できる。ブロック状に不規則な堆積状況を示しており、埋め戻されている。

土層解説

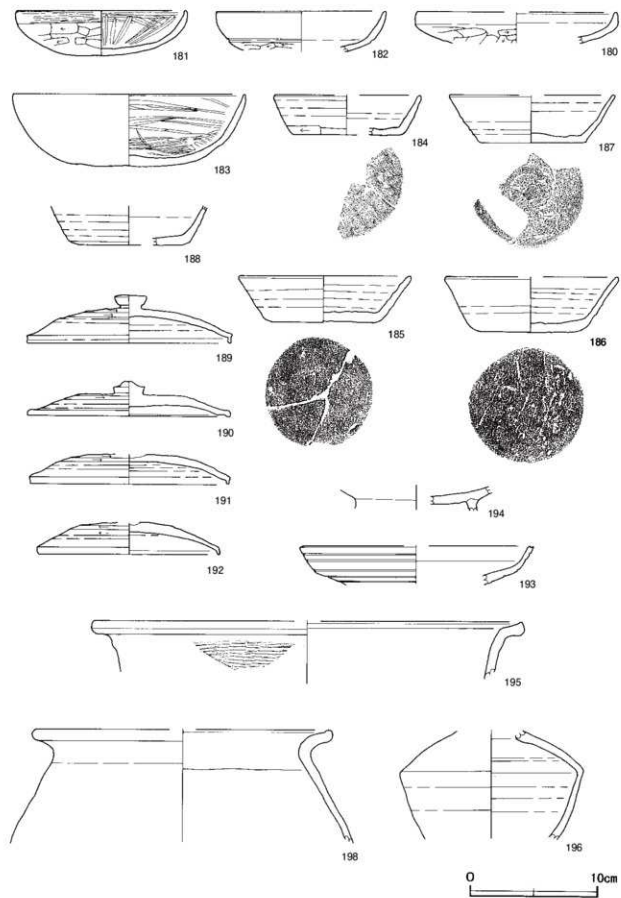
1 暗褐色	ロームブロック少量	8 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量
2 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	9 暗褐色	焼土ブロック中量、ロームブロック少量
3 暗褐色	焼土ブロック中量、ロームブロック少量、炭化粒子微量	10 暗褐色	ローム粒子多量
4 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック微量	11 暗褐色	炭化粒子少量、ローム粒子微量
5 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック微量	12 褐色	ローム粒子中量
6 暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量	13 褐色	焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化物微量
7 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量、砂質粘土粒子微量	14 暗褐色	ローム粒子多量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片545点（坏47、椀3、甕492、甌2、手捏土器1）、須恵器片103点（坏83、蓋5、盤2、鉢2、瓶1、甕10）、鉄製品1点（鋸）、粘土塊21点、石器1点（剥片）、礫1点（砂岩）が出土している。また、混入した縄文土器片6点も出土している。180は北コーナー部、182は中央部の床面から出土している。183・186・191・199は北コーナー部、200は中央部、181・205はP2付近の覆土下層からそれぞれ出土している。189はP3付近の覆土下層、190は南壁際の覆土中層からそれぞれ正位で出土している。196はP3付近の覆土中層、184はP2付近の床面と竈前面の覆土中層から出土した破片がそれぞれ接合したものである。

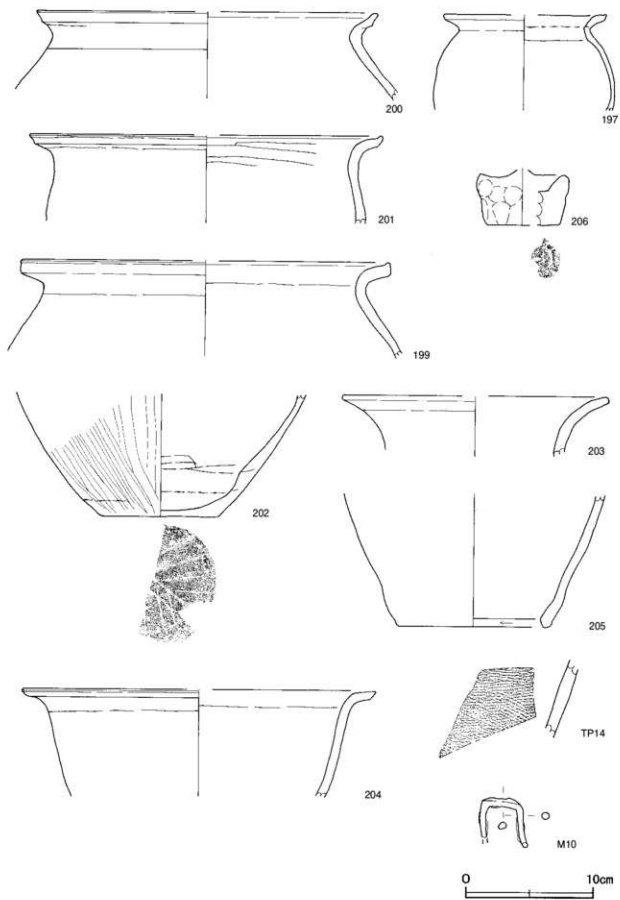
所見 時期は、出土土器から8世紀中葉と考えられる。



第47图 第30号住居跡実測图



第48图 第30号住居跡出土遺物実測図(1)



第49图 第30号住居跡出土遺物実測図(2)

第30号住居跡出土遺物観察表 (第48・49図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
180	土師器	坏	[15.6]	(2.4)	-	長石・石英・雲母・赤色鉄子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 底部ヘラ削り	床面	10%
181	土師器	坏	13.1	3.6	-	長石・石英	橙	普通	口縁部へラ磨き 内面放射状のヘラ磨き 底部内面へラ削り	覆土下層	80% PL11
182	土師器	坏	13.4	(3.2)	-	長石・石英	赤	普通	口縁部外・内面横ナデ 底部下端へラ削り	床面	40% PL11
183	土師器	坏	18.0	5.8	-	長石・石英・雲母・赤色鉄子	にぶい・橙	普通	内面へラ磨き 底部多方向のヘラ削り	覆土下層	90% PL11
184	須恵器	坏	[11.4]	3.2	[8.8]	長石・石英・雲母	黄灰	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部一方向のヘラ削り残ナデ	覆土中層 →中層	20%
185	須恵器	坏	13.3	3.8	8.4	長石・石英	黄灰	普通	底部一方向のヘラ削り	覆土中層 →下層	90% PL12
186	須恵器	坏	[13.4]	4.4	8.7	長石・石英・雲母	灰白	普通	底部多方向のヘラ削り	覆土下層	70% PL12
187	須恵器	坏	[12.8]	3.8	8.4	長石・石英・雲母	灰黄	普通	底部回転ヘラ切り後多方向のヘラ削り	覆土中	40%
188	須恵器	坏	-	(3.1)	[8.6]	長石・石英	黄灰	普通	体部下端回転ヘラ削り	覆土中	10%
189	須恵器	蓋	15.8	3.8	-	長石・石英・赤色鉄子	灰	普通	天井部回転ヘラ削り 内面に火傷	覆土下層	100% PL13
190	須恵器	蓋	15.8	2.8	-	長石・石英・雲母	灰白	普通	天井部回転ヘラ削り	覆土中層	80% PL13
191	須恵器	蓋	[15.7]	(2.3)	-	長石・石英	灰	普通	天井部回転ヘラ削り つまみ欠損	覆土下層	70%
192	須恵器	蓋	[14.2]	(2.6)	-	長石・石英	暗灰	普通	天井部回転ヘラ削り 内面端部に自然軸	覆土中	30%
193	須恵器	蓋	[17.8]	(3.0)	-	長石・石英	黄灰	普通	体部外面棒状工具による沈痾	覆土中	5%
194	須恵器	盤	-	(2.0)	-	長石・石英・雲母	褐灰	普通	ロクロ成形	覆土中	10%
195	須恵器	鉢	[33.8]	(4.4)	-	長石・石英・雲母	黄灰	普通	体部外面横位の平行叩き	覆土中	5%
196	須恵器	瓶	-	(8.7)	-	長石・石英	灰	普通	ロクロ成形 自然軸	覆土上層 30% 蓋位並 PL13	20%
197	土師器	甕	[12.6]	(7.6)	-	長石・石英・雲母・小塵	にぶい・褐	普通	口縁部外面横ナデ・内面半空不明瞭なヘラナデ 輪修整	覆土上層 →中層	10%
198	土師器	甕	[23.0]	(8.9)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ	覆土上層	20%
199	土師器	甕	[28.8]	(7.6)	-	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ	覆土下層	5%
200	土師器	甕	[26.6]	(6.8)	-	長石・石英・雲母・赤色鉄子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 輪修整	覆土下層	5%
201	土師器	甕	[27.6]	(6.9)	-	長石・石英	暗灰	普通	口縁部外面横ナデ・内面ヘラナデ	覆土下層	5%
202	土師器	甕	-	(9.8)	9.0	長石・石英	灰黄褐	普通	体部内面へラ磨き 内面ヘラナデ 輪修整 底部本変形	覆土下層	20%
203	須恵器	甕	[20.6]	(4.7)	-	長石・石英・雲母	灰白	普通	ロクロ成形	覆土中	5%
204	土師器	瓶	[27.7]	(8.5)	-	長石・石英・雲母	にぶい・褐	普通	口縁部外・内面横ナデ	覆土中層	5%
205	土師器	瓶	-	(10.6)	[11.8]	長石・石英・雲母・赤色鉄子	褐	普通	穿孔部ヘラ削り	覆土下層	5%
206	土師器	子粒土器	[6.6]	4.5	[5.8]	長石・石英・赤色鉄子	明赤褐	普通	外面指頭圧痕	覆土中	50%
TP14	須恵器	甕	-	(6.1)	-	長石・石英	灰	良好	体部横位・斜位の平行叩き	覆土中	PL15

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M10	瓦	4.0	3.9	0.6	(7.00)	鉄	コの字形	覆土中層	PL17

第31号住居跡 (第50～52図)

位置 調査区北部のA4h8区、標高24.2mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第33号住居跡を掘り込み、第1号火葬墓に掘り込まれている。

規模と形状 南東部が調査区域外に延びており、北東・南西軸は3.90m、北西・南東軸は3.00mしか確認できなかった。平面形は方形もしくは長方形と推定され、主軸方向はN-25°-Wである。壁高は40cmで、外傾して立ち上がっている。

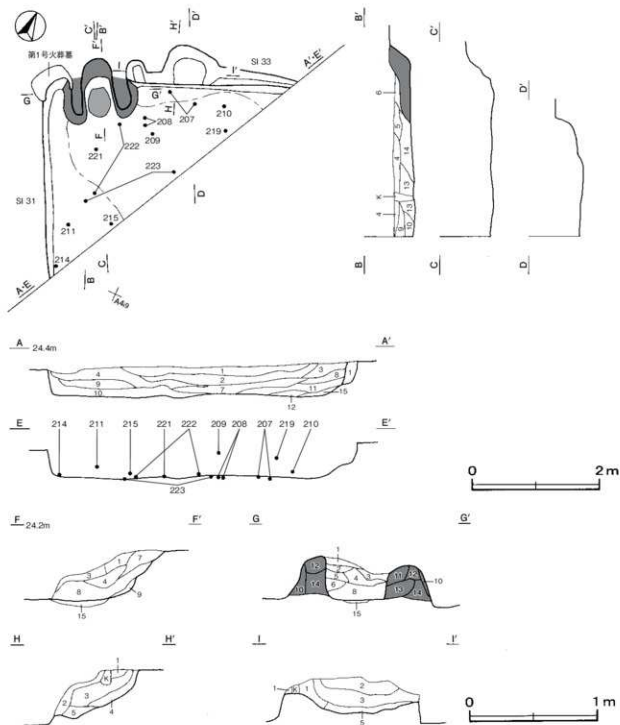
床 はほぼ平坦で、竈前面から中央部にかけて踏み固められている。

竈 北壁の西コーナー寄りに付設されている。規模は火床部から煙道部まで93cm、燃焼部幅43cmである。袖部は床面と同じ高さを基部として、第10～14層の砂粒を混ぜたにぶい黄褐色土で構築されている。火床部は床面よりわずかにくぼんでおり、火床面は亦変硬化している。煙道部は壁外へ半円状に23cmほど掘り込ま

れ、火床部より緩やかに傾斜して立ち上がっている。

燻土層解説

- | | | | |
|----------|--------------------------|-----------|---------------|
| 1 褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 | 8 濃い赤褐色 | 焼土粒子中量 |
| 2 にぶい褐色 | 砂質粘土粒子多量 | 9 濃い赤褐色 | 焼土粒子中量、炭化粒子少量 |
| 3 褐色 | 焼土ブロック少量、砂質粘土粒子微量 | 10 にぶい褐色 | 焼土粒子少量 |
| 4 にぶい赤褐色 | 焼土ブロック少量 | 11 にぶい褐色 | 砂粒中量、焼土粒子少量 |
| 5 にぶい赤褐色 | 焼土ブロック多量、砂質粘土粒子少量、炭化粒子微量 | 12 にぶい黄褐色 | 砂粒多量、焼土粒子少量 |
| 6 暗褐色 | 焼土粒子少量、炭化粒子微量 | 13 暗褐色 | 焼土ブロック多量 |
| 7 褐色 | 焼土粒子中量、炭化粒子微量 | 14 暗褐色 | 砂粒多量 |
| | | 15 褐色 | 焼土粒子多量 |



第50図 第31・33号住居跡実測図

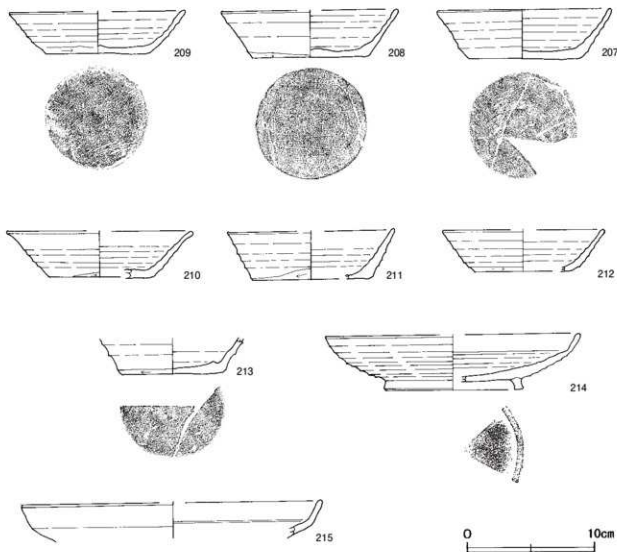
覆土 15層に分層できる。ロームブロック・焼土等が不規則に含まれ、ブロック状の堆積状況を示しており、埋め戻されている。

土層解説

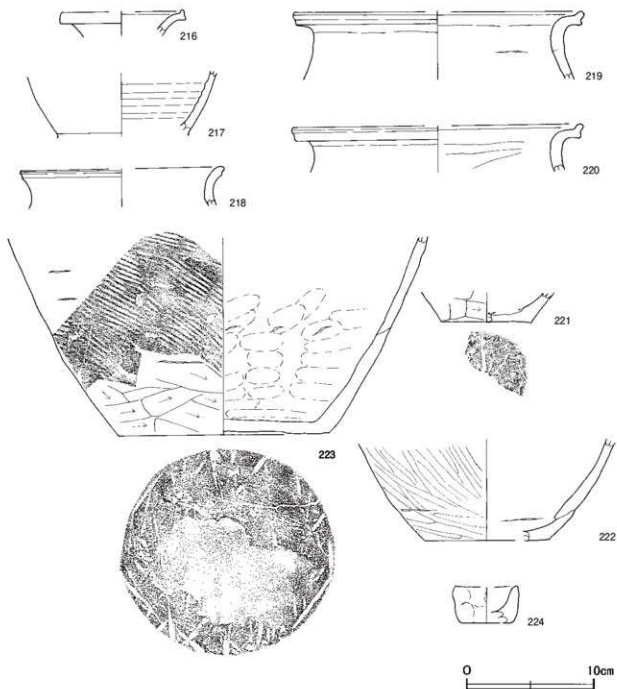
1 黒 褐 色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	9 暗 褐 色	ローム粒子中量、炭化粒子少量
2 暗 褐 色	ロームブロック・焼土ブロック少量	10 暗 褐 色	ローム粒子中量、焼土ブロック微量
3 暗 褐 色	ロームブロック・炭化粒子少量	11 褐 色	ローム粒子・炭化粒子少量
4 褐 色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	12 褐 色	ローム粒子中量、炭化粒子少量
5 黒 褐 色	ロームブロック・炭化粒子少量	13 暗 褐 色	ロームアブロック・炭化粒子少量
6 暗 褐 色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	14 暗 褐 色	ロームブロック・炭化粒子中量、焼土ブロック少量
7 暗 褐 色	ローム粒子中量、炭化粒子微量	15 褐 色	ローム粒子中量、炭化粒子少量、焼土粒子微量
8 暗 褐 色	ローム粒子・炭化粒子少量		

遺物出土状況 土師器片478点（坏2、碗3、甕472、手捏土器1）、須恵器片87点（坏41、盤2、高盤1、鉢1、瓶1、甕41）、灰釉陶器片2点（瓶）、粘土塊26点、礫1点（砂岩）が出土している。また、混入した縄文土器片37点も出土している。207は北部壁際、208は竈右袖付近、222は竈前面、223は西部と中央部の床面からそれぞれ出土している。214・215は西部、221は竈前面、210は北部の覆土下層から、217は北部の覆土中からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から8世紀後葉と考えられる。本跡は第33号住居跡とほぼ同じ位置に作られていた。



第51図 第31号住居跡出土遺物実測図(1)



第52図 第31号住居跡出土遺物実測図(2)

第31号住居跡出土遺物観察表(第51・52図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
207	須恵器	坏	13.4	4.0	8.4	長石・石英・雲母	黄灰	普通	底部多方向のヘラ削り	床面	80% PL12
208	須恵器	坏	[13.8]	3.8	8.8	長石・石英	灰	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部多方向のヘラ削り	床面	70% PL12
209	須恵器	坏	[13.7]	3.4	8.0	長石・石英・雲母・黒色粒子	褐灰	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り後多方向のヘラ削り 内面に土層	覆土上層	50%
210	須恵器	坏	[14.4]	3.7	[8.0]	長石・石英・黒色粒子	褐灰	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部一方のヘラ削り内面に土層	覆土下層	10%
211	須恵器	坏	[13.0]	3.9	[9.0]	長石・石英・黒色粒子	灰	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部一方のヘラ削り	覆土中層	10%
212	須恵器	坏	[12.6]	3.3	[7.6]	長石・石英	黄灰	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部一方のヘラ削り	覆土中	10%
213	須恵器	坏	-	(2.9)	7.8	長石・石英・雲母	灰白	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部多方向のヘラ削り	覆土中	20%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
214	須恵器	壺	[20.0]	4.4	[10.6]	長石・石英・雲母 赤色粒子	灰オリーブ	普通	高台貼り付け後ロクロナデ	覆土下層	20%
215	須恵器	壺	[23.6]	(2.9)	-	長石・石英・雲母	灰白	普通	ロクロ成形	覆土下層	5%
216	灰釉陶器	瓶	[9.4]	(2.0)	-	長石・石英	灰オリーブ	普通	ロクロ成形	覆土中	5%
217	灰釉陶器	瓶	-	(5.0)	-	長石・石英	暗灰黄	良好	ロクロ成形	覆土中	5%
218	土師器	甕	[15.8]	(3.1)	-	長石・石英・雲母 赤色粒子	にぶい褐色	普通	口縁部外面横ナデ	覆覆土中	5%
219	土師器	甕	[22.6]	(5.3)	-	長石・石英・雲母 赤色粒子	にぶい褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ	覆土中層	5%
220	土師器	甕	[22.6]	(3.7)	-	長石・石英・雲母	にぶい赤褐色	普通	口縁部外面横ナデ 内面ヘラナデ	覆土中	5%
221	土師器	甕	-	(2.4)	[7.0]	長石・石英	にぶい赤褐色	普通	体部下端ヘラ削り 底部木葉痕	覆土下層	5%
222	土師器	甕	-	(8.0)	[9.6]	長石・石英・雲母	明赤褐色	普通	体部下端ヘラ削り 輪轆痕 底部木葉痕	床面	5%
223	須恵器	甕	-	(15.6)	16.6	長石・石英・雲母 赤色粒子	灰白	普通	体部下端ヘラ削り 肩位の平行明き 内面筋面部分 輪轆痕	床面	30%
224	土師器	平底土師	[5.0]	2.9	[4.0]	長石・石英	明赤褐色	普通	外面筋面任儀 内面ナデ	覆土中	20%

第 33 号住居跡 (第 50・53 図)

位置 調査区北部の A 4h8 区、標高 24.2 m の台地平坦部に位置している。

重複関係 第 31 号住居に掘り込まれている。

規模と形状 南東部が調査区域外に延びていることと重複していることから、東西軸 2.70 m、南北軸 0.30 m しか確認できなかった。平面形は方形もしくは長方形と推定され、主軸方向は N-25°-W である。壁高は 36cm で、外傾して立ち上がっている。

床 ほとんどが掘り込まれているため不明である。

竈 北壁に付設されている。壁外へ三角形に 35cm 掘り込んでいることが確認でき、右袖部側に砂質粘土を貼り付けた跡が認められた。火床部は確認できなかった。

電土層解説

- | | | | |
|---------|------------------------|----------|------------------|
| 1 にぶい褐色 | 砂質粘土粒子中量、焼土ブロック・炭化粒子微量 | 4 にぶい赤褐色 | 焼土粒子少量、炭化粒子微量 |
| 2 褐色 | 焼土ブロック・砂質粘土粒子少量、炭化粒子微量 | 5 にぶい赤褐色 | 焼土粒子多量、ロームブロック少量 |
| 3 暗赤褐色 | 焼土粒子多量、炭化粒子微量 | | |

覆土 1 層だけ確認できた。堆積状況は不明である。

土層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量

遺物出土状況 土師器片 9 点 (甕), 須恵器片 3 点 (坏 2, 高台付坏 1) が出土している。また、混入した縄文土器片 1 点も出土している。225 ~ 227 は覆覆土中からそれぞれ出土している。

所見 時期は、重複関係及び遺構の形態、出土土器から 8 世紀中葉と考えられる。



第 53 図 第 33 号住居跡出土遺物実測図

第33号住居跡出土遺物観察表(第53図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
225	須臾器	高台付杯	-	(2.5)	[7.6]	長石・石英	にぶい黄褐色	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	覆土中	5%
226	土師器	甕	[15.0]	(6.6)	-	長石・石英・雲母	明赤褐色	普通	頸部内面ヘラナデ	覆土中	5%
227	土師器	甕	-	(1.6)	[7.0]	長石・石英・雲母	明赤褐色	普通	体部下端ヘラ削り	覆土中	5%

表3 奈良時代竪穴住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設			覆土	主な出土遺物	時期	備考 新旧関係(旧→新)		
								土間	土間	土間						
1	C 3j	N-53°-W	[方形]	4.24 × (3.65)	6-45	平坦	-	4	1	2	1	-	自然	土師器、須臾器、土製品、瓦	8世紀後半	SK8 → 本跡 → SI13
2	C 3jl	N-52°-W	[方形]	5.00 × (4.46)	22-47	平坦	半周	4	1	-	1	-	自然	土師器、須臾器、土製品、鉄製品、瓦	8世紀後半	SI4 → 本跡
3	C 2j9	N-58°-E	長方形	3.96 × 3.25	15-35	平坦	-	4	1	-	1	-	人為	土師器、須臾器、土製品、瓦	8世紀前半	SI4・15 → 本跡
4	C 2j0	N-90°-E	方形	4.75 × 4.25	2-50	平坦	半周	4	1	-	2	-	自然	土師器、土製品	8世紀代	本跡 → SI2・3・15
6	D 3a1	N-50°-W	[方形] [長方形]	9.00 × (4.75)	37	平坦	-	-	3	-	-	-	自然	土師器、須臾器、土製品	8世紀中葉	本跡 → SI5
7	D 2b9	N-31°-E	長方形	4.96 × 4.29	5-24	平坦	-	4	1	-	1	-	自然	土師器、須臾器、土製品、鉄製品、瓦	8世紀前半	本跡 → SK7
11	F 1b8	N-17°-E	[方形] [長方形]	(3.30) × (2.62)	25	平坦	-	-	1	3	1	1	人為	土師器、須臾器、瓦	8世紀初頭	
14	C 4a1	N-16°-W	[方形] [長方形]	(3.40) × (2.90)	35-50	平坦	-	1	-	-	1	-	自然	土師器、須臾器、土製品	8世紀前半	本跡 → SD1
15	C 2j9	N-63°-W	[方形]	3.95 × (3.71)	8-30	平坦	-	4	1	1	1	-	自然	土師器	8世紀前半	SI4 → 本跡 → SI3
16	C 3c8	N-50°-E	長方形	3.68 × 3.17	25-32	平坦	-	4	1	-	2	-	人為	土師器、須臾器	8世紀前半	
17	C 3c6	N-45°-W	方形	3.96 × 3.70	20-28	平坦	-	4	1	-	1	-	自然	土師器、須臾器、石器、鉄製品、瓦	8世紀前半	
18	B 3g0	N-33°-W	方形	5.20 × 5.12	30-44	平坦	-	4	1	-	1	-	人為	土師器、須臾器、土製品	8世紀後半	SI24 → 本跡 → SK24
20	B 4i1	N-45°-W	方形	3.34 × 3.10	35-38	平坦	-	-	1	-	1	-	人為	土師器、須臾器、瓦	8世紀後半	
21	B 4h1	N-31°-W	方形	3.67 × 3.48	45-57	平坦	-	4	1	-	1	-	人為	土師器、須臾器、土製品	8世紀後半	
23	B 4f1	N-36°-W	方形	4.90 × 4.75	39-52	平坦	-	4	2	-	1	-	人為	土師器、須臾器、土製品、石器、鉄製品	8世紀後半	
27	B 4f4	N-54°-W	[方形] [長方形]	5.20 × (3.10)	33-42	平坦	-	-	-	-	1	-	人為	土師器、須臾器	8世紀後半	
30	A 4i7	N-28°-W	方形	5.10 × 4.86	36-56	平坦	一部	4	1	-	1	-	人為	土師器、須臾器、鉄製品	8世紀中葉	
31	A 4h8	N-25°-W	[方形] [長方形]	(3.90) × (3.00)	40	平坦	-	-	-	-	1	-	人為	土師器、須臾器、瓦	8世紀後半	SI23 → 本跡 → 第1号火葬場
33	A 4h8	N-25°-W	[方形] [長方形]	(2.70) × (0.30)	36	不明	-	-	-	-	1	-	不明	土師器、須臾器	8世紀中葉	本跡 → SI31

(2) 竪穴遺構

第2号竪穴遺構(SI-10)(第54図)

位置 調査区南部のF 2c1区、標高23.2mの台地縁部に位置している。

規模と形状 北部コーナー以外は削平されており、南北軸3.40m、東西軸3.34mが確認できた。平面形は方形で、長軸方向はN-22°-Eである。残存している壁高は37cmで、緩やかに立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、硬化した床は認められなかった。

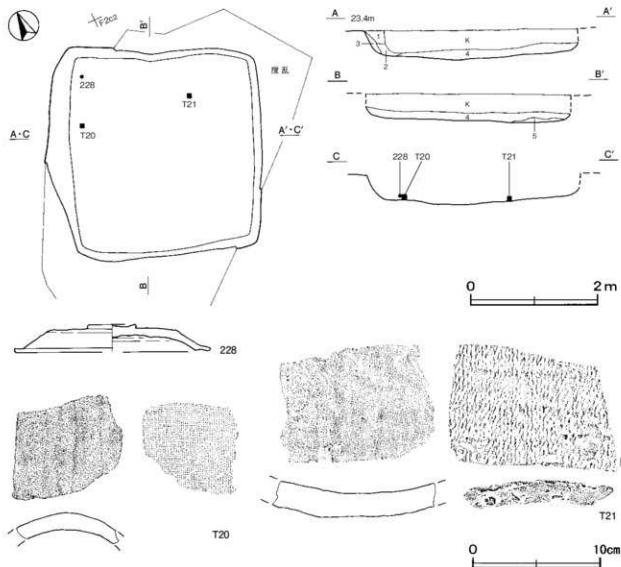
覆土 5層に分層できる。削平により覆土の残りがわずかで、堆積状況の全容は不明である。

土層解説

- | | | | |
|---------|-------------------------|------|-----------|
| 1 褐色 | ローム粒子少量 | 4 褐色 | ローム粒子微量 |
| 2 褐色 | 焼土粒子・炭化粒子・砂粒微量 | 5 褐色 | ロームブロック中量 |
| 3 にぶい褐色 | 砂ブロック中量、焼土ブロック少量、炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片14点(甕)、須臾器片2点(蓋)、瓦片2点(丸瓦、平瓦)、粘土塊1点、礫2点(礫岩)が出土している。また、流れ込んだ縄土器片43点も出土している。228は北部の覆土下層、T 20・T 21は西部と東部の床面からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から8世紀前葉と考えられる。本跡には竈がなく、床が踏み固められた形跡も薄いことから、住居以外の機能であったと考えられる。



第54図 第2号竪穴遺構・出土遺物実測図

第2号竪穴遺構出土遺物観察表 (第54図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
T228	須恵器	蓋	[15.4]	2.2	-	長石・石英	灰黄	普通	つまみ貼り付け	覆土下層	30%
番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	焼成	手法の特徴ほか		出土位置	備考
T20	丸瓦	(8.2)	(8.0)	1.2	(129.4)	長石・石英	普通	凸面縦方向のへう割り後ナデ	凹面布目痕	床面	
T21	平瓦	(9.8)	(12.8)	2.1	(388.0)	長石・石英・赤色粘土	普通	凸面長縄叩き	凹面布目痕 横骨痕	床面	

第3号竪穴遺構 (SI-8) (第55～58図)

位置 調査区南部のF1d0区で、標高230mの台地縁辺部に位置している。

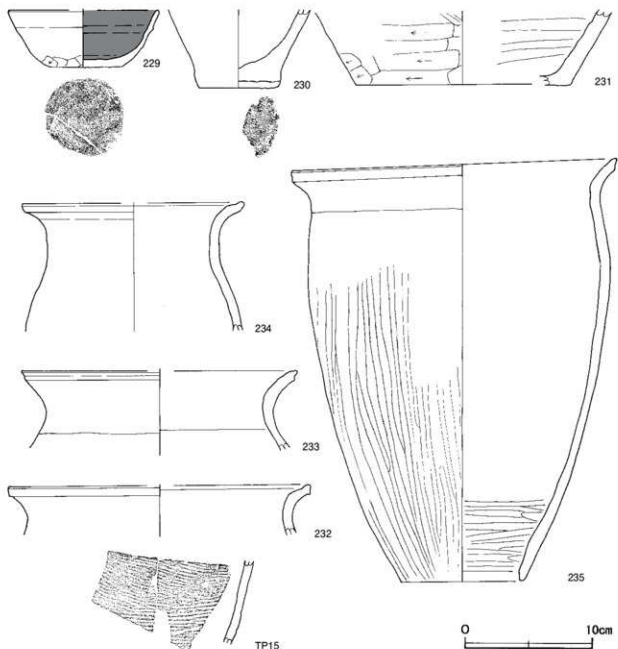
重複関係 第2号粘土採掘坑を掘り込んでいる。

土層解説

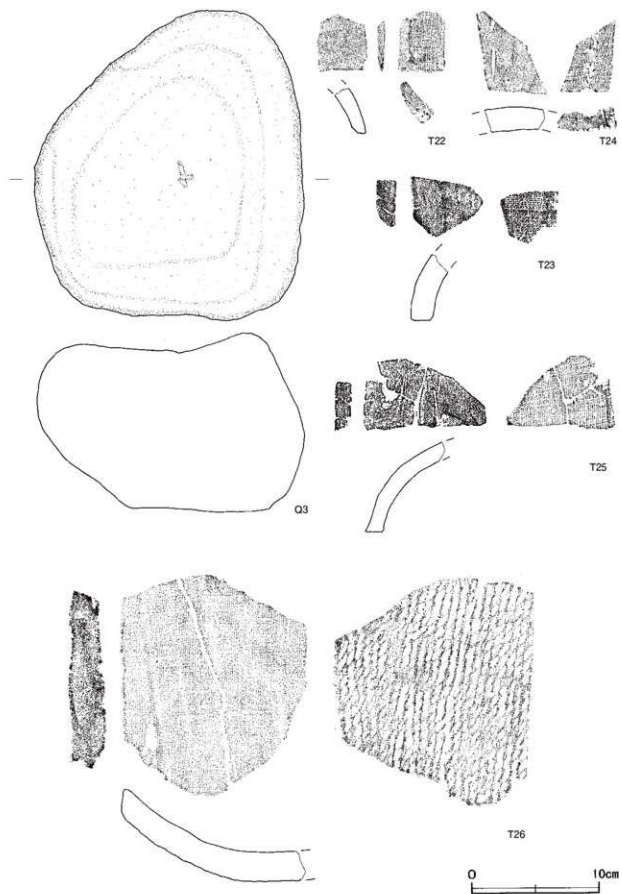
- | | | | |
|-------|----------------|--------|-------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子中量 | 7 暗赤褐色 | 焼土粒子多量、ローム粒子中量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子微量 | 8 暗褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子中量 | 9 暗褐色 | ロームアブロック中量 |
| 4 暗褐色 | ローム粒子多量 | 10 暗褐色 | ロームアブロック多量 |
| 5 黒褐色 | ロームアブロック多量 | 11 暗褐色 | ロームアブロック中量、焼土粒子微量 |
| 6 暗褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子少量 | | |

遺物出土状況 土師器片 298 点 (坏 22, 鉢 1, 甕 274, 瓶 1), 須恵器片 17 点 (坏 3, 蓋 1, 鉢 1, 瓶 1, 甕 11), 瓦片 27 点 (丸瓦 10, 平瓦 17), 石器 1 点 (台石カ), 礫 12 点 (砂岩, 礫岩) が出土している。また, 混入した縄文土器片 127 点も出土している。235 は中央部の床面, 233 は西部, 234・Q3・T27~T29 は中央部の覆土下層, 229・231・T P 15・T24・T26・T31 は中央部の覆土中層からそれぞれ出土している。

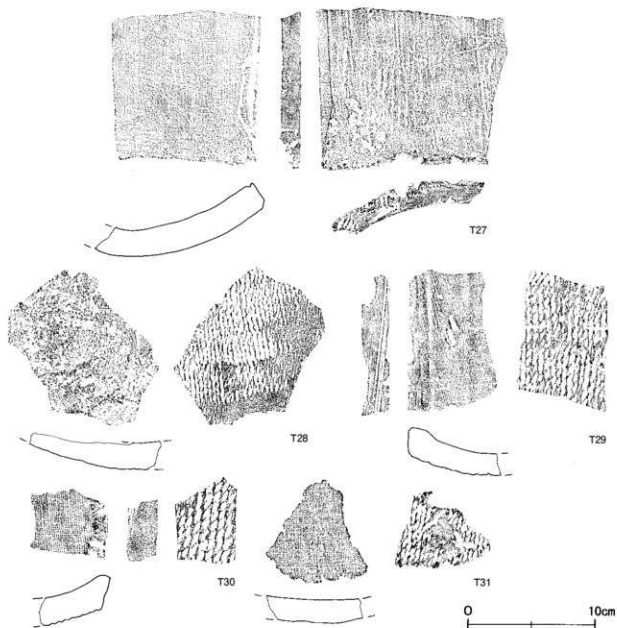
所見 時期は, 出土土器から 8 世紀後葉と考えられる。本跡には竈がなく, 床は踏み固められた形跡がないことから, 倉庫的な施設の可能性がある。



第 56 図 第 3 号堅穴遺構出土遺物実測図 (1)



第57图 第3号竖穴遺構出土物実測図(2)



第58図 第3号竪穴遺構出土遺物実測図(3)

第3号竪穴遺構出土遺物観察表(第56~58図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
229	土師器	坏	[11.6]	4.5	6.0	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部ナデ	覆土中層	60% PL11
230	土師器	鉢	-	(6.2)	[6.0]	長石・石英	にぶい橙	普通	輪轆痕	覆土中	10%
231	須恵器	鉢	-	(5.9)	[17.0]	長石・石英・黒色粒子	灰	普通	体部下端下端削位の平行印き長ヘラ削り・内面ナデ調整時の起痕	覆土中層	5%
232	土師器	甕	[23.6]	(4.0)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	外・内面ナデ	覆土中	5%
233	土師器	甕	[21.6]	(6.3)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ	覆土下層	5%
234	土師器	甕	[17.4]	(10.2)	-	長石・石英・雲母・小炭	橙	普通	口縁部外面横ナデ	覆土下層	20%
235	土師器	瓶	25.4	33.5	9.6	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部外面横ナデ 体部外面ヘラ削き 内面ヘラナデ	床面	80% PL14
TP15	須恵器	甕	-	(6.6)	-	長石・石英・雲母	暗灰黄	普通	体部端位の平行印き	覆土中層	PL15

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 3	台石カ	24.7	21.2	14.3	12880	花崗岩	上面にくぼみ有	覆土下層	PL17

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
T22	丸瓦	(5.0)	(2.4)	1.3	(36.2)	長石・石英	普通	凸面縦方向のへう割り後ナデ	凹面布目痕	覆土中
T23	丸瓦	(5.4)	(2.9)	1.9	(62.5)	長石・石英	普通	凸面縦方向のへう割り後ナデ	凹面布目痕	覆土中
T24	丸瓦	(6.9)	(4.6)	1.9	(68.9)	長石・赤色粒子	普通	凸面縦方向のへう割り	凹面布目痕 横骨痕	覆土中層
T25	丸瓦	(6.2)	(6.1)	1.2	(74.7)	長石・石英・赤色粒子	普通	凸面縦方向のへう割り後ナデ	凹面布目痕	覆土中
T26	平瓦	(18.4)	(14.6)	2.4	(76.2)	長石・石英・細礫	普通	凸面長縄叩き	凹面布目痕 横骨痕	覆土中層 PL20
T27	平瓦	(13.1)	(13.5)	2.3	(60.7)	長石・細礫	普通	凸面長縄叩き・ナデ	凹面布目痕 横骨痕	覆土下層 PL20
T28	平瓦	(13.1)	(10.4)	2.2	(25.4)	長石・赤色粒子・細礫	普通	凸面長縄叩き	凹面布目痕 剥離	覆土下層
T29	平瓦	(11.7)	(7.4)	2.3	(26.3)	長石・石英	普通	凸面長縄叩き	凹面布目痕 横骨痕	覆土下層 PL20
T30	平瓦	(7.0)	(5.5)	2.2	(115.3)	長石・石英	普通	凸面長縄叩き	凹面布目痕 横骨痕	覆土中
T31	平瓦	(8.2)	(7.6)	1.8	(110.7)	長石・赤色粒子・細礫	普通	凸面長縄叩き	凹面布目痕	覆土中層

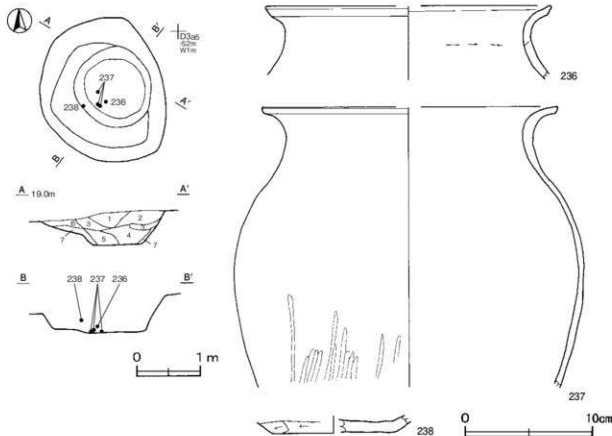
表4 奈良時代堅穴遺構一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模 (m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設				覆土	出土遺物	時期	備考 新旧関係 (旧→新)
								竪土	土師器	須恵器	瓦				
2	F 2 c1	N・22°・E	[方形]	3.40 × 3.34	37	平担	-	-	-	-	不明	土師器、須恵器、瓦	8世紀前半		
3	F 1 d0	N・59°・E	方形	5.35 × 4.90	34-74	平担	-	8	-	4	-	自然土 土師器、須恵器、 石瓦、瓦	8世紀後半	SN 2 → 本跡	

(3) 土坑

第1号土坑 (第59図)

位置 調査区中央部のD 3 a4区、標高18.8mの台地縁辺部に位置している。



第59図 第1号土坑・出土遺物実測図

規模と形状 長径 2.29 m, 短径 1.92 m の楕円形で, 長径方向は N - 16° - W である。深さ 60cm で, 底面は平坦であり, 壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 7層に分層できる。ブロック状の堆積状況を示しており, 埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|---------|----------------------|-------|-------------------|
| 1 濃い黄褐色 | 粘土ブロック中量, ローム粒子微量 | 5 褐色 | ロームブロック中量, 粘土粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子・粘土粒子・砂粒微量 | 6 黒褐色 | ローム粒子・砂粒微量 |
| 3 暗褐色 | 粘土ブロック・砂粒少量, ローム粒子微量 | 7 黄褐色 | 粘土ブロック多量 |
| 4 黒褐色 | 焼土粒子・粘土粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片 8 点 (瓷) が, 投げ込まれた状態で底面から出土している。

所見 時期は, 出土土器から 8 世紀前半と考えられる。第 8 号土坑に隣接しており, 形状も類似していることから同時期に存在していた可能性が高い。

第 1 号土坑出土遺物観察表 (第 59 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
236	土師器	甕	[22.4]	(5.8)	-	長石・石英	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 輪横痕	覆土下層	10%
237	土師器	甕	[23.4]	(22.2)	-	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へラ磨き	覆土下層	20%
238	土師器	甕	-	(1.4)	[9.6]	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	体部下端手持ら削り割 底部へラナデ	覆土中層	5%

第 8 号土坑 (第 60 図)

位置 調査区中央部の D 3 a 3 区, 標高 18.6 m の台地緩斜面部に位置している。

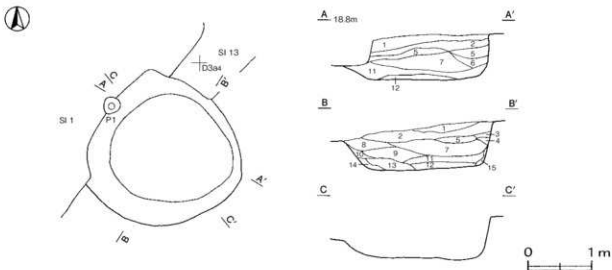
重複関係 第 1・13 号住居に掘り込まれている。

規模と形状 長径 2.37 m, 短径 2.35 m の円形である。深さ 69cm で, 底面は平坦であり, 壁は外傾して立ち上がっている。北西壁際に深さ 20cm のピットが認められた。

覆土 15層に分層できる。ブロック状の堆積状況を示しており, 埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|---------|----------------------|--------|----------------------------|
| 1 濃い黄褐色 | 焼土粒子少量, ローム粒子・炭化粒子微量 | 7 黒褐色 | ロームブロック中量, 砂質粘土ブロック・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子微量 | 8 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック少量, 砂粒微量 | 9 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 4 濃い黄褐色 | 砂粒多量 | 10 褐色 | 砂粒中量 |
| 5 黒褐色 | ローム粒子少量 | 11 黒褐色 | ロームブロック中量 |
| 6 暗褐色 | ロームブロック多量 | | |



第 60 図 第 8 号土坑実測図

- 12 黒褐色 ロームブロック少量
13 黒褐色 ロームブロック多量

- 14 黒褐色 ローム粒子中量
15 濃い黄褐色 砂粒多量、ローム粒子微量

遺物出土状況 土師器片 43点 (坏4, 甕39), 須恵器片 4点 (坏3, 甕1) が出土している。また, 混入した縄文土器片 2点も出土している。遺物は細片のため図示できなかった。

所見 時期は, 重複関係から 8世紀中葉と考えられる。

表5 奈良時代土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		壁面	底面	覆土	出土遺物	時代	備 考 新旧関係 (旧→新)
				長径(軸) × 短径(軸) (m)	深さ (cm)						
1	D 3a4	N・16°・W	楕円形	2.29 × 1.92	60	外傾	平坦	人為	土師器	8世紀前半	
8	D 3a3	-	円形	2.37 × 2.35	69	外傾	平坦	人為	土師器, 須恵器	8世紀中葉	本誌→S11・13

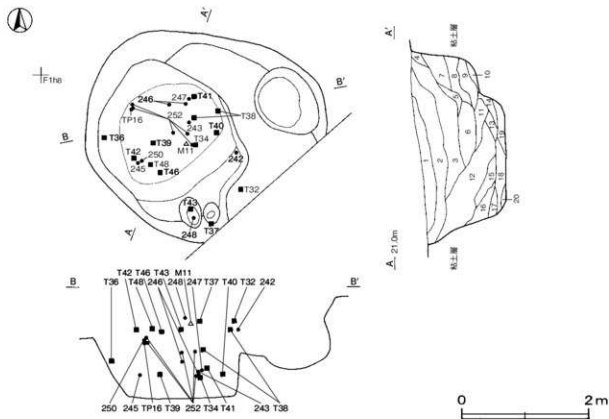
(4) 粘土採掘坑

第1号粘土採掘坑 (SK-11) (第61～65図)

位置 調査区南部の F 1 h 8 区, 標高 20.8 m の台地縁部に位置している。

規模と形状 南東部が調査区域外に延びており, 東西径 3.37 m, 南北径 3.28 m しか確認できなかった。平面形は楕円形で, 長径方向は N-38°-E である。底面には段差があり, 深さ 96 cm の皿状の面と, 深さ 135 cm の平坦な面となっている。壁はほぼ直立している。

覆土 20層に分層できる。ブロック状の堆積状況を示しており, 埋め戻されている。



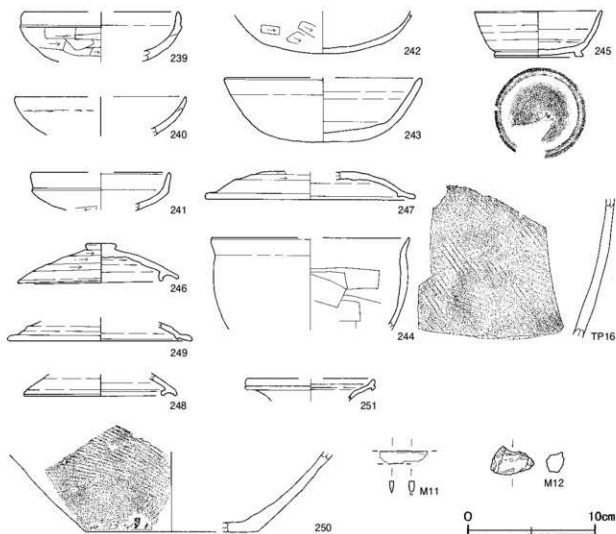
第61図 第1号粘土採掘坑実測図

土層解説

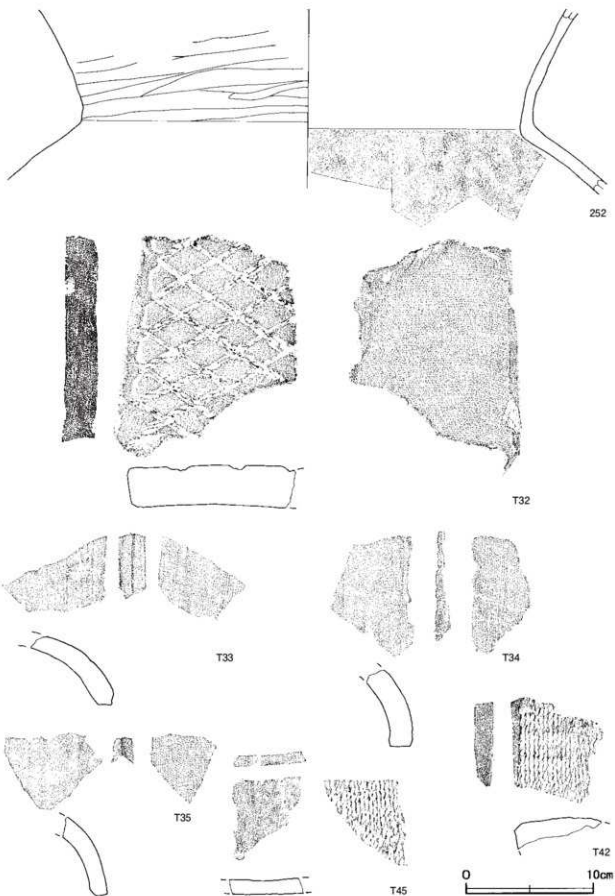
1	にぶい黄褐色	ローム粒子少量	11	暗 褐色	ロームブロック・砂粒少量
2	暗 褐色	ロームブロック少量	12	暗 褐色	ロームブロック・砂粒中量、焼土粒子少量
3	暗 褐色	ローム粒子中量	13	暗 褐色	焼土粒子・砂粒微量
4	にぶい黄褐色	砂粒中量、ローム粒子微量	14	にぶい黄色	砂粒多量、ローム粒子中量
5	暗 褐色	砂粒中量、焼土ブロック微量	15	黒 褐色	ローム粒子微量
6	暗 褐色	ロームブロック中量、焼土粒子微量	16	オリーブ褐色	砂粒少量
7	にぶい黄色	ローム粒子中量	17	暗オリーブ褐色	砂粒少量
8	黄 褐色	砂粒多量	18	にぶい黄色	砂粒多量、ローム粒子微量
9	にぶい黄褐色	砂粒中量	19	暗 褐色	砂粒少量
10	にぶい黄色	ローム粒子少量	20	にぶい黄色	砂粒多量

遺物出土状況 土師器片 773 点 (坏 33, 碗 1, 甕 739), 須恵器片 34 点 (坏 7, 高台付坏 1, 蓋 9, 鉢 1, 瓶 1, 甕 15), 土製品 1 点 (土玉), 鉄製品 1 点 (刀子), 鉄滓 2 点, 瓦片 41 点 (鬼瓦 1, 丸瓦 6, 平瓦 27, 小破片 7), 粘土塊 2 点, 礫 2 点 (砂岩, チャート) が出土している。また, 混入した縄文土器片 24 点も出土している。243・245・247・T 34・T 39 ~ T 41 は覆土下層, 250・T P 16・T 36 は覆土中層からそれぞれ出土している。246・252 は覆土中層から下層にかけて出土した破片が接合したものである。242・248・T 32・T 37・T 42・T 43・T 46・T 48・M 11 は覆土上層からそれぞれ出土している。

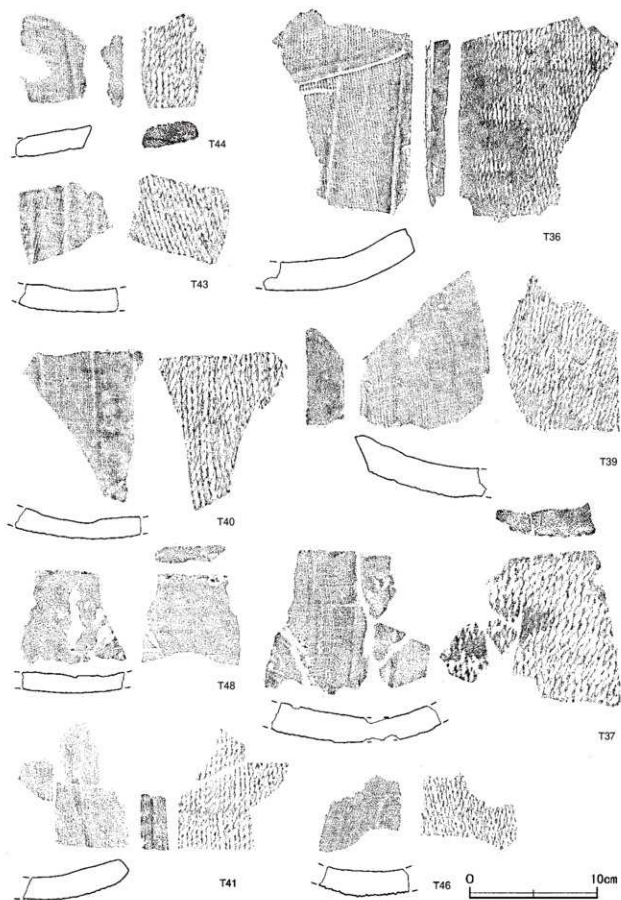
所見 時期は, 出土土器から 8 世紀初頭と考えられる。



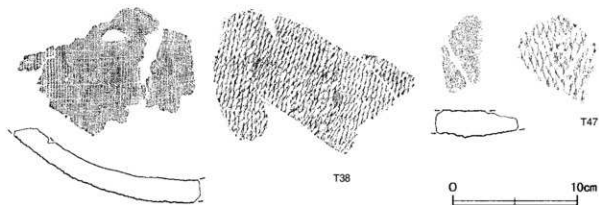
第 62 図 第 1 号粘土探掘坑出土遺物実測図 (1)



第63图 第1号粘土探掘坑出土遗物实测图(2)



第64图 第1号粘土探掘坑出土遗物实测图(3)



第65図 第1号粘土採掘坑出土遺物実測図(4)

第1号粘土採掘坑出土遺物観察表(第62～65図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
239	土師器	坏	[12.0]	(4.0)	-	長石・石英・赤色 粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 輪轆痕	覆土中	20%
240	土師器	坏	[13.3]	(3.1)	-	長石・石英・赤色 粒子	明赤褐	普通	輪轆痕 体部外面ナデ	覆土中	20%
241	土師器	坏	[10.8]	(3.0)	-	長石・石英	にぶい黄褐	普通	底部へう割り	覆土中	5%
242	土師器	坏	-	(3.3)	-	長石・石英・赤色 粒子	にぶい褐	普通	体部外面へう割り後ナデ	覆土上層	20%
243	須恵器	坏	[15.4]	5.2	6.0	長石・石英・小礫	黄灰	普通	口クロ成形	覆土下層	30%
244	土師器	碗	[15.6]	(7.3)	-	長石・石英	にぶい橙	普通	内面へうラナデ	覆土中	10%
245	須恵器	高台付坏	10.0	3.7	6.8	長石・石英	灰	普通	内面自然輪 底部回転へう切り後高台取り付け	覆土下層	70% PL11
246	須恵器	蓋	12.7	3.2	-	長石・石英	灰白	普通	天井部回転へう割り	覆土中層 -下層	70% PL13
247	須恵器	蓋	[16.4]	(2.2)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄褐	普通	天井部回転へう割り	覆土下層	30%
248	須恵器	蓋	[11.8]	(1.8)	-	長石・石英	灰白	普通	口クロ成形	覆土上層	5%
249	須恵器	蓋	[14.4]	(1.6)	-	長石・石英	灰白	普通	口クロ成形	覆土中	5%
250	須恵器	鉢	-	(6.4)	[13.6]	長石・石英・雲母	灰オリーブ	普通	体部斜位の平行叩き	覆土中層	5%
251	須恵器	瓶	[10.0]	(1.8)	-	長石・石英	黄灰	普通	口クロ成形	覆土中	5%
252	須恵器	壺	-	(14.6)	-	長石	灰	普通	肩部指環によるナデ痕 内面同心叩き後ナデ	覆土中層 -下層	10%
TP16	須恵器	壺	-	(11.0)	-	長石・石英	灰	良好	体部斜位の平行叩き	覆土中層	PL15

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M11	刀子	(3.7)	1.0	0.4	(2.94)	鉄	両開	覆土上層	PL16
M12	鉄滓	2.3	3.3	1.3	7.10	鉄	気泡含む 茶褐色	覆土中	

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
T32	鬼瓦	(19.0)	(13.3)	3.1	(1043.4)	長石・石英	普通	表面碇目による斜格子紋 裏面布目痕	覆土上層	PL19
T33	丸瓦	(7.5)	(6.5)	1.7	(105.2)	長石・赤色粒子	普通	凸面縦方向のへう割り 凹面布目痕 横轆痕	覆土中	PL19
T34	丸瓦	(10.2)	(3.6)	1.7	(137.3)	長石・石英	普通	凸面縦方向のへう割り後ナデ 凹面布目痕	覆土下層	PL19
T35	丸瓦	(6.3)	(3.5)	1.6	(76.8)	長石・石英	普通	凸面縦方向のへう割り 凹面布目痕	覆土中	PL19
T36	平瓦	(16.6)	(11.9)	2.4	(577.0)	長石・赤色粒子・ 雲母	普通	凸面長縄叩き 凹面布目痕 横轆痕	覆土中層	PL19
T37	平瓦	(12.5)	(13.4)	2.3	(410.4)	長石・石英・赤色 粒子	普通	凸面長縄叩き 凹面布目痕 横轆痕	覆土上層	
T38	平瓦	(12.4)	(15.1)	1.9	(334.0)	長石・赤色粒子・ 雲母	普通	凸面長縄叩き 凹面布目痕 横轆痕	覆土上層 -中層	
T39	平瓦	(12.6)	(10.5)	2.3	(385.3)	長石・石英	普通	凸面長縄叩き 凹面布目痕 横轆痕	覆土下層	PL19
T40	平瓦	(12.7)	(9.9)	1.7	(154.0)	長石・赤色粒子	普通	凸面長縄叩き 凹面布目痕 横轆痕	覆土下層	
T41	平瓦	(11.0)	(8.3)	1.9	(158.6)	長石・赤色粒子	普通	凸面長縄叩き 凹面布目痕 横轆痕	覆土下層	
T42	平瓦	(8.5)	(6.8)	(1.7)	(90.8)	長石・赤色粒子	普通	凸面長縄叩き 凹面布目痕	覆土上層	
T43	平瓦	(7.6)	(7.8)	1.8	(107.9)	長石・黒色粒子	普通	凸面長縄叩き 凹面布目痕 横轆痕	覆土上層	

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
T44	平瓦	(7.5)	(6.0)	1.7	(94.4)	長石・砂粒	普通	凸面長縄叩き 凹面布目痕 横骨痕	覆土中	
T45	平瓦	(7.0)	(5.9)	1.2	(65.9)	長石・赤色粒子・砂粒	普通	凸面長縄叩き 凹面布目痕 横骨痕	覆土中	
T46	平瓦	(6.8)	(7.1)	1.9	(106.5)	長石・細粒	普通	凸面長縄叩き 凹面布目痕	覆土上層	PL19
T47	平瓦	(7.7)	(6.7)	2.1	(102.4)	長石・赤色粒子	普通	凸面長縄叩き 凹面布目痕	覆土中	
T48	平瓦	(7.8)	(8.1)	1.4	(113.7)	長石・細粒	普通	凸面横方向へのヘラ削り 凹面布目痕 横骨痕	覆土上層	PL19

第2号粘土探掘坑 (SI-8 貯蔵穴) (第66図)

位置 調査区南部のF1d0区、標高222mの台地縁辺部に位置している。

確認状況 第3号堅穴遺構(SI-8)の床面中央部に粘土範囲があり、その下層で確認した。

重複関係 第3号堅穴遺構に掘り込まれている。

規模と形状 重複関係から確認面での平面形は不明であるが、第3号堅穴遺構の床面を長径2.72m、短径1.80mの楕円形に掘り込み、長径方向はN-82°-Eであることが確認できた。底面には凹凸があり、確認面からの深さは130~147cmである。壁は外傾して立ち上がっており、一部袋状を呈している。

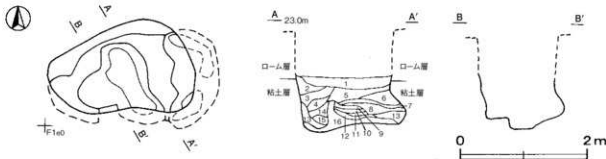
覆土 16層に分層できる。ブロック状の堆積状況を示しており、埋め戻されている。

土層解説

1	にぶい青褐色	粘土ブロック多量、ローム粒子少量	9	褐色	ロームブロック・粘土ブロック微量
2	褐色	ロームブロック少量	10	褐色	粘土ブロック中量、炭化粒子微量
3	にぶい青褐色	粘土ブロック中量、炭化粒子微量	11	褐色	粘土ブロック少量
4	褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量	12	灰白色	粘土多量、ローム粒子少量
5	にぶい青褐色	ロームブロック・粘土粒子少量	13	褐色	粘土粒子中量
6	にぶい青褐色	粘土粒子微量	14	褐色	粘土粒子微量
7	褐色	粘土ブロック少量(粘性弱い)	15	褐色	粘土粒子少量
8	褐色	ローム粒子・粘土粒子少量	16	灰白色	粘土多量

遺物出土状況 混入した縄文土器片8点が細片で出土している。

所見 時期は、重複関係から8世紀後葉以前と考えられる。本跡から南西12mの位置にある第1号粘土探掘坑は、8世紀初頭に廃絶されたと考えられている。掘り込みの形状も類似していることから、本跡も同様の遺構と推定される。



第66図 第2号粘土探掘坑実測図

表6 奈良時代粘土探掘坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	出土遺物	時代	備考
				径(横)×短径(縦) (m)	深さ(cm)						
1	F1b8	N-38°-E	楕円形	3.37 × (3.28)	96~135	外傾	平坦 直状	人為	土師器、須恵器	8世紀初頭	
2	F1d0	N-82°-E	楕円形	2.72 × 1.80	130~147	外傾	凹凸	人為		8世紀後半 以前	本跡→SH 3

4 平安時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、堅穴住居跡7軒、土坑2基、火葬墓1基を確認した。以下、遺構と遺物について記述する。

(1) 堅穴住居跡

第5号住居跡（第67～69図）

位置 調査区中央部のD3b1区、標高17.0mの台地緩斜面部に位置している。

重複関係 第6号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 西壁は斜面部で残存していないため、南北軸は4.52mで、東西軸は4.67mしか確認できなかった。平面形は方形と推定でき、主軸方向はN-16°-Wである。残存している壁高は18～59cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほほぼ平坦で、竈前面から中央部にかけて踏み固められている。壁溝が北壁から南壁の壁下を巡っており、断面形はU字状である。

竈 北壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで109cm、燃焼部幅60cmである。袖部は床面と同じ高さを基部として、第9～15層の砂質粘土を積み上げて構築されている。袖部の内側は、赤変硬化している。火床部はわずかにくぼんでおり、火床面は赤変硬化している。煙道部は壁外へ三角形に29cmほど掘り込まれ、火床部より緩やかに傾斜し立ち上がっている。

竈土層解説

1 褐 色	ロームブロック・粘土ブロック・焼土粒子・砂粒少量、炭化粒子微量	10 暗赤褐色	焼土ブロック多量、砂粒中量、炭化粒子・粘土粒子少量
2 にいり黄褐色	粘土ブロック・砂粒中量、焼土ブロック・炭化粒子少量、ローム粒子微量	11 暗赤褐色	焼土ブロック多量、炭化粒子少量
3 暗赤褐色	焼土ブロック多量、粘土粒子・砂粒中量、炭化粒子微量	12 褐 色	砂質粘土粒子多量、焼土ブロック少量
4 黒 褐色	粘土ブロック・焼土粒子少量、ローム粒子・砂粒微量	13 褐 色	砂質粘土粒子多量、焼土粒子少量
5 オリーブ褐色	粘土ブロック中量、砂粒少量	14 にいり黄褐色	砂質粘土ブロック多量、焼土ブロック少量
6 暗赤褐色	焼土ブロック・砂粒中量、粘土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量	15 暗 褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量
7 極暗赤褐色	炭化粒子中量、焼土ブロック少量、砂粒微量	16 にいり黄褐色	粘土粒子多量、焼土ブロック少量
8 極暗赤褐色	焼土粒子・炭化粒子少量	17 暗赤褐色	焼土ブロック多量、炭化粒子少量
9 オリーブ褐色	焼土粒子・砂粒少量	18 暗赤褐色	焼土粒子中量、炭化粒子少量
		19 暗赤褐色	焼土ブロック中量、炭化粒子少量
		20 褐 色	焼土粒子中量
		21 褐 色	焼土粒子少量

ピット 5か所。P1～P4は深さ39～55cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ20cmで、南壁際の中央部にあることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

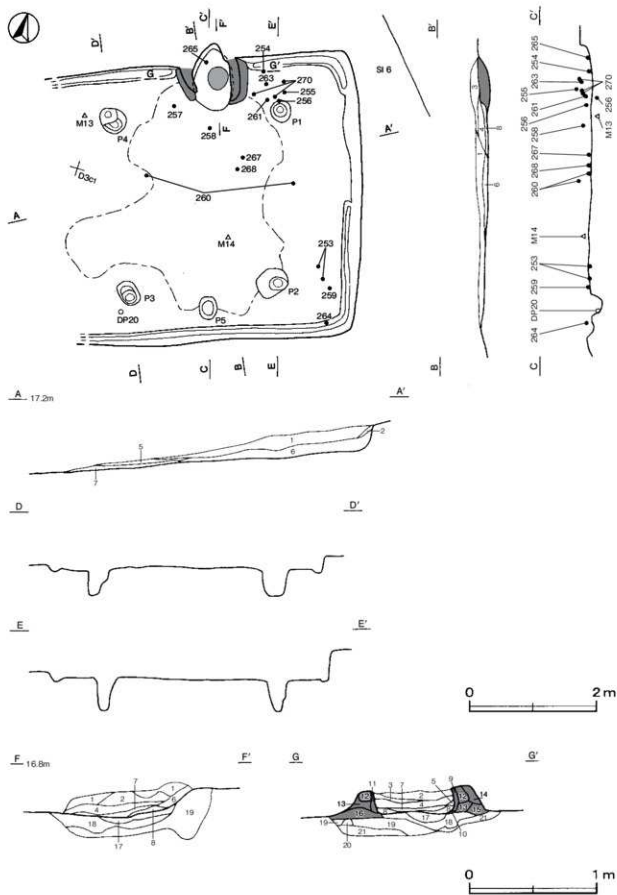
覆土 8層に分層できる。周囲から土砂が流入した様相を示しており、自然堆積と考えられる。

土層解説

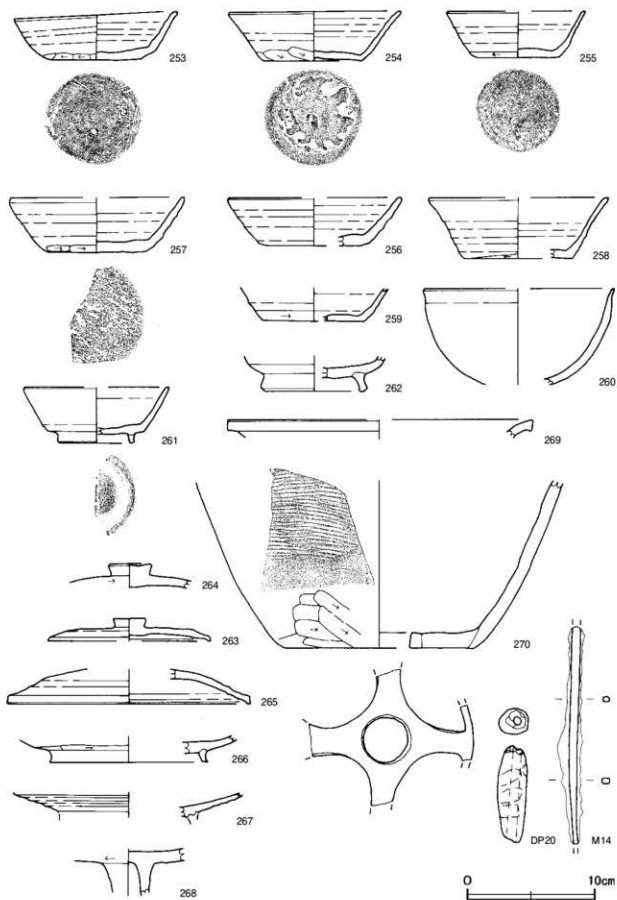
1 暗 褐色	焼土ブロック・炭化粒子・砂粒少量	5 暗 褐色	焼土ブロック・粘土粒子・砂粒少量、炭化粒子微量
2 暗 褐色	焼土粒子・砂粒少量、炭化粒子・粘土粒子微量	6 暗 褐色	焼土ブロック中量、粘土ブロック・炭化粒子・砂粒少量
3 にいり黄褐色	砂粒中量、焼土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子少量	7 黒 褐色	焼土ブロック・炭化粒子・灰少量
4 にいり黄褐色	砂粒中量、粘土ブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量	8 暗 褐色	砂粒中量、焼土粒子少量

遺物出土状況 土師器片478点（坏46、輪1、甕431）、須恵器片213点（坏115、高台付坏2、壺12、盤2、高盤2、瓶3、甕76、瓶1）、土製品1点（管状土錘）、鉄製品2点（刀子、不明）、鉄滓1点、瓦片1点（平瓦）、粘土塊2点、礫1点（砂岩）が出土している。また、混入した縄文土器片3点と泥面土1点が出土している。265は火床部から出土している。253・259は南東コーナー部、256はP1付近、DP20はP3付近、M13はP4付近の床面からそれぞれ出土している。254・261は竈右袖付近、257は竈左袖付近、260・267・268・M14は中央部、264は南東コーナー部の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、重複関係及び出土土器から9世紀前葉と考えられる。



第67图 第5号住居跡実測图



第68图 第5号住居跡出土遺物実測図(1)



第 69 図 第 5 号住居跡出土遺物実測図 (2)

第 5 号住居跡出土遺物観察表 (第 68・69 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
253	須恵器	坏	12.8	3.9	7.0	長石・石英・雲母	褐灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部回転ヘラ切り	床面	80% PL12
254	須恵器	坏	13.4	4.0	7.6	長石・石英・雲母・黒色粒子	灰黄褐	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部回転ヘラ切り	覆土下層	60% PL12
255	須恵器	坏	[10.8]	3.7	6.4	長石・石英・雲母	褐灰	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ切り	覆土中層	60%
256	須恵器	坏	[13.8]	3.8	[8.0]	長石・石英・雲母	黄灰	普通	底部回転ヘラ切り後一方角のヘラ削り	床面	30%
257	須恵器	坏	[12.6]	4.4	[7.6]	長石・石英・雲母・小塵	灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部一方角のヘラ削り	覆土下層	30%
258	須恵器	坏	[14.0]	4.8	[8.6]	長石・石英・小塵	褐灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部多方向のヘラ削り	覆土中層	20%
259	須恵器	坏	-	(2.7)	[8.0]	長石・石英・黒色粒子	灰	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ切り後ナデ	床面	20%
260	土師器	碗	[14.8]	(7.6)	-	長石・石英	にぶい黄褐	普通	口縁部外面磨ナデ	覆土中層 下層	20%
261	須恵器	高台付坏	[11.3]	4.5	[5.7]	長石・石英	にぶい黄褐	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	覆土下層	20%
262	須恵器	高台付坏	-	(2.9)	[7.8]	長石・石英・黒色粒子	黄灰	普通	高台貼り付け後口クロ成形	覆土中層	10%
263	須恵器	蓋	[12.6]	1.9	-	長石・石英・雲母・赤色粒子・小塵	明赤褐	普通	口クロ成形	覆土中層	30%
264	須恵器	蓋	-	(1.9)	-	長石・石英・雲母	黄灰	普通	刃部回転ヘラ削り	覆土下層	30%
265	須恵器	蓋	[18.9]	(2.8)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	灰黄	普通	口クロ成形 2 次焼成	竈火床部	10%
266	須恵器	盤	-	(2.1)	[12.4]	長石・石英	黄灰	普通	盤部下端回転ヘラ削り	覆土中層	10%
267	須恵器	盤	-	(2.1)	-	長石・石英	褐灰	普通	高台貼り付け後ナデ 高台潤摩	覆土中層	10%
268	須恵器	高盤	-	(3.7)	-	長石・石英・雲母	灰	普通	盤部下端回転ヘラ削り	覆土下層	10%
269	須恵器	瓶	[23.8]	(1.5)	-	長石	灰黄褐	普通	口クロ成形 自然軸	覆土中層	5%
270	須恵器	瓶	-	[13.3]	[15.0]	長石・石英	灰	普通	体部標位の平形叩き 下層ヘラ削り 底部五孔式	覆土中層	10%

番号	器種	長さ	幅 (厚)	厚さ (丸径)	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP20	管状土師	7.7	2.3	0.7	32.9	土 (長石・石英)	成形時についた手の痕有	床面	PL16
DP21	棒状土製品	(1.4)	0.9	0.8	(1.2)	土 (細砂)	ナデ	覆土中層	PL16
M13	刀子	(7.3)	0.7	0.2	(6.4)	鉄	両面 基部残存	床面	PL16
M14	棒状金具	(17.3)	0.7	0.5	(46.4)	鉄	断面方形	覆土下層	PL17

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
T49	平瓦	(2.8)	(4.6)	1.9	(19.1)	長石・赤色粒子	普通	凸面長縄叩き 凹面潤摩	覆土中層	

第 12 号住居跡 (第 70・71 図)

位置 調査区南部の E 2j3 区、標高 21.4 m の台地縁辺部に位置している。

規模と形状 東部が調査区域外に延びていることと傾斜地で北壁が残存していないことから、南北軸は 3.95 m で、東西軸は 2.90 m しか確認できなかった。平面形は、方形または長方形と推定され、長軸方向は N - 18° - E である。壁高は 34 ~ 40 cm で、外傾して緩やかに立ち上がっている。

床 ほほ平坦で、西壁側の一部が踏み固められている。

ピット 4 か所。P 1 は深さ 23 cm で、南壁際にあることから、出入り口施設に伴うピットの可能性が高い。P 2 ~ P 4 は深さ 13 ~ 50 cm と推定され、性格は不明である。

覆土 3層に分層できる。層厚が薄い。周囲から土砂が流入した様相を示しており、自然堆積と考えられる。

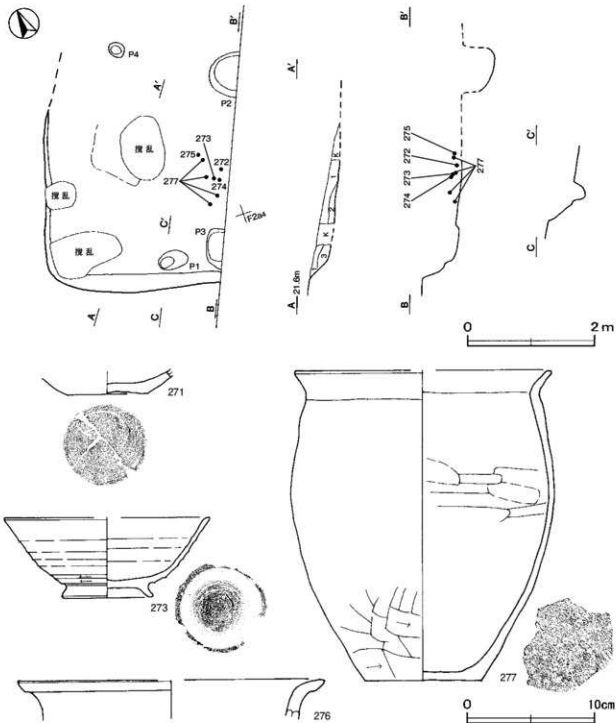
土層解説

- 1 黒色 ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子微量

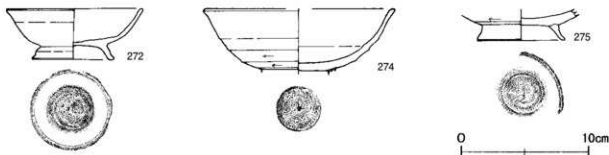
- 3 黒褐色 ローム粒子少量

遺物出土状況 土師器片 64点 (坏1, 高台付碗19, 甕44), 瓦片1点 (平瓦), 粘土塊2点, 礫5点 (砂岩) が出土している。また、流れ込んだ縄文土器片5点も出土している。272～275・277は、中央部の覆土下層から出土している。

所見 時期は、出土土器から10世紀前半と考えられる。



第70図 第12号住居跡・出土遺物実測図



第71図 第12号住居跡出土遺物実測図

第12号住居跡出土遺物観察表(第70・71図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
271	土師器	杯	-	(1.9)	6.2	長石・石英	橙	普通	底部回転糸切り	覆土中	5%
272	土師器	高台付碗	10.6	4.1	6.4	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	覆土下層	100% PL13
273	土師器	高台付碗	[16.0]	6.4	7.0	長石・石英	にぶい赤褐	普通	体部下端回転ヘラ削り	覆土下層	60% PL12
274	土師器	高台付碗	[15.0]	[5.2]	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	体部下端回転ヘラ削り	覆土下層	40% PL13
275	土師器	高台付碗	-	(2.5)	[6.9]	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	体部下端回転ヘラ削り	覆土下層	20%
276	土師器	甕	[24.0]	(3.1)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ	覆土中	5%
277	土師器	甕	[20.0]	24.6	[9.4]	長石・石英・雲母・小礫	にぶい赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部下端ヘラ削り 内面ナデ調整時の糸切り痕 底部多角形	覆土下層	20%

第13号住居跡(第72図)

位置 調査区中央部のC3j3区、標高190mの台地緩斜面部に位置している。

重複関係 第1号住居跡・第8号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 南西壁は斜面部で立ち上がり不明確であったため、北西・南東軸は4.02mで、北東・南西軸は2.60mしか確認できなかった。平面形は方形もしくは長方形と推定され、主軸方向はN-50°-Wである。残存している壁高は、12~33cmである。

床 ほぼ平坦で、竈前面から中央部にかけて踏み固められている。壁溝が北東部と南東部の壁下にあり、断面形はU字状を呈している。

竈 北西壁に付設されており、右袖部と火床面しか確認できなかった。規模は火床面から煙道部まで48cmで、燃焼部は幅24cmだけが残存している。袖部は地山を掘り残した基部が確認でき、袖部構築材と考えられる粘土ブロックが竈の覆土に含まれていた。火床部は床面と同じ高さの平坦な面を使用しており、火床面は赤変硬化している。煙道部は壁外への掘り込みがほとんどなく、火床部より緩やかに立ち上がっている。

土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土ブロック中量、炭化粒子微量 3 暗褐色 砂粒中量、粘土ブロック少量、炭化粒子微量
2 暗褐色 粘土ブロック・炭化粒子・砂粒少量、焼土粒子微量

ピット 3か所。P1・P2はそれぞれの深さが17・27cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P3は深さ15cmで、南東壁際の中央部にあることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

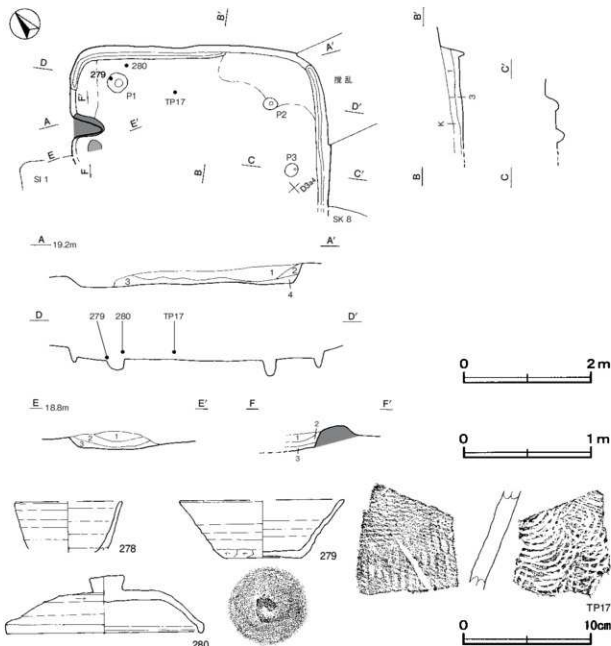
覆土 4層に分層できる。周囲からの土砂が流入した様相を示しており、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 にぶい黄褐色 粘土ブロック中量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂粒少量 3 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
2 灰黄褐色 粘土ブロック多量 4 黄褐色 砂粒多量、粘土粒子中量

遺物出土状況 土師器片43点(坏3, 甕40), 須恵器片19点(坏16, 蓋1, 瓶1, 甕1), 粘土塊3点が出土している。また, 流れ込んだ縄文土器片1点も出土している。279は正位でP1付近の覆土下層, 280は逆位でP1付近の覆土上層, TP17は北東壁寄りの覆土上層からそれぞれ出土している。

所見 時期は, 重複関係及び出土土器から9世紀中葉と考えられる。



第72図 第13号住居跡・出土遺物実測図

第13号住居跡出土遺物観察表(第72図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
278	須恵器	坏	[8.4]	(4.6)	-	長石・石英	灰	普通	口タロ成形	覆土中	10%
279	須恵器	坏	[12.9]	4.6	6.0	長石・石英・雲母	黄灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部回転ヘラ切り	覆土下層	60% PL11
280	須恵器	蓋	15.3	4.6	-	長石・石英	灰	普通	天井部回転ヘラ削り	覆土上層	90% PL13
TP17	須恵器	甕	-	(7.9)	-	長石・石英	灰	普通	体部外面格子状の吹き 内面同心円状の光る具装	覆土上層	PL15

第19号住居跡 (第73・74図)

位置 調査区北部のB317区、標高23.9mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第22号土坑、第1号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.90m、短軸2.86mの長方形で、主軸方向はN-29°-Eである。壁高は4-12cmで、外傾して立ち上がっている。掘り込みが浅く、北西壁は残存していない。

床 ほぼ平坦で、踏み固められた面は認められなかった。

竈 北壁の西コーナー寄りに付設されている。規模は焚口部から煙道部まで72cm、燃焼部幅54cmである。袖部は、左袖だけ確認できた。床の平坦面を基部として砂質粘土で構築している。火床部は浅くくぼんでおり、火床面は赤変硬化している。煙道部は壁外へ半円状に掘り込まれているが、立ち上がりの形状は確認できなかった。第3・4層は掘方への埋土層である。

埋土層解説

- | | |
|--------------|---------------|
| 1 褐色 焼土粒子中量 | 3 褐色 焼土粒子多量 |
| 2 暗褐色 焼土粒子少量 | 4 暗褐色 ローム粒子少量 |

ピット P1は深さ3cmで浅いが、南壁際の中央部にあることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 2層に分層できる。層厚は薄い均一な堆積状況で、自然堆積と考えられる。

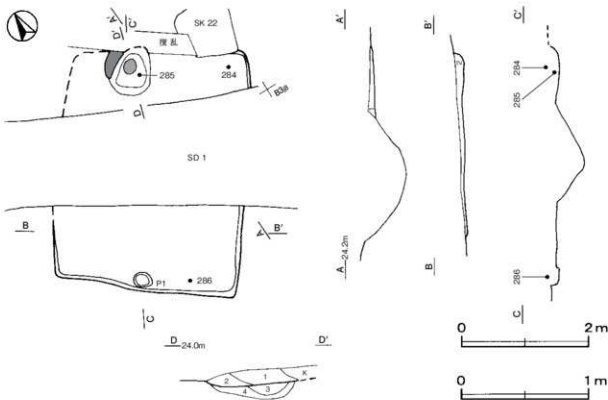
土層解説

- | | |
|---------------|------------------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子少量 | 2 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量 |
|---------------|------------------------|

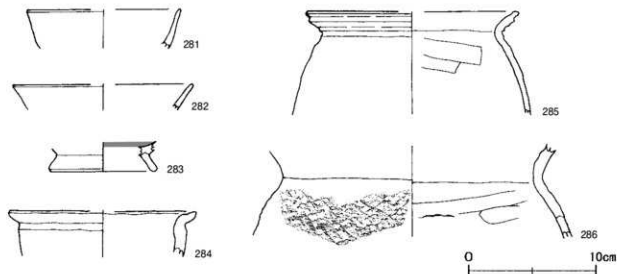
遺物出土状況 土師器片79点(坏12、高台付椀2、甕65)、須恵器片6点(坏3、蓋1、甕2)が出土している。

285は竈内の覆土下層、284は東コーナー部、286は南壁際の覆土上層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀後葉と考えられる。



第73図 第19号住居跡実測図



第74図 第19号住居跡出土遺物実測図

第19号住居跡出土遺物観察表 (第74図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
281	土師器	杯	[12.0]	(3.1)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	外・内面ナデ	覆土中	5%
282	土師器	杯	[14.0]	(2.0)	-	長石・石英	にぶい黄緑	普通	外・内面ナデ	覆土中	5%
283	土師器	高台付碗	-	(2.3)	[8.4]	長石・石英・雲母・赤色粘土	明赤褐	普通	高台輪り付け	覆土中	5%
284	土師器	羹	[14.6]	(3.6)	-	長石・石英・赤色粘土	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ	覆土上層	5%
285	土師器	羹	[16.5]	(8.1)	-	長石・石英・赤色粘土	にぶい赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 内面ヘラナデ	覆土下層	5%
286	須恵器	羹	-	(7.3)	-	長石・石英	橙	普通	体部外面指子状の明り 内面ヘラナデ 輪縁部手硬化仕	覆土上層	5%

第25号住居跡 (第75図)

位置 調査区北部のB4c4区、標高238mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第17号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 攪乱のため、北西・南東軸は3.47mで、北東・南西軸は3.12mしか確認できなかった。平面形は方形または長方形と推測でき、主軸方向はN-36°-Eである。残存している壁高は5~10cmである。

床 ほぼ平坦で、硬化面は確認できなかった。

竈 北東壁の中央部に付設されている。規模は火床部から煙道部まで59cmである。袖部は掘り残した地山を基部として、ローム土や砂質粘土を積み重ねて構築されている。右袖部は、基部に貼り付けたわずかな砂質粘土しか確認できなかった。火床部はわずかにくぼんでおり、火床面は赤変硬化している。煙道部は壁外へ半円状に22cmほど掘り込まれ、火床部より外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

- 1 にぶい赤褐色 砂質粘土粒子多量 3 褐色 焼土粒子中量、ローム粒子少量
 2 暗赤褐色 焼土ブロック少量、粘土ブロック・炭化粒子微量 4 褐色 ローム粒子多量

ピット 4か所。P1~P4は深さ10~35cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。

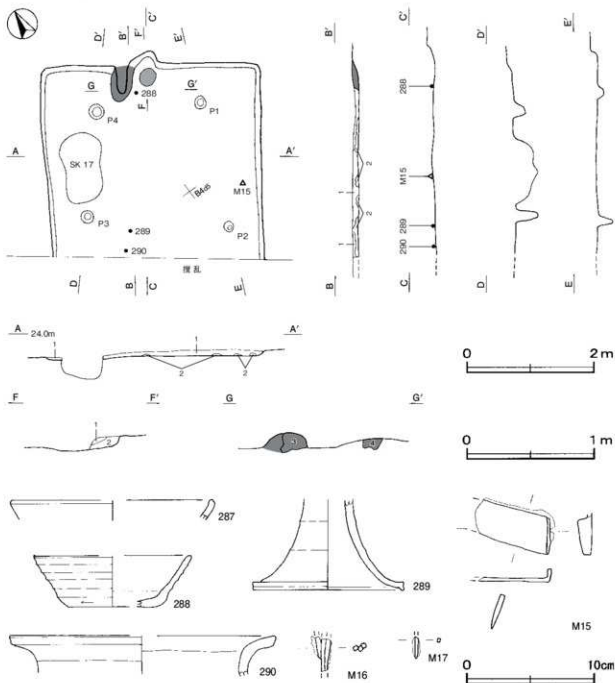
覆土 2層に分層できる。ブロック状に不規則な堆積状況を示しており、埋め戻されている。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量 2 暗褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 土師器片 55 点 (坏 1, 甕 54), 須恵器片 3 点 (坏 2, 高盤 1), 鉄製品 3 点 (鎌 1, 釘 2), 粘土塊 1 点, 礫 2 点 (礫岩, チャート) が出土している。また, 混入した瓦片 4 点も出土している。288 は竈の火床部, 289・290 は南部の床面, M15 は東壁際の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 時期は, 出土土器から 9 世紀前半と考えられる。



第 75 図 第 25 号住居跡・出土遺物実測図

第 25 号住居跡出土遺物観察表 (第 75 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
287	土師器	坏	[15.8]	(1.6)	-	灰石・石灰・赤色 粘土	にぶい赤褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ	覆土中	5%
288	須恵器	坏	[12.4]	4.1	[7.0]	灰石・石灰・雲母	灰	普通	体部下層部和へつ張り 或部一方向のへつ張り	竈火床部	10%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
289	須恵器	高盤	-	(7.2)	[11.8]	長石・石英・雲母	黄灰	普通	口クロ成形	床面	20%
290	土師器	甕	[20.6]	(3.1)	-	長石・石英・雲母	明黄褐	普通	口縁部外・内面横ナデ	床面	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M15	鎌	(6.4)	3.0	0.4	(26.8)	鉄	基部前面折り曲げ 曲刃 π	覆土下層	PL17
M16	釘	(2.8)	0.4	0.4	(2.12)	鉄	錆で3本座着 断面方形	覆土中	PL17
M17	釘	(1.8)	0.3	0.2	(0.47)	鉄	断面方形	覆土中	PL17

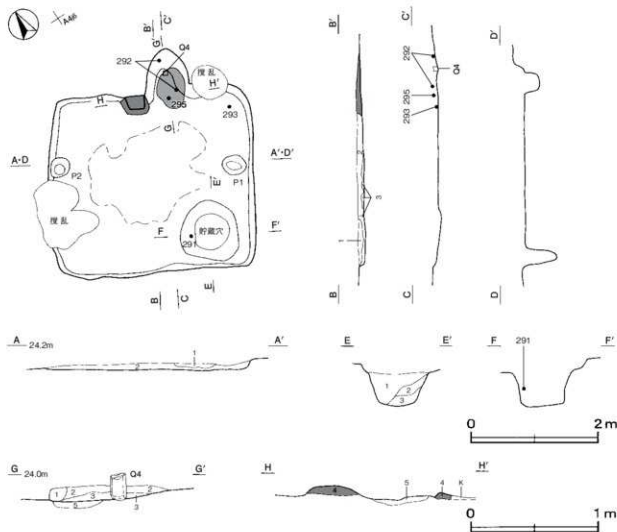
第29号住居跡 (第76・77図)

位置 調査区北部のA4j5区、標高239mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸3.20m、短軸2.85mの長方形で、主軸方向はN-33°-Eである。壁高は5～15cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほほ平坦で、中央部が踏み固められている。

竈 北東壁の東コーナー寄りに付設されている。規模は火床部から煙道部まで95cm、燃燒部幅49cmである。袖部は床面と同じ高さを基部とし、第4層の砂質粘土で構築されている。右袖は基部に貼り付けたわずかな砂



第76図 第29号住居跡実測図

質粘土しか確認できなかった。火床部はわずかにくぼんでおり、火床面から煙道部にかけて赤変している。煙道部は壁外へ半円状に69cmほど掘り込まれ、火床部より緩やかに傾斜して立ち上がっている。火床部には自然石が据えられており、火熱を受けていることから支脚と考えられる。

覆土層解説

- | | |
|------------------------|---------------------------------|
| 1 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 におい褐色 砂質粘土粒子中量、ローム粒子少量、焼土粒子微量 |
| 2 暗赤褐色 焼土ブロック中量、炭化粒子少量 | 5 赤褐色 焼土ブロック多量 |
| 3 暗褐色 焼土粒子中量 | |

ピット 2か所。P1・P2は深さ25・53cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。

貯蔵穴 南コーナー部に位置している。径99cmほどの円形で、深さ53cmである。底面は平坦で、壁はほぼ直立している。

貯蔵穴土層解説

- | | |
|---------------|--------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子少量 | 3 暗褐色 焼土粒子中量 |
| 2 暗褐色 ローム粒子微量 | |

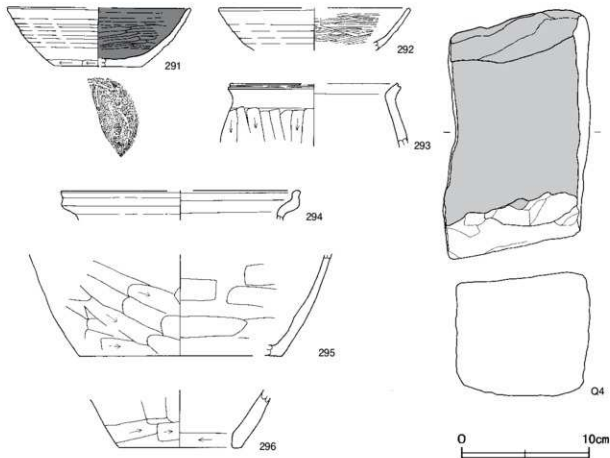
覆土 3層に分層できる。ブロック状に不規則な堆積状況を示しており、埋め戻されている。

土層解説

- | | |
|-----------------|----------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子少量 | 3 褐色 ロームブロック中量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック少量 | |

遺物出土状況 土師器片178点(坏23, 甕154, 瓶1), 須恵器片28点(坏22, 蓋3, 甕3), 石製品1点(支脚)が出土している。292・295は竈内の覆土下層, Q4は火床部に据えられた状態でそれぞれ出土している。293は東コーナーの床面, 291は貯蔵穴の覆土中層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀中葉と考えられる。



第77図 第29号住居跡出土遺物実測図

第29号住居跡出土遺物観察表 (第77図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	備考	出土位置	備考
291	土師器	坏	[14.3]	4.7	[6.8]	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	内面へつぎき 体部下部手持ちへつぎき 底縁多方向へのつぎき		貯蔵穴中層	30%
292	土師器	坏	[15.0]	(3.4)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	内面へのつぎき		甕壁土下層	10%
293	土師器	甕	[13.0]	(5.0)	-	長石・石英・赤色粘土	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へのつぎき		床面	5%
294	土師器	甕	[18.8]	(2.3)	-	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ		貯蔵穴覆土中	5%
295	土師器	甕	-	(8.1)	[16.0]	長石・石英・雲母	橙	普通	体部外面へのつぎき 内面へのつぎき		甕壁土下層	5%
296	土師器	甕	-	(4.6)	[9.6]	長石・石英・赤色粘土	にぶい赤黒	普通	体部外面へのつぎき 穿孔部へのつぎき		貯蔵穴覆土中	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q-4	支脚	19.9	11.6	9.8	3910	雲母片岩	火熱痕	床面	PL17

第32号住居跡 (第78・79図)

位置 調査区北部のB4b4区、標高23.7mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第26号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸248m、短軸235mで、平面形は方形である。主軸方向はN-34°-Eである。壁高は10~15cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほほ平坦で、硬化面は確認できなかった。

竈 北東壁の中央部で、火床面などの竈の痕跡を確認した。

竈土層解説

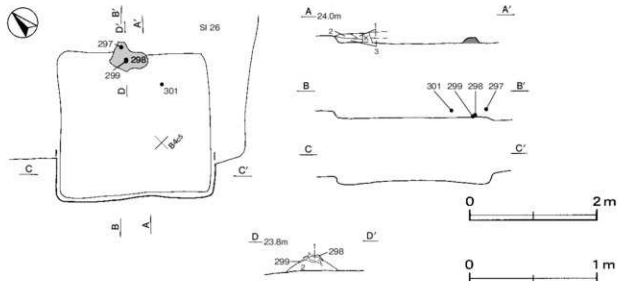
- 1 暗赤褐色 焼土粒子多量、ローム粒子少量 2 極暗赤褐色 焼土粒子中量、ローム粒子少量

覆土 3層に分層できる。ブロック状に不規則な堆積状況を示しており、埋め戻されている。

土層解説

- 1 黒褐色 炭化粒子少量、ローム粒子微量 3 褐色 ローム粒子中量
2 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量

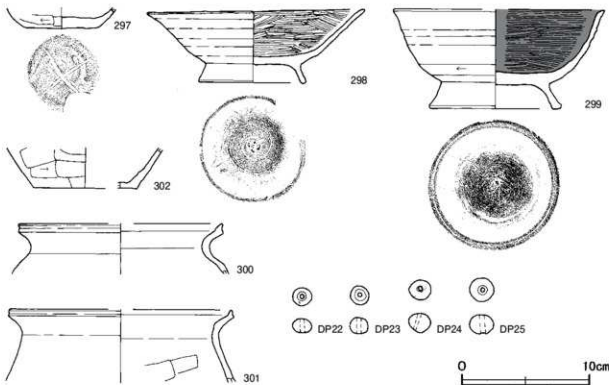
遺物出土状況 土師器片50点(坏15、高台付碗2、甕33)、須恵器片13点(坏5、瓶1、甕7)、土製品4点(土玉)が出土している。298は299の上に重なり、それぞれ逆位の状態で竈の覆土下層から出土している。



第78図 第32号住居跡実測図

これらの土器に火を受けた痕跡はなく、甕の廃絶時に土器を重ねて伏せておいたものと考えられる。297は甕内、301は甕右前面の覆土上層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀後半と考えられる。



第79図 第32号住居跡出土遺物実測図

第32号住居跡出土遺物観察表(第79図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
297	須臾器	杯	-	(1.7)	5.6	長石・石英・雲母・赤色粘土	にぶ・黄緑	普通	体部下端手持ちヘラ削り ヘラ記号「×」	甕覆土上層	29%
298	土師器	高台付椀	17.2	5.9	8.4	長石・石英	橙	普通	内面ヘラ磨き 底部回転糸切り後高台貼り付け	甕覆土下層	70% PL12
299	土師器	高台付椀	[16.5]	7.9	10.2	長石・石英	橙	普通	内面ヘラ磨き 体部下端回転糸削り 底部回転糸切り後高台貼り付け	甕覆土下層	70% PL12
300	土師器	甕	[16.0]	(4.0)	-	長石・石英	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 内面ヘラナデ	覆土中	5%
301	土師器	甕	[17.4]	(5.8)	-	長石・石英・雲母・赤色粘土	明赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 内面ヘラナデ	覆土上層	5%
302	土師器	甕	-	(3.2)	[8.0]	長石・石英・赤色粘土	にぶ・赤褐	普通	体部下端ヘラ削り 内面ナデ	覆土中	10%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴				出土位置	備考
							表面ナデ	方向からの穿孔				
DP22	土玉	1.5	1.1	0.4	2.3	土(細砂)	表面ナデ	一方方向からの穿孔			覆土中	PL16
DP23	土玉	1.5	1.3	0.4	2.8	土(細砂)	表面ナデ	一方方向からの穿孔			覆土中	PL16
DP24	土玉	1.8	1.6	0.3	4.1	土(細砂)	表面ナデ	一方方向からの穿孔			覆土中	PL16
DP25	土玉	1.9	1.5	0.4	5.3	土(細砂)	表面ナデ	一方方向からの穿孔			覆土中	PL16

表7 平安時代整穴住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設				覆土	出土遺物	時期	備考 新旧関係(旧→新)	
								土間	土間	土間	土間					
5	D 3bl	N-16°-W	[方形]	(4.67) × (4.52)	18-29	平垣	全周	4	1	-	1	-	自然	土師器、須臾器、土製品、鉄製品、瓦	9世紀前半	SB6 → 本跡
12	E 2j	N-18°-E	[方形]	(3.95) × (2.90)	34-40	平垣	-	-	1	3	-	-	自然	土師器、瓦	10世紀前半	
13	C 3j	N-50°-W	[方形]	(4.02) × (2.60)	12-33	平垣	一部	2	1	-	1	-	自然	土師器、須臾器	9世紀中葉	SL1SK8 → 本跡

番号	位置	主軸方向	平面形	規模 (m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設				覆土	出土遺物	時期	備考 新旧関係 (旧→新)	
								土師器 (土)	瓦 (瓦)	土師器 (土)	土師器 (土)					
19	B 3 17	N-29°-E	長方形	3.90 × 2.86	4~12	平坦	-	-	1	-	1	-	自然	土師器、須恵器	9世紀後半	本跡→SK22・SD1
25	B 4 e4	N-36°-E	長方形	3.47 × 3.12	5~10	平坦	-	4	-	-	1	-	人為	土師器、須恵器、土師器、土師器	9世紀前半	本跡→SK17
29	A 4 5	N-33°-E	長方形	3.20 × 2.85	5~15	平坦	-	2	-	-	1	1	人為	土師器、須恵器、土師器、土師器	9世紀中葉	
32	B 4 b4	N-34°-E	方形	2.48 × 2.35	10~15	平坦	-	-	-	-	1	-	人為	土師器、須恵器、土師器	9世紀後半	SE26→本跡

(2) 土坑

第15号土坑 (第80図)

位置 調査区南部のG 1 a6区、標高19.0mの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第16号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長径1.70m、短径1.46mの楕円形で、長径方向はN-40°-Eである。深さは30~50cmで、底面は平坦であり、壁は外傾している。

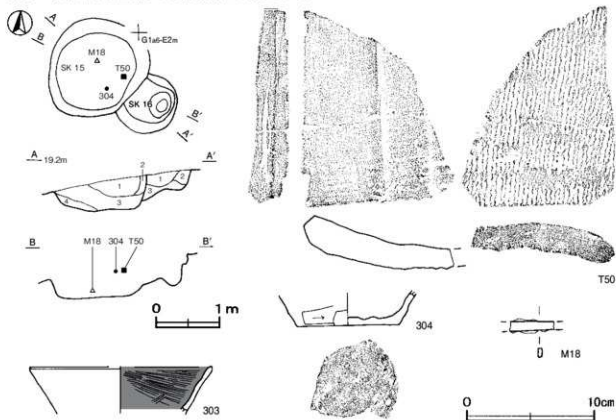
覆土 4層に分層できる。ブロック状の堆積状況を示しており、埋め戻されている。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量 3 濃い黄褐色 焼土粒子・炭化粒子・砂粒少量
2 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子・砂粒少量 4 暗褐色 炭化粒子少量、砂粒微量

遺物出土状況 土師器片50点(坏11, 甕39)、鉄製品1点(刀子)、瓦片1点(平瓦)、粘土塊4点が出土している。また、混入した縄文土器片26点、石器1点(剥片)も出土している。M18は覆土下層、304・T50は覆土上層、303は覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀後半と考えられる。



第80図 第15・16号土坑、第15号土坑出土遺物実測図

第15号土坑出土遺物観察表(第80図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
303	土師器	坏	[14.2]	(3.7)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	内面ヘラ磨き	覆土中	10%
304	土師器	甕	-	(2.6)	[8.0]	長石・石英	橙	普通	体部下端ヘラ削り	覆土上層	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M18	刀子	(3.6)	0.8	0.3	(3.18)	鉄	茎部(刃部欠損)	覆土下層	PL16

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考	
T50	平瓦	(16.0)	(11.8)	2.3	(527.5)	長石・石英・赤色 粘土	普通	凸面長縄叩き 凹面布目痕	横脊痕	覆土上層	PL20

第16号土坑(第80図)

位置 調査区南部のG1a6区、標高19.0mの台地縁部に位置している。

重複関係 第15号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長径0.97m、短径0.70mの円形で、深さは34cmである。底面には凹凸があり、壁は外傾している。

覆土 3層に分層できる。ブロック状の堆積状況を示しており、埋め戻されている。

土層解説

- 1 濃い青褐色 炭化粒子微量
2 褐色 砂粒微量
3 濃い黄褐色 砂粒多量、焼土粒子・炭化粒子少量

遺物出土状況 土師器片5点(坏2、甕3)が出土している。また、混入した縄文土器片4点も出土している。いずれの土器も細片のため図示できなかった。

所見 時期は、重複関係と出土土器から9世紀後半以前と考えられる。

表8 平安時代土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	出土遺物	時代	備考 新旧関係(旧→新)
				長径(軸)×短径(軸) (m)	深さ(cm)						
15	G1a6	N・40°・E	楕円形	1.70 × 1.46	30 ~ 50	外傾	平坦	人為	土師器、鉄製品、瓦	9世紀後半	SK16→本跡
16	G1a6	-	[円形]	0.97 × (0.70)	34	外傾	凹凸	人為	土師器	9世紀後半 以前	本跡→SK15

(3) 火葬墓

第1号火葬墓(SK-9)(第81図)

位置 調査区北部のA4h8区、標高24.2mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第31号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 径0.62mの不整形円形で、深さは23cmである。底面は皿状で、壁は外傾している。

覆土 4層に分層できる。ロームブロックを含む不規則な堆積状況を示しており、埋め戻されている。

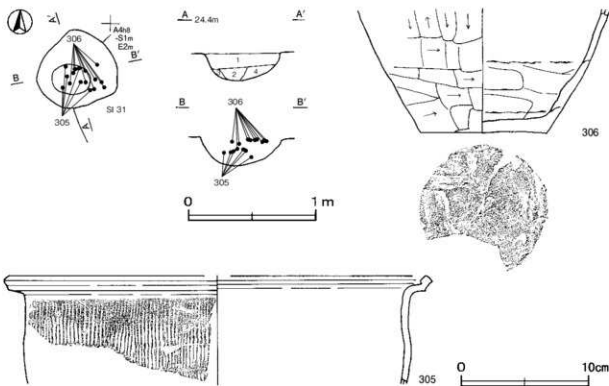
土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子少量、焼土ブロック微量
2 褐色 ローム粒子中量
3 褐色 ロームブロック多量
4 褐色 ローム粒子多量

遺物出土状況 土師器片9点(坏3、甕6)、須恵器片10点(蓋1、鉢9)、骨粉141.1gが出土している。305は覆土中層から下層、306は覆土上層から出土しており、それぞれの破片が接合したものである。骨粉は

土坑の確認面から散在した状態で出土している。細片で図示できなかったが、内面黒色処理を施した坏の破片も出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀中葉と考えられる。骨粉は微細なため部位の特定はできなかった。遺物の出土状況から、須恵器の鉢の上に土師器甕の底部を転用して蓋とし、火葬骨を納めていたと推測される。



第81図 第1号火葬墓・出土遺物実測図

第1号火葬墓出土遺物観察表（第81図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
305	須恵器	鉢	[33.0]	(8.5)	-	長石・石英	黄灰	普通	体部外面縦位の平行叩き	覆土中層 ～下層	10%
306	土師器	甕	-	(9.8)	10.0	長石・石英・赤土 粉子	橙	普通	体部外面へラ削り 内面へラナゲ 輪轆痕	覆土上層	20%

5 中世の遺構と遺物

当時代の遺構は、溝跡1条を確認した。以下、遺構と遺物について記述する。

溝跡

第1号溝跡（第82・91図）

位置 調査区北部のB312区～C4b1区、標高22.0～24.4mの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第14・19号住居跡を掘り込み、第12号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 北西側と南東側が調査区域外へ延びているため、長さ39.3mしか確認できなかった。北西方向(N-60°-W)に直線的に延び、B316付近で南西方向(N-70°-W)に屈曲し、B314付近で再び北西方向(N-60°-W)に屈曲している。上幅1.25～2.44m、下幅0.22～0.58m、深さ46～87cmで、底面は東部が

ら西部へ傾斜し、高低差は1.95 mである。断面形はU字状で、壁は緩やかに傾斜して立ち上がっている。

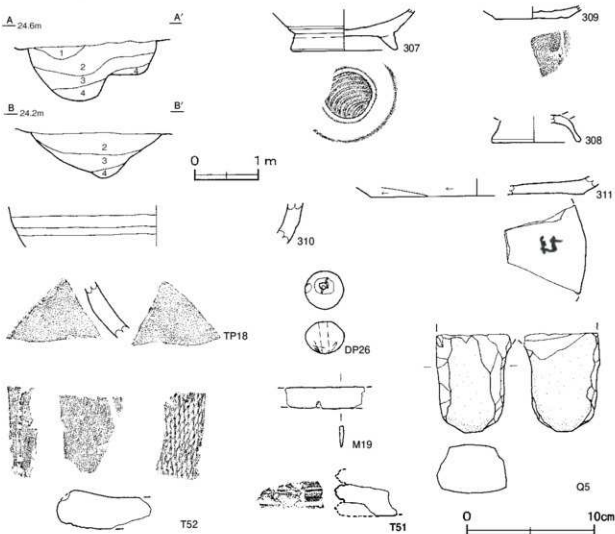
覆土 4層に分層できる。ロームブロックや粒子を不規則に含んでいることから、埋め戻されている。

土層解説

- | | |
|-----------------|---------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子少量 | 3 暗褐色 ローム粒子少量 |
| 2 黒褐色 ロームブロック少量 | 4 黒褐色 ローム粒子中量 |

遺物出土状況 土師質土器片2点(皿, 内耳鍋カ)、陶器片1点(甕), 瓦質土器片1点(鉢類), 鉄製品1点(刀子カ)が出土している。309・311・TP 18は、覆土中から出土しており、溝が使われなくなった時期に廃棄された遺物である。また、混入した縄文土器片9点, 土師器片75点, 須恵器片19点, 土製品1点(土玉), 瓦片5点(軒平瓦1, 平瓦4), 石器1点(磨製石斧)も出土している。

所見 時期は、出土土器から中世と考えられる。



第82図 第1号溝跡・出土遺物実測図

第1号溝跡出土遺物観察表(第82図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
307	土師器	高台付甕	-	(33)	[80]	長石・石英・赤色 粒子	浅黄橙	普通	底部回転糸切り後高台貼り付け	覆土中	20%
308	土師器	高台付甕	-	(21)	[6.8]	長石・石英・雲母	橙	普通	ロク口成形 内面黒色処理	覆土中	5%
309	土師質土器	皿	-	(09)	[5.8]	長石・石英	浅黄橙	普通	底部回転糸切り	覆土中	5%
310	瓦質土器	鉢カ	-	(32)	-	長石・石英	オリーブ黒	普通	体部外面へラ磨き	覆土中	5%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
311	土師質土器	内可須	-	(1.4)	[16.8]	長石・石英・雲母	灰褐色	普通	体部下端手持ちへう削り 墨書	覆土中	5% PL14
TP18	陶器	壺	-	(4.4)	-	長石・石英	灰褐色	普通	内面横ナデ	覆土中	雲母 5% PL15

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP26	土玉	3.1	2.5	0.7	19.4	土(長石・石英)	ナデ 一方からの穿孔	覆土中	PL16

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 5	磨製石斧	(7.8)	5.9	3.8	(280.0)	砂岩	両面研磨痕	覆土中	PL17
M19	刀子	(6.3)	1.7	0.3	(7.70)	鉄	両開	覆土中	PL16

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
T51	軒平瓦	(5.0)	(5.6)	(2.4)	(55.2)	長石・細礫	普通	重弧文	覆土中	PL20
T52	平瓦	(7.9)	(7.5)	2.7	(198.8)	長石・赤色粒子	普通	凸面長縄叩き 凹面布目痕 横骨痕	覆土上層	

6 その他の遺構と遺物

今回の調査で、時期が特定できない土坑 16 基と溝跡 1 条を確認した。このうち土坑 2 基と溝跡 1 条については文章で掲載し、その他の土坑については、規模・形状等を実測図(第 86 図)と一覧表で掲載する。以下、遺構と遺物について記述する。

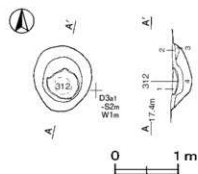
(1) 土坑

第 6 号土坑 (第 83・84 図)

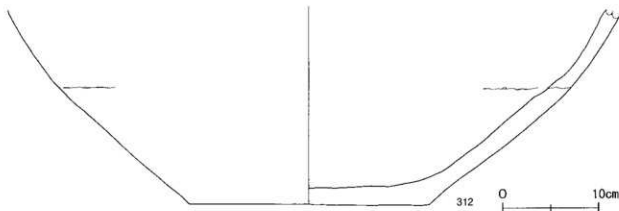
位置 調査区中央部の D 2 a 0 区、標高 17.1 m の台地緩斜面部に位置している。

規模と形状 長径 1.05 m、短径 0.91 m の楕円形で、長径方向は N-10°-E である。深さは 30 cm で、底面は皿状で、壁は緩やかに傾斜して立ち上がっている。

覆土 4 層に分層できる。ブロック状の堆積状況を示しており、埋め戻されている。



第 83 図 第 6 号土坑実測図



第 84 図 第 6 号土坑出土遺物実測図

土層解説

- 1 灰黄褐色 砂粒多量、炭化粒子少量
 2 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
 3 黒褐色 砂粒少量、焼土粒子微量
 4 黒褐色 炭化粒子少量、焼土粒子微量

遺物出土状況 土師質土器片 21 点(甕)が出土している。312 は、覆土上層から正位の状態出土している。

所見 時期は、出土土器から中世以降と考えられる。

第 6 号土坑出土遺物観察表 (第 84 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
312	土師質土器	甕	-	(20.8)	25.0	長石・石英・雲母・赤色粒子	赤褐	普通	ナデ調整 輪轆痕	覆土上層	10%

第 22 号土坑 (第 85 図)

位置 調査区部の B 3 i7 区、標高 23.9 m の台地平坦部に位置している。

重複関係 第 19 号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 一辺 0.93 m ほどの方形で、深さは 12 ~ 18 cm である。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

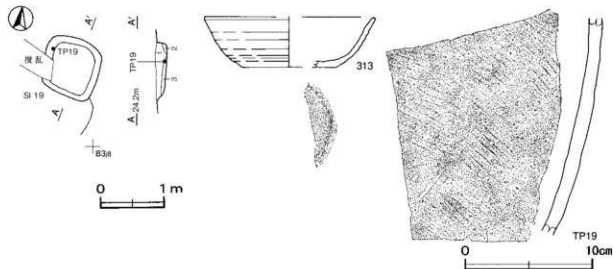
覆土 3 層に分層できる。ロームブロックを含んでいることから埋め戻されている。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量
 2 暗褐色 ローム粒子少量
 3 褐色 ロームブロック中量、焼土粒子少量

遺物出土状況 土師器片 19 点(坏 5、鉢 1、甕 13)、須恵器片 1 点(甕)が出土している。TP 19 は、北部の覆土下層から出土している。

所見 時期は、重複関係および出土土器から 9 世紀以降と考えられる。



第 85 図 第 22 号土坑・出土遺物実測図

第 22 号土坑出土遺物観察表 (第 85 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
313	土師器	坏	[13.4]	4.0	[7.6]	長石・石英	にぶい黄	普通	底部回転糸切り	覆土中	20%
TP19	須恵器	甕	-	(17.2)	-	長石・石英・小礫	灰	普通	体部斜位の平行叩き	覆土下層	PL15

第2～5号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 褐色 ローム粒子中量
- 4 褐色 ロームブロック多量、粘土粒子微量

第7号土坑土層解説

- 1 濃い黄褐色 砂粒中量、焼土粒子・炭化粒子微量

第10号土坑土層解説

- 1 黒褐色 炭化粒子多量、ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子中量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量、炭化粒子少量
- 4 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子中量
- 5 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子少量
- 6 褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量

第12号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量

第17号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ロームブロック中量
- 3 褐色 ローム粒子少量
- 4 褐色 ロームブロック少量
- 5 褐色 ローム粒子中量

第18号土坑土層解説

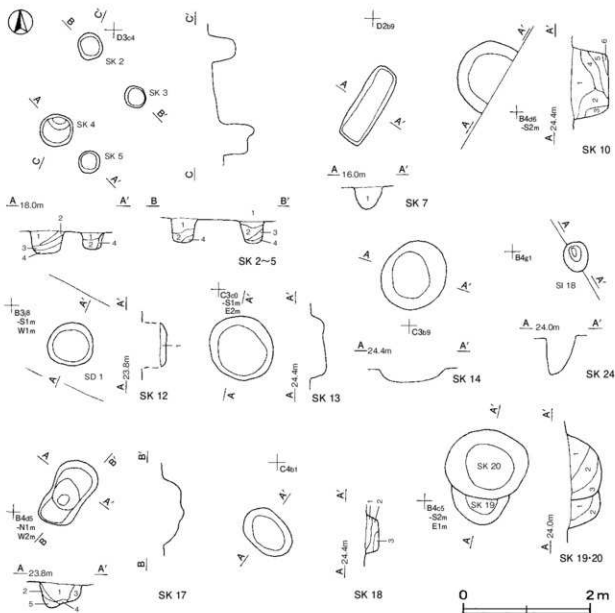
- 1 褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 明褐色 ローム粒子中量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量

第19号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量

第20号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量



第86図 その他の土坑実測図

表9 その他の土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備 考 新旧関係 (旧→新)
				長径(軸)×短径(軸) (m)	深さ(cm)					
2	D 3 c3	-	円形	0.42 × 0.40	40	直立	平坦	人為		
3	D 3 e4	-	円形	0.35 × 0.35	35	直立	平坦	自然		
4	D 3 c3	-	円形	0.52 × 0.52	37 ~ 54	直立	有段	自然		
5	D 3 c3	-	円形	0.35 × 0.35	29	直立	平坦	人為		
6	D 2 a0	N・10°・E	楕円形	1.05 × 0.91	30	緩斜	皿状	人為	土師質土器	
7	D 2 b9	N・31°・E	長方形	1.28 × 0.45	36	外傾	平坦	人為	土師器	SI7 → 本跡
10	B 4 d5	-	[円形・楕円形]	1.11 × (0.70)	58	外傾	平坦	人為	土師器	
12	B 3 j7	-	円形	0.72 × 0.70	40	外傾	平坦	人為		SD1 → 本跡
13	C 3 e9	N・46°・W	楕円形	1.10 × 0.95	25	外傾	平坦	人為		
14	C 3 a9	-	円形	1.10 × 1.00	19	緩斜	平坦	人為	土師器	
17	B 4 e4	N・35°・E 楕円長方形	楕円形	1.13 × 0.55	36	外傾	凹凸	人為		SI25 → 本跡
18	C 3 b0	N・42°・W	楕円形	0.87 × 0.59	20	外傾	平坦	人為	土師器	
19	B 4 c5	-	[円形・楕円形]	0.85 × (0.42)	45	外傾	平坦	人為		本跡 → SK20
20	B 4 c5	N・82°・E	楕円形	1.35 × 1.10	50	外傾	平坦	人為		SK19 → 本跡
22	B 3 j7	-	方形	0.93 × 0.90	12 ~ 18	外傾 緩斜	平坦	人為	土師器、須恵器	SI19 → 本跡
24	B 4 g1	N・35°・W	楕円形	0.45 × 0.38	60	外傾	皿状	人為		SI18 → 本跡

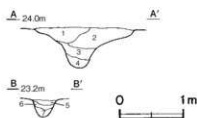
(2) 溝跡

第2号溝跡 (第87・91図)

位置 調査区北部のB 3 b0～B 4 e5区、標高23.0～23.8mの台地縁辺部に位置している。

規模と形状 北西側と南東側が調査区域外へ延びているため、長さ23.6mしか確認できなかった。北西方向(N-54°-W)に直線的に延びている。上幅0.37～1.62m、下幅0.10～0.20m、深さ33～63cmで、底面は東部から西部に傾斜し、高低差は0.47mである。断面形はU字状で、壁は緩やかに傾斜して立ち上がっている。

覆土 7層に分層できる。ブロック状の堆積状況を示していることから、埋め戻されている。



第87図 第2号溝跡実測図

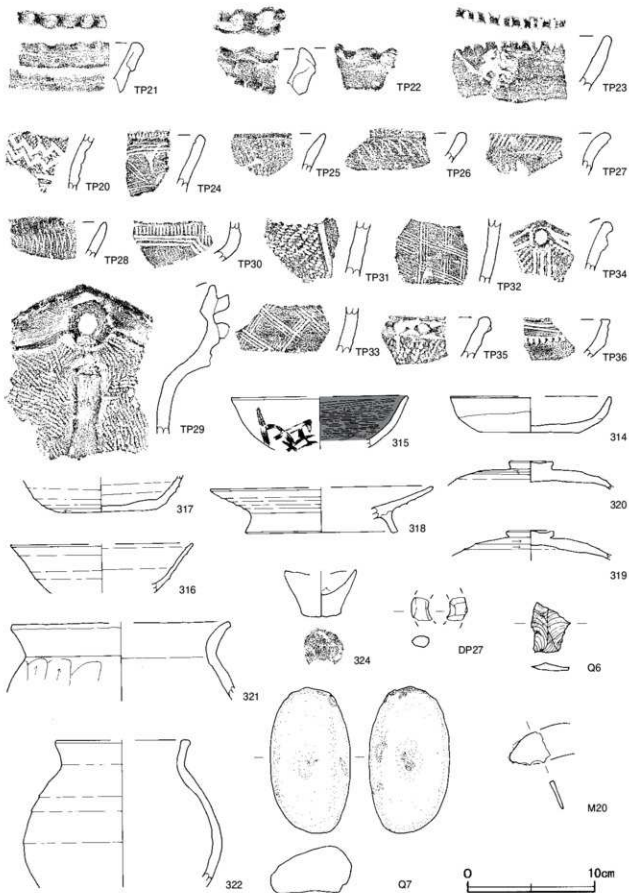
土層解説

- | | | |
|---|--------|---------------|
| 1 | にがい黄褐色 | ローム粒子多量、炭化物少量 |
| 2 | 褐色 | ロームブロック中量 |
| 3 | 暗褐色 | ロームブロック・炭化物少量 |
| 4 | 褐色 | ロームブロック少量 |
| 5 | 褐色 | ローム粒子中量 |
| 6 | 暗褐色 | ローム粒子多量 |
| 7 | 褐色 | ローム粒子多量 |

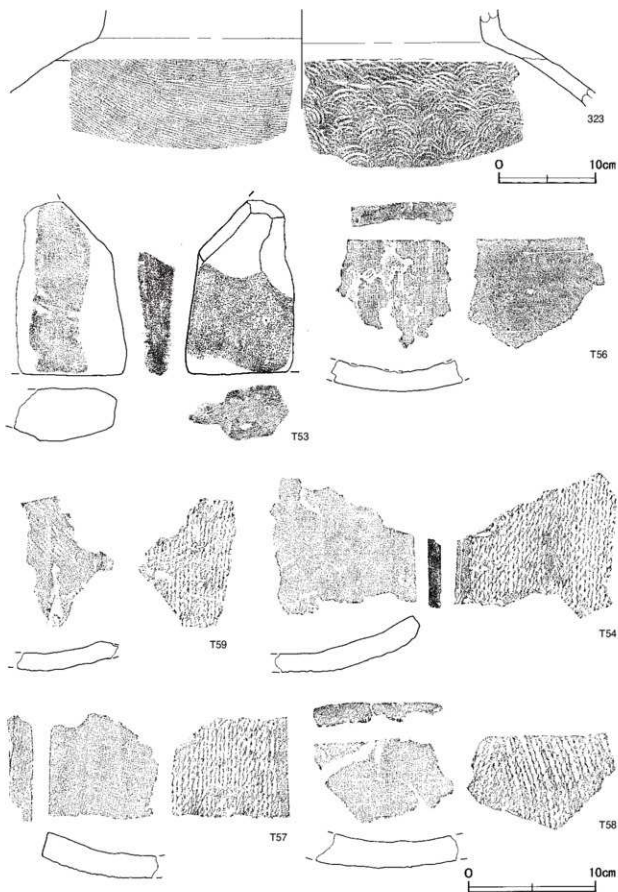
所見 出土遺物がなく、時期は不明である。

(3) 遺構外出土遺物

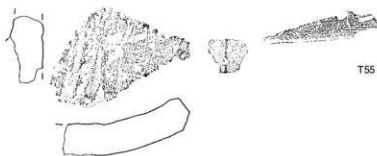
遺構に伴わない遺物について、実測図(第88～90図)および観察表に掲載する。



第88图 遺構外出土遺物実測図(1)



第89図 遺構外出土遺物実測図(2)



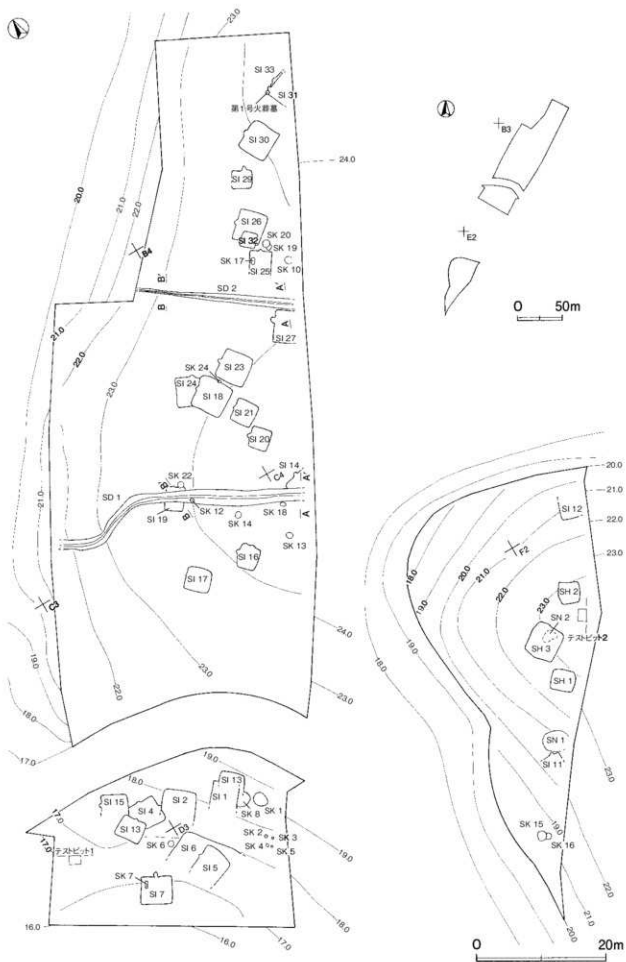
第90図 遺構外出土遺物実測図(3)

遺構外出土遺物観察表(第88~90図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
314	土師器	坏	[12.4]	2.9	7.6	長石・石英・雲母	黒	普通	底部多方向へのヘラ削り 輪轆痕	表土	40%
315	土師器	坏	[13.8]	(4.1)	-	長石・石英・赤色粒子	黒	普通	内面磨き 磨香	表土	20% PL14
316	須恵器	坏	[14.2]	(3.8)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	ロクロ成形	SI 6	10%
317	須恵器	坏	-	(2.8)	8.0	長石・石英	灰	普通	体部下周回転へのヘラ削り 底部回転への切り戻き多方向へのヘラ削り	表土	40%
318	須恵器	高台付皿	[17.5]	3.6	[12.0]	長石・石英	黄灰	普通	高台削り付け	SI 6	10%
319	須恵器	蓋	-	(2.4)	-	長石・石英	灰白	普通	天井部回転へのヘラ削り	表土	20%
320	須恵器	蓋	-	(2.1)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	天井部回転へのヘラ削り	表土	80%
321	土師器	羹	[17.0]	(6.2)	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へのヘラ削り	SK18	10%
322	須恵器	羹	[10.2]	(11.7)	-	長石・石英	灰黄	普通	外面自然釉	表土	5%
323	須恵器	羹	-	(10.4)	-	長石・石英	灰	普通	体部外面傾斜の平行削り 内面同心円状の当て具痕	表土	5%
324	土師器	にぶい黄橙土	[5.5]	3.7	2.9	長石・石英	橙	普通	内面へのヘラ削り	表土	80% PL14
TP20	縄文土器	深鉢	-	(4.4)	-	長石・石英	にぶい黄橙	普通	竹管による2条の斜行沈線 地文は単線縄文を施文	SI 18	PL15
TP21	縄文土器	深鉢	-	(3.9)	-	長石・石英	橙	普通	口唇部折り返し 口唇部に指痕による任痕	SI 21	PL15
TP22	縄文土器	深鉢	-	(3.6)	-	長石・石英	にぶい橙	普通	口唇部折り返し 口唇部に指痕による任痕	SI 21	PL15
TP23	縄文土器	深鉢	-	(4.3)	-	長石・石英	にぶい黄橙	普通	口唇部に平行な彫り文	SD 1	PL15
TP24	縄文土器	深鉢	-	(4.5)	-	長石・石英	にぶい橙	普通	口唇部に平行沈線 口縁部に平行沈線(白色土を塗布)	SI 8	PL15
TP25	縄文土器	深鉢	-	(3.0)	-	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部に貝殻線文を施文	表土	
TP26	縄文土器	深鉢	-	(2.4)	-	長石・石英	橙	普通	口唇部・口縁部に貝殻線文を施文	表土	PL15
TP27	縄文土器	深鉢	-	(3.2)	-	長石・石英	橙	普通	口縁部に平行沈線 貝殻線文を平行に施文	SI 18	PL15
TP28	縄文土器	深鉢	-	(2.7)	-	長石・石英	にぶい黄橙	普通	口縁部に波状貝殻文を施文	SD 1	PL15
TP29	縄文土器	深鉢	-	(11.7)	-	長石・石英	にぶい黄橙	普通	単線縄文反しを施文 口縁部は無文で陶線帯をめぐらす 凹形の磨き痕あり付け	表土	PL15
TP30	縄文土器	深鉢	-	(3.1)	-	長石・石英	にぶい黄橙	普通	縦位の平行沈線 以下3条の平行沈線を傾斜に施文	SI 30	PL15
TP31	縄文土器	深鉢	-	(4.5)	-	長石・石英	にぶい黄橙	普通	単線縄文反しを施文 沈線と磨り消しを施す	SI 18	
TP32	縄文土器	深鉢	-	(5.1)	-	長石・石英	にぶい橙	普通	3条の沈線による斜格子文	SI 21	PL15
TP33	縄文土器	深鉢	-	(3.5)	-	長石・石英	にぶい黄橙	普通	3条の沈線による斜格子文	SI 18	
TP34	縄文土器	深鉢	-	(3.8)	-	長石・石英	にぶい橙	普通	単線縄文反しを施文 口縁部2条の沈線 口縁部から3条の沈線文を垂す	SI 8	PL15
TP35	縄文土器	深鉢	-	(3.3)	-	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部隆起帯削り付け顔面に平行 単線縄文反しを施文	SI 18	PL15
TP36	縄文土器	深鉢	-	(3.0)	-	長石・石英	にぶい黄橙	普通	口縁部2条の沈線 陶線帯に削り文	SI 21	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP27	不明土製品	(1.9)	1.6	0.9	(2.7)	土(長石・石英)	ナデ	表土	PL16
Q 6	割片	4.0	3.0	0.7	7.0	黒曜石	押圧剥離の痕跡	SI 29	PL17
Q 7	磨石	11.6	6.4	3.7	397.0	安山岩	研削痕一面(くぼみ1か所)有	SH 2	PL17
M20	鎌	(3.1)	2.4	0.3	(4.48)	鉄	刃部先端曲刃々	表土	PL17

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
T53	隅平瓦	(13.8)	(8.8)	4.3	(538.9)	長石・石英	普通	凸面ナデ 凹面布目痕	表土	PL20
T54	平瓦	(11.7)	(11.5)	1.8	(312.7)	長石・石英・赤色粒子	普通	凸面長縄叩き 凹面布目痕 横骨痕	表土	PL20
T55	平瓦	(8.8)	(9.9)	2.5	(223.7)	長石・黒色粒子	普通	凸面横方向へのヘラ削り 凹面布目痕 横骨痕	表土	
T56	平瓦	(10.1)	(10.4)	1.8	(213.0)	長石・石英・細砂	普通	凸面横方向へのヘラ削り 凹面布目痕 横骨痕	SH 2 掘見	PL20
T57	平瓦	(8.8)	(9.2)	2.0	(210.5)	長石・赤色粒子・細砂	普通	凸面長縄叩き 凹面布目痕 横骨痕	表土	
T58	平瓦	(7.7)	(11.3)	2.4	(219.6)	長石・赤色粒子	普通	凸面長縄叩き 凹面布目痕 横骨痕	表土	
T59	平瓦	(10.8)	(7.9)	1.3	(125.5)	長石・赤色粒子	普通	凸面長縄叩き 凹面布目痕 横骨痕	表土	



第91図 根方遺跡遺構全体図

第4節 ま と め

1 はじめに

当遺跡は、縄文時代、古墳時代、奈良時代、平安時代の住居跡や土坑、中世の溝などの遺構が確認され、複合遺跡であることが確認できた。遺物は、各遺構に伴う土師器や須恵器とともに、多数の瓦片も出土している。ここでは、各時代の集落の様相について述べるとともに、出土した瓦と近隣の遺跡との関連について、若干の考察を試みたい。

2 各時代の集落様相

当遺跡の遺構の時期については、研究論文や報告書等に掲載された県南地域における土器編年研究¹⁾を参考とし、霞ヶ浦南岸地域での発掘調査資料を加味しながら検討をおこなった。以下、住居跡を中心とした集落の変遷について概観していくことにする。なお、各期の土器の特徴については、第3節遺構と遺物を参照されたい。

(1) 縄文時代

当時代の遺構として、堅穴遺構1基を確認した。本跡は炉や柱の痕跡が見られず、硬化した床面も確認できなかった。遺物は、深鉢の胴部が正位で床面から出土している。本跡の東に続く台地上や台地縁辺部には縄文土器の散布が多数見られ、調査区域外に当時代の遺構が存在していると推測できる。

(2) 古墳時代

当時代の遺構としては、堅穴住居跡2軒を確認した。第24号住居跡は7世紀前葉、第26号住居跡は6世紀後葉に位置づけられる。いずれの住居跡も台地の平坦部に立地しているが、遺跡全体から見ると西端に位置し、縄文時代と同様に、同時期の住居跡を含む集落の本体は台地の東側に存在していると推測できる。

(3) 奈良時代

当時代の遺構としては、堅穴住居跡19軒、堅穴遺構2基、土坑2基、粘土採掘坑2基を確認しており、遺跡南西部の台地平坦部や縁辺部に集落が営まれるようになる。ここでは、奈良時代を主な出土土器の特徴からⅠ～Ⅲ期に3区分し、各期の住居跡の様相について述べることにする。

なお、第4号住居跡は遺物が細片で時期を限定する事ができなかったので、ここでは除外する。

ア Ⅰ期

当該期の遺構としては、第3・7・11・14・15・16・17・21・23・27号住居跡の10軒と第2号堅穴遺構、第1号粘土採掘坑が挙げられる。

土師器の坏は、丸底で口縁部が内湾するものや直立するものがある。須恵器の坏は箱型で、平底の坏は底部にふくらみを持つものがある。須恵器の壺にはかえりが付き、天井が高いものと扁平なものが認められる。これらの土器様相から、本期は8世紀前葉に比定できる。

これらの堅穴住居跡は、調査区内の北部から南部にかけて、第27・23・21・14号住居跡、第16・17号住居跡、第15・3・7号住居跡がそれぞれ2～4軒のまとまりとして把握することができる。平面形は方形や長方形と形状は様々ではなく、主軸方向はN-16°-WからN-63°-Wを向いている住居跡が6軒で、N-17°-EからN-58°-Eの北を向いている住居跡は4軒である。床面積の平均は、15.7㎡である。

イ II期

当該期の遺構としては、第6・30・33号住居跡の3軒と第8号土坑が挙げられる。

土師器の坏は丸底のものが引き続き存在しており、体部外面へのヘラ削りも施されている。須恵器の坏は平底で、体部下端に手持ちヘラ削りが見られるようになる。須恵器の蓋はかえりが消失し、端部が垂下するものが主流となり、高台付坏や盤などが器種構成に加わる。これらの土器様相から、本期は8世紀中葉に比定できる。

この時期の住居跡は確認数が少なく、前段階で見られたようなままとりは確認できなかった。第30・33号住居跡の平面形は方形で、主軸方向はN-28°-WとN-25°-Wで、ほぼ北向きとなっている。床面積の平均は、24.7㎡である。

ウ III期

当該期の遺構としては、第1・2・18・20・31号住居跡の5軒と第3号竪穴遺構が挙げられる。

器種構成の主体が土師器から須恵器となっており、土師器はほとんどが甕類となっている。須恵器坏の底径が縮小化してきており、灰輪陶器の出土も認められるようになる。これらの土器様相から、本期は8世紀後葉に比定できる。

北部に3軒、中央部に2軒と1期と比べ住居跡数は少ないが、台地の西部に集落が広がっている可能性がある。住居跡の平面形は方形が4軒、長方形が1軒で、主軸方向はN-25°-WからN-53°-Wで、北西を向いている。床面積の平均は、17.5㎡でII期よりやや縮小している。

(4) 平安時代

当該時代になると遺構数が減少し、竪穴住居跡7軒、土坑2基、火葬墓1基を確認している。ここでは、奈良時代に引き続いて時期をIV～VII期に4区分し、各期の住居跡の様相について述べる。

ア IV期

当該期の遺構としては、第5・25号住居跡の2軒が挙げられる。

土師器坏にロクロ成形のものが認められるようになり、主体は須恵器となる。須恵器坏はさらに底径が縮小化し、器高が高くなる。蓋は笠型の形状が現れ、短い折り返しのつくものとなる。これらの土器様相から、本期は9世紀前葉に比定できる。

平面形は方形で、主軸方向は、N-16°-WとN-36°-Eである。床面積の平均は、15.9㎡である。

イ V期

当該期の遺構としては、第13・29号住居跡の2軒が挙げられる。

土師器坏に内面黒色処理とヘラ磨きを施したものが現れる。須恵器坏の器高はさらに高くなり、土師器甕の口縁端部はつまみ上げられている。これらの土器様相から、本期は9世紀中葉に比定できる。

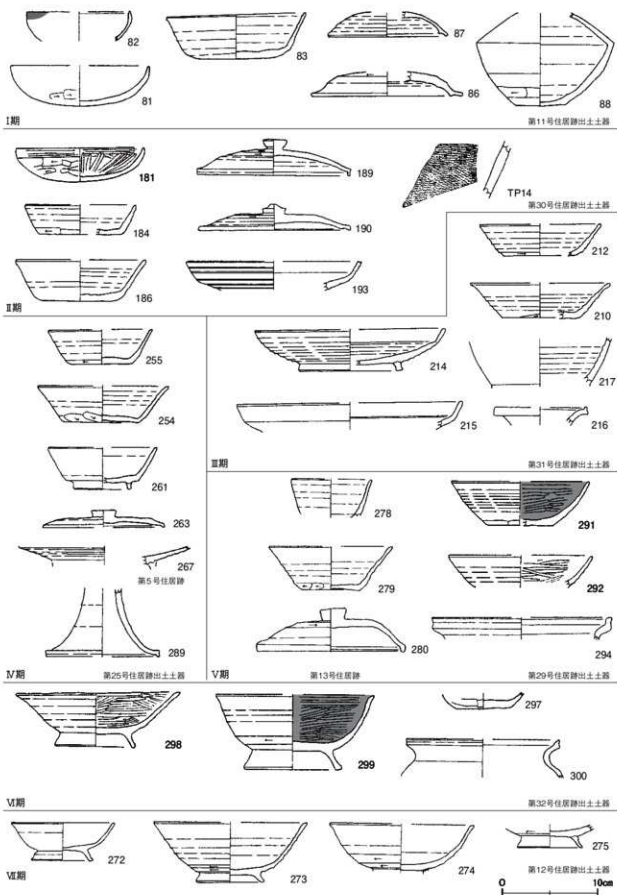
平面形は方形で、主軸方向は、N-50°-WとN-33°-Eである。床面積の平均は、9.1㎡である。

ウ VI期

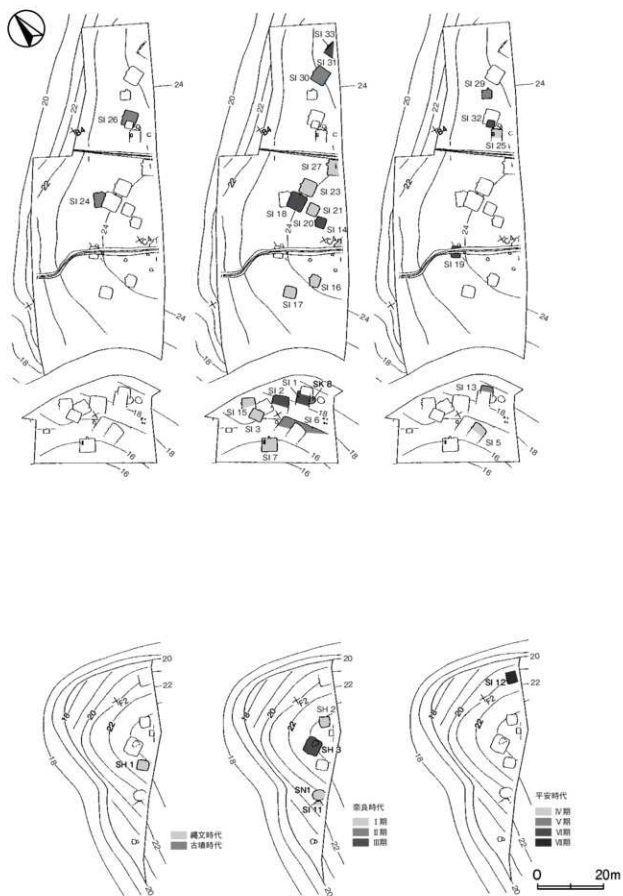
当該期の遺構としては、第19・32号住居跡の2軒が挙げられる。

土師器は高台付碗が現れ、内面黒色処理とヘラ磨きが施されている。須恵器の出土量は減少するが、甕や瓶の出土量や形状については前段階と同様である。土師器甕の口縁端部のつまみ上げがさらに顕著になる。これらの土器様相から、本期は9世紀後葉に比定できる。

平面形は長方形と方形で、主軸方向は、N-29°-EとN-34°-Eである。床面積の平均は5.8㎡である。



第92図 奈良・平安時代の土器群



第93図 根方遺跡遺構変遷図

エ. Ⅶ期

当該期の遺構としては、第12号住居跡が該当する。土師器の高台付椀に内面無調整のものが出現し、前段階よりも大きさが多様化する。土師器が器種構成の主体となり、須恵器環類の出土量は減少して行く。これらの土器様相から、本期は10世紀前半に比定できる。

平面形は長方形または方形と推測され、長軸方向はN-18°-Eで、床面積は11.4㎡である。

(5) 集落の様相

住居跡が確認できた時代は、古墳時代、奈良時代、平安時代で、この期間に集落の盛衰が見られる。住居のまとまりがとらえられるのは8世紀前葉で、2~4軒を単位としており、その後は明確なまとまりは認められなかった。平面形は方形が多く、主軸方向は8世紀前葉が北西や北東と一様でなく、8世紀中葉に北方向となり、8世紀後葉には北方向や北西方向となっている。主軸方向が一定でないのは、台地縁辺部に住居の立地場所を求めたため、地形に合わせた方向に住居を構築する必要があったことや、風向きなどが窓の構築位置に影響を与えていたためと考えられる。9世紀はおおむね北方向で、計画的に住居が配置されるようになる。床面積の平均は8世紀が19.3㎡で、9世紀になると10.2㎡と縮小しており、1軒に住居する人数が減少していることを示している。

遺跡の範囲から推察すると、集落の中心は調査区の東側に存在していた可能性が高く、奈良時代や平安時代の住居の立地状況から、8世紀の前葉に住居が最も多く存在しており、台地の縁辺部にまで集落が広がっていたと考えられる。奈良時代の住居数と比較すると、平安時代の住居数は約3分の1となり、調査区内に点在している。

浅井哲也氏は、「東国の古代集落」²⁾において奈良・平安時代の集落の構造について霞ヶ浦南岸地域の外八代遺跡、思川遺跡、柏木古墳群などの遺跡を取り上げ、古墳時代後期から集落が形成され、奈良・平安時代になると急激に増加する集落として紹介している。これらは、人口増加に伴う住居跡の増加や律令制の浸透による集落の再編成によって形成された集落と考えられている。当遺跡も、古墳時代後期から集落が形成され、奈良時代の前半に盛期を迎え、平安時代に終焉を迎えている。奈良・平安時代に盛期を迎える遺跡として、町内には竹来遺跡や宮脇遺跡があり、官衙との関連についても言及されている³⁾。当遺跡と谷を挟んで対峙する小作遺跡⁴⁾は奈良時代に盛期を迎え、平安時代にはさらに興隆を極めている。総柱や庇をもつ掘立柱建物跡など、掘立柱建物跡が数多く確認され、灰桶陶器やかな文字の書かれた墨書土器が出土しており、在地豪族の存在がうかがわれる。当遺跡は、奈良時代の前半に栄え、平安時代になると住居数が減少しており、小作遺跡の集落の盛衰と重なる時期がある。当遺跡の調査区は、遺跡全体からみると西部の一部に限定されているため遺跡の全容を明らかにすることは難しいが、谷を挟んで隣接する小作遺跡を含め、奈良時代から平安時代にかけての大きな集落が存在していたと考えられる。

3 出土瓦について

ここでは、各遺構や表面採取した瓦片について述べることにする。

(1) 当遺跡出土の瓦

当遺跡からは軒丸瓦や鬼瓦、丸瓦、平瓦が遺構外出土の破片も含めて141点出土している。遺構から出土した破片数については表10の通りで、諏訪寺院跡の推定地に最も近い遺構からは瓦片の出土量が多く、離れるにしたがって出土数は減少している。

ア 第11号住居跡・第1号粘土探掘坑出土の瓦

第11号住居跡・第1号粘土探掘坑は調査区南部に位置しており、諏訪寺院跡の推定地に近接している。第11号住居跡からは軒丸瓦、第1号粘土探掘坑からは鬼瓦が出土しており、いずれの遺構も出土遺物から8世紀初頭には廃絶されていたと考えられる。その他8世紀前葉に廃絶され瓦片の出土が見られる遺構は、第3・7号住居跡と第2号堅穴遺構である。瓦が出土している遺構は、8世紀初頭と8世紀前葉に比定されるものが中心であり、8世紀初頭以前にこれらの瓦葺きの建物が廃絶されたか、あるいは使用されなくなった瓦の一部が投棄された可能性がある。

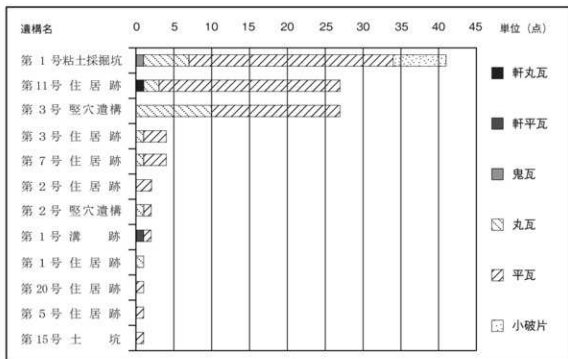
イ 出土瓦の特色 (第94図)

軒丸瓦は素縁単弁八葉花文軒丸瓦で、文様構成が類似している瓦が出土している遺跡としては、つくば市下大島遺跡が挙げられる⁵⁾。律令期にこの地域は信太郡に属しており、信太、筑波、河内の三郡は筑波国が分かれたものとされている⁶⁾。このことは、この地域で同様の瓦を使用していた可能性を示唆している。

鬼瓦は、縄目押圧による斜格子文が施されており、前代一部を除いて蓮華文鬼瓦が主流であったものが、8世紀になると鬼面文を飾るものにかかわることから⁷⁾、鬼面文が入る前の段階の鬼瓦の可能性も考えられる。なお、茨城県立歴史館には、諏訪寺院跡付近で採集された鬼瓦が寄贈されている。当遺跡出土の鬼瓦と同じ形状であるが、厚さや施文の範囲等に若干の違いが認められ、同一個体ではない。現存値は、長さ12.8cm、幅9.8cm、厚さ3.6cm、重量498.0gで、表面は縄目押圧による斜格子文が施され、裏面は布目が残っている。

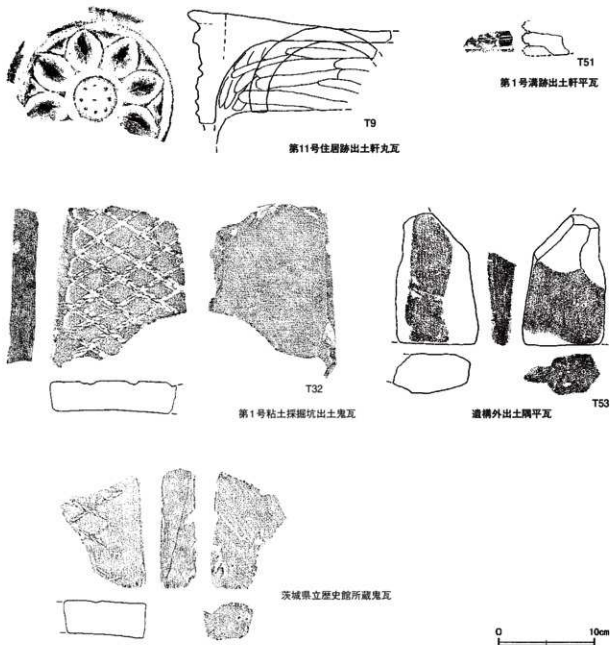
重弧文軒平瓦は、中世に位置づけられる第1号溝跡から出土しており、後世になって混入したものと考えられる。「茨城県における古代瓦の研究」⁸⁾に追原遺跡(諏訪寺院跡)から採集されたロクロ挽き三重弧文軒平瓦が記載されており、第1号溝跡出土の軒平瓦と類似している。隅平瓦は、調査区南部の

表10 出土瓦破片数



遺構確認面からの出土で、軒平瓦や鬼瓦の出土地点に近接しており、隅切りが施されている。

出土した平瓦と丸瓦の総数は、丸瓦 14 点、平瓦 41 点で、比率は 1 : 2.92 となる。平瓦は横骨痕が残る桶巻きづくりで、これらが同時期につくられたものであると仮定すれば、丸瓦と平瓦の比率から総瓦葺の建物⁹⁾の存在が考えられるが、諏訪寺院跡の発掘調査が実施されていないので、可能性の指摘にとどめておきたい。



第94図 主な出土瓦

4 むすび

以上、当遺跡の時代ごとの様相と、出土した土器類や瓦片について概要を述べてきた。当遺跡は古墳時代に集落が形成され始め、奈良時代には住居数が増え、平安時代には終焉を迎えている。住居跡は台地上のみならず斜面地にも存在し、集落が広範囲にわたっていたことが推定できる。また、出土した瓦から調査区に

隣接する諏訪寺跡には瓦葺の建物が存在していた可能性が高く、常陸国分寺の造立以前に建立された建物と推定される。調査区が遺跡全体の西端の一部のため、推測の域を脱しない部分が多いが、本報告が今後の集落や瓦研究の一助となると同時に、資料の蓄積が進むことにより、地方末端の官衙や寺院の様相が解明されることを期待してむすびとしたい。

註)

- 1) 浅井哲也「茨城県内における奈良・平安時代の土器(1)」『研究ノート』創刊号 茨城県教育財団 1992年7月
櫻村宣行「茨城県南部における鬼高式土器について」『研究ノート』2号 茨城県教育財団 1993年3月
白田正子「中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ 中原遺跡3」『茨城県教育財団文化財調査報告』第170集 2001年3月
稲田義弘「熊の山遺跡 鳥名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅶ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第190集 2002年3月
- 2) 浅井哲也「東国の古代集落」『茨城県史研究』第72号 茨城県立歴史館史料部早史編さん室 1994年3月
- 3) 川井正一「茨城県の古代官衙とその周辺」『日本考古学協会 1995年茨城大会 シンポジウム3 地方官衙とその周辺』日本考古学協会茨城大会実行委員会 1995年11月
- 4) 清水哲・舟橋理「小作遺跡 主要地方道竜ヶ崎阿見線バイパス建設事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第346集 2011年3月
- 5) 茨城県立歴史館「茨城県における古代瓦の研究」1994年3月
- 6) 茨城地方史研究会編『茨城の歴史 県南・鹿行編』茨城新聞社 2002年12月
- 7) 森郁夫「日本の古代瓦」雄山閣出版 1991年11月
- 8) 註5に同じ
- 9) 川口武彦「大串遺跡の正倉の屋根景観を考える」-大串遺跡群出土瓦の数量的検討から- 婆良岐考古同人会 2010年5月
宇野隆夫「丹波周山遺跡」京都大学文学部考古学研究室 1992年

参考文献

- ・古代瓦研究会「古代瓦研究Ⅱ」奈良文化財研究所 2005年3月
- ・千葉県市川市立市川考古博物館「市川市出土の瓦Ⅰ」1988年10月

写 真 图 版



第11号住居跡出土遺物

調査区北部全景
(北から)



調査区中央部全景
(南から)



第1号竖穴遺構
遺物出土状況



PL2



第1号竖穴遺構
遺物出土状況



第24号住居跡
完掘状況



第26号住居跡
完掘状況



第2号住居跡
遺物出土状況



第2号住居跡
完掘状況



第3号住居跡
遺物出土状況

PL4



第11号住居跡
遺物出土状況



第1号粘土採掘坑
遺物出土状況



第11号住居跡
第1号粘土採掘坑
完掘状況

第18号住居跡
完掘状況



第18号住居跡
竈完掘状況



第20号住居跡
完掘状況



PL6



第23号住居跡
遺物出土状況



第23号住居跡
完掘状況



第30号住居跡
遺物出土状況



第31号住居跡
竈完掘状況



第31・33号住居跡
遺物出土状況



第3号竖穴遺構
遺物出土状況



第3号竖穴遺構
第2号粘土探掘坑
完掘状況



第1号土坑
遺物出土状況



第5号住居跡
遺物出土状況

第5号住居跡
完掘状況



第12号住居跡
遺物出土状況



第12号住居跡
完掘状況



PL10



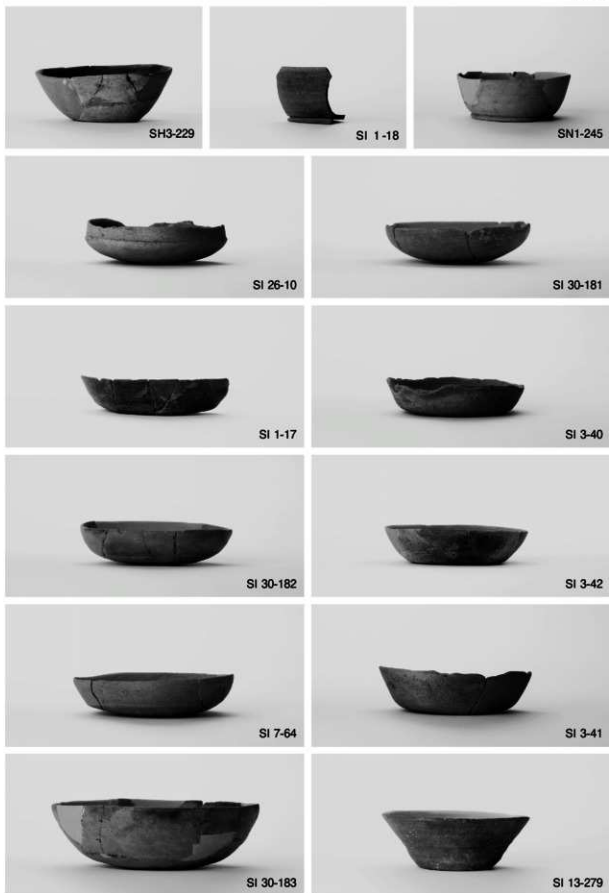
第13号住居跡
遺物出土状況



第1・13号住居跡
第8号土坑
完掘状況

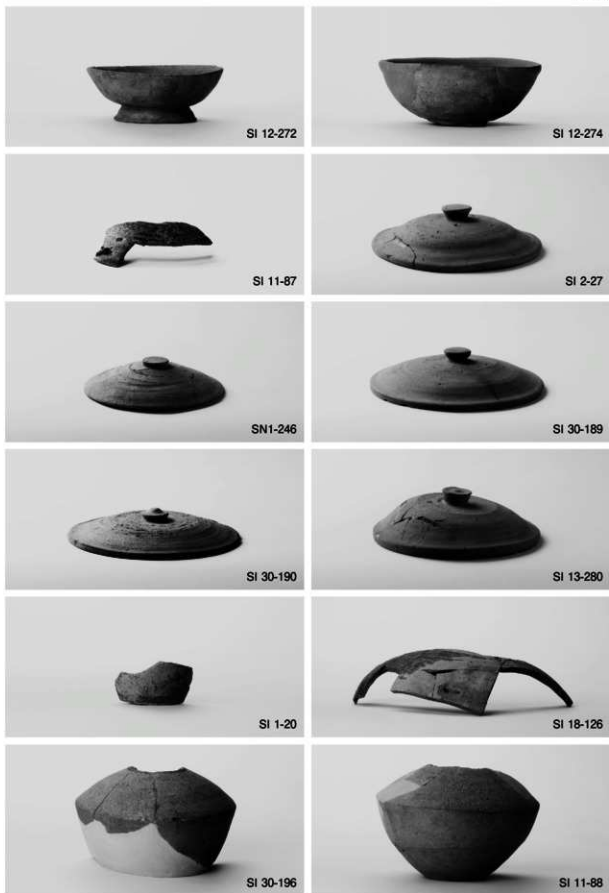


第1号溝跡
完掘状況(東から)



第1·3·7·13·26·30号住居跡，第3号竪穴遺構，第1号粘土探掘坑出土土器

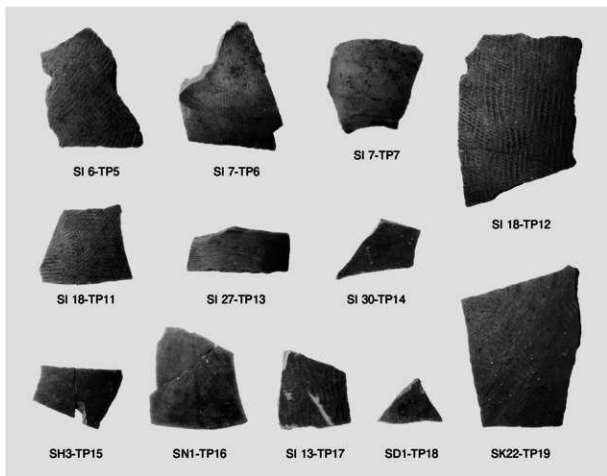




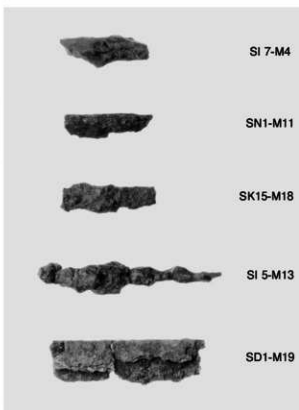
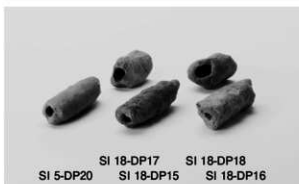
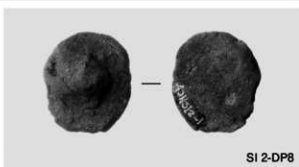
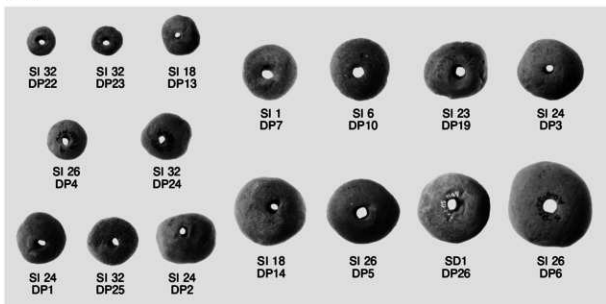
第1·2·11·12·13·18·30号住居跡，第1号粘土探掘坑出土土器



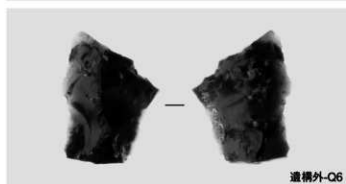
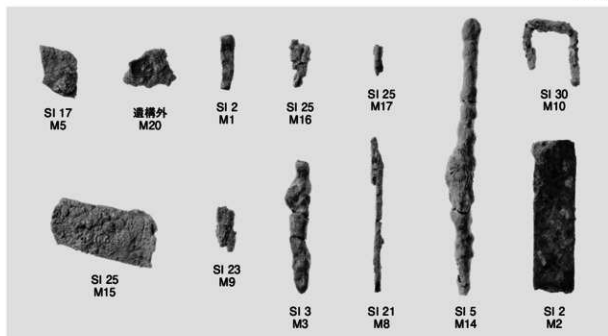
第1号住居跡，第1・3号竪穴遺構，第1号溝跡，遺構外出土土器



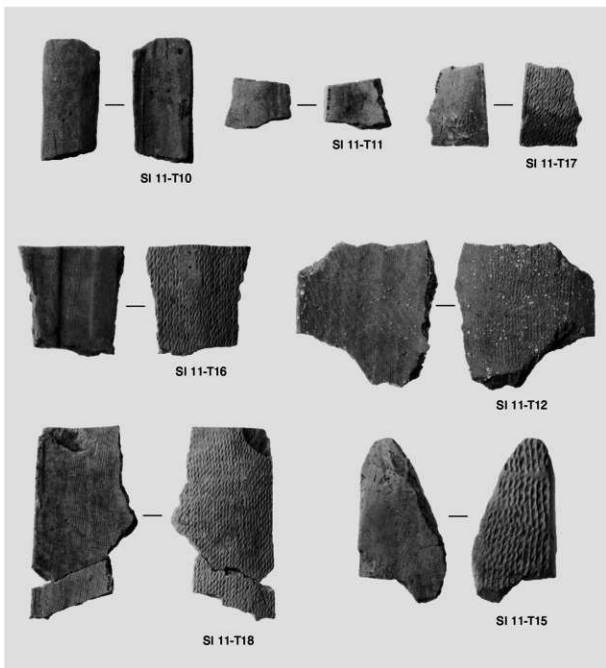
第6・7・13・18・27・30号住居跡，第1・3号竖穴遺構，第1号粘土探掘坑，第1号溝跡，第22号土坑，遺構外出土土器

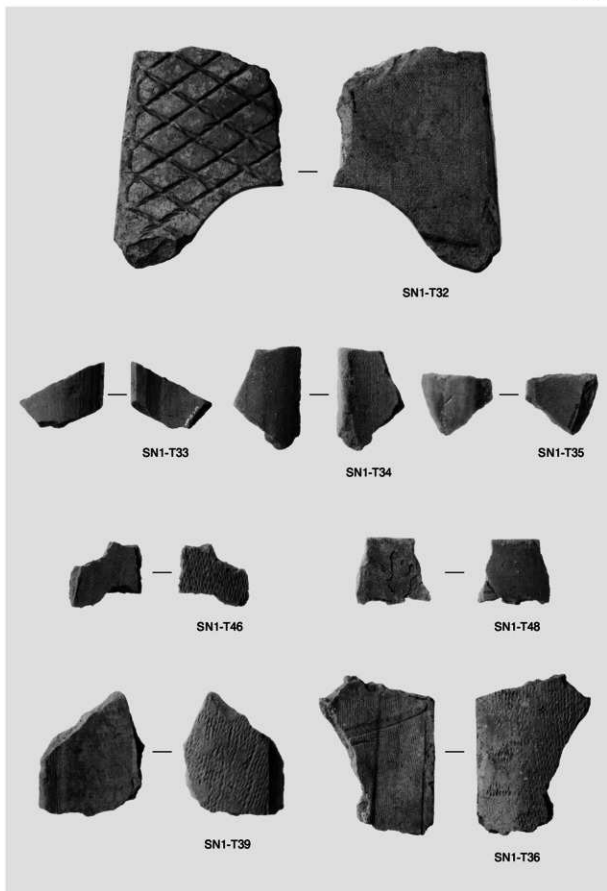


出土土製品 (土玉・管状土鍾・支脚・鏡形模造品・棒状土製品・不明土製品), 出土鉄製品 (刀子)

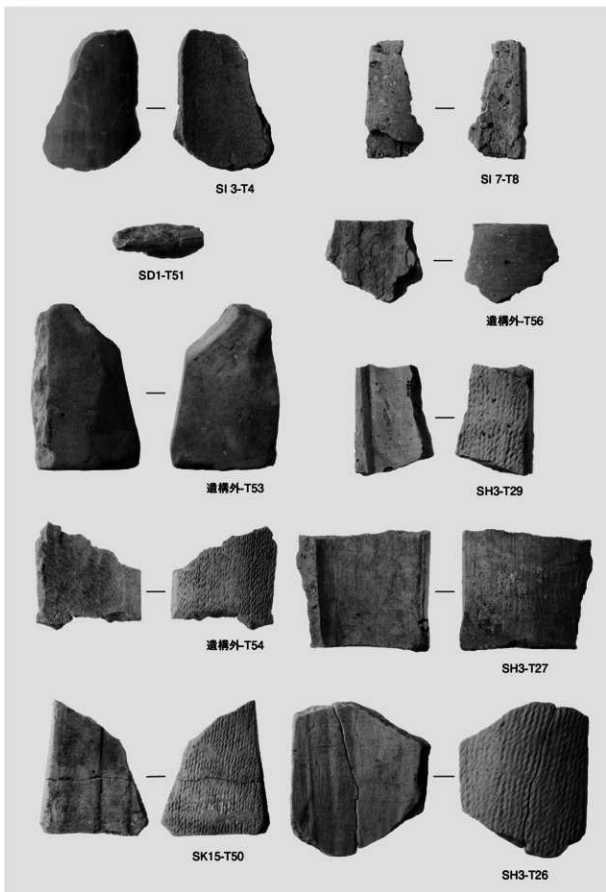


出土鉄製品（鎌・釘・鋸・棒状金具・不明鉄製品），出土石器（剥片・磨製石斧・砥石・台石カ・支脚）





第 1 号粘土探掘坑出土瓦



第3・7号住居跡，第3号竪穴遺構，第15号土坑，第1号溝跡，遺構外出土瓦

抄 録

ふりがな	ねかたいせき							
書名	根方遺跡							
副書名	主要地方道竜ヶ崎阿見線バイパス建設事業地内埋蔵文化財調査報告書							
巻次	Ⅲ							
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告							
シリーズ番号	第345集							
著者名	寺内久永 関 絵美							
編集機関	財団法人茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587							
発行日	2011(平成23)年3月23日							
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
根方遺跡	茨城県稲敷郡阿見町 大字追原字房内1454 番地5ほか	08443 - 178	36度 0分 53秒	140度 15分 12秒	16 ~ 24 m	20090511 ~ 20090930	5,480 m ²	主要地方道竜ヶ崎阿見線バイパス建設事業に伴う事前調査
所取遺跡名	種別	主な時代			主な遺物		特記事項	
根方遺跡	集落跡	縄文	竪穴遺構		1基		縄土石器(深鉢)	土師器や須恵器とともに軒丸瓦、鬼瓦、軒平瓦、隅平瓦などが出土している。これらは源訪寺院の瓦の可能性が高く、源訪寺院の建立や廃絶を考察する上で貴重な資料となる。
		古墳	竪穴住居跡		2軒		土師器(坏・碗・甕) 土製品(土玉)	
	奈良	竪穴住居跡	19軒		土師器(坏・碗・甕)		須恵器(坏・高台付坏・蓋・盤・高盤・鉢・瓶・甕・瓶) 灰釉陶器(瓶) 土製品(土玉・模造品・管状土鍾) 瓦(軒丸瓦・丸瓦・平瓦) 金属製品(刀子・鎌・釘・鏝) 石器(支脚)	
		竪穴遺構 土坑	2基 2基					
	平安	竪穴住居跡	7軒		土師器(坏・碗・高台付碗・甕)		須恵器(坏・高台付坏・蓋・盤・高盤・鉢・瓶・甕・瓶) 土製品(土玉・管状土鍾) 瓦(平瓦) 金属製品(刀子・鎌・釘) 石器(支脚)	
		土坑	2基					
	中世	溝跡	1条		土師質土器(皿・内耳鍋) 陶器(甕) 瓦(軒平瓦・平瓦)			
	生産跡	奈良	粘土採掘坑	2基		土師器(坏・甕) 須恵器(坏・蓋・瓶) 瓦(鬼瓦・丸瓦・平瓦)		
	墓跡	平安	火葬墓	1基		土師器(坏・甕) 須恵器(蓋・鉢)		
その他	時期不明	土坑 溝跡	16基 1条		土師器(坏・甕)			
要約	竪穴住居跡、竪穴遺構、粘土採掘坑、土坑、溝跡などが確認できた。集落は古墳時代に始まり、奈良時代になると住居の数が増えているが、平安時代には終焉を迎える。住居跡は、台地上のみならず斜面地にも存在し、集落が広範囲にわたっていたことが推定できる。							

印刷仕様

編集	OS	Microsoft Windows 7 Home Premium
	編集	Adobe Indesign CS4
	図版作成	Adobe Illustrator CS4
	写真調整	Adobe Photoshop CS4
	Scanning	6×7 film Nikon SUPER COOLSCAN9000 図面類 EPSON GT-X750
使用Font	OpenType	リュウミンPro・L
写真	線数	モノクロ175線以上 カラー210線以上
印刷		印刷所へは、Adobe Indesign CS4でレイアウトして入稿

茨城県教育財団文化財調査報告第345集

根 方 遺 跡

主要地方道竜ヶ崎阿見線バイパス

建設事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ

平成23(2011)年 3月17日 印刷

平成23(2011)年 3月23日 発行

発行 財団法人茨城県教育財団
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2
茨城県水戸生涯学習センター分館内
TEL 029-225-6587
HP <http://www.ibaraki-maibun.org>

印刷 佑平電子印刷所
〒970-8024 いわき市平北白土字西ノ内13番地
TEL 0246-23-9051